講座の紹介

中2 国語（光村図書 教科書対応）を受講するみなさんへ

講座の特徴

- 〈要点がコンパクトにまとまった動画〉＋〈確認テスト〉なので、スキマ時間での学校の授業の復習や定期テスト対策をするのにオススメです。
- 教科書で学習する内容に対応しています。

講師からのメッセージ

- 伝えたいのは、「Let's（レッツ）感動！」
  正しい日本語の読み方を身につけると、文章の内容がもっとわかりやすくなって、文章から受ける感動は、もっともっと大きくなるよ。
  キミも、感動への第一歩をいっしょに踏み出そう！

宮田泰三

それでは、一緒にスタディサプリで学習していきましょう！

テキストの使い方

はじめに

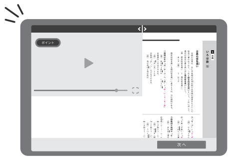
スタディサプリは、スマホやタブレット、PCを使って動画を見たり問題を解いたりすることができますが、テキストを使うと、より学びやすく、理解しやすくなります。テキストはさまざまな使い方ができるので、ぜひ自分に合った使い方をみつけて活用してください。

教科書との対応について

「光村図書　国語」の内容と対応しています。

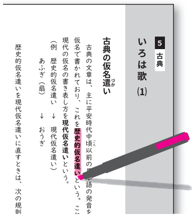
基本の使い方

ステップ1　動画をみる



※読解の講義は動画を見る前に教科書の本文を読んでおきましょう。

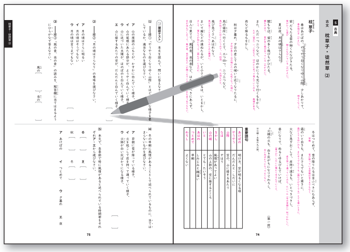
テキストはこう使う！



講師が話したことや大事だと思ったことをメモするとオリジナルのまとめノートになります。

ステップ2　確認テストを解く

テスト前のオススメの使い方



時間があればテスト範囲の講義を最初から復習しましょう。テキストはアプリやウェブで問題を解いた後の復習や、テストに近い問題形式に取り組みたい時に活用できます。

各パートの説明

6 いにしえの心にふれる

蓬莱の玉の枝 ——「竹取物語」から (2)

古文の読み方

古文では、主語や助詞などがなかったり省略されていたりする。古文を読むときは言葉を補いながら読むとよい。

（例）…竹取の翁といふ者〈が〉ありけり。〈竹取の翁は〉野山にまじりて…

重要語句

よろづ	いろいろ・全ての事
あやしがる	不思議に思う
いと	とても・たいそう
うつくし	かわいらしい
ゐる	座る・いる

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣いに直したものとなるように、解答欄に当てはまる言葉をひらがなで答えなさい。

さぬきのみやつことなむいひける

さぬきのみやつこと［　　　］

講義名

教科書の表題に対応しています。

関連する知識や、重要なポイントがまとまっています。

重要語句

教科書本文で出てくる重要語句の意味がまとまっています。
現代文の重要語句一覧は巻末にあります。

確認テスト

動画で説明した内容について問題が出題されます。
解答は別冊で確認できます。
※解説を確認したい場合はアプリでご確認ください。

目次

文法基礎 P006

1 広がる学びへ
アイスプラネット P014
文法への扉１　単語をどう分ける？（自立語） P026
枕草子 P034

2 多様な視点から
クマゼミ増加の原因を探る P040
漢字１　熟語の構成 P048

3 言葉と向き合う
短歌に親しむ P052
短歌を味わう P056
言葉の力 P058
言葉１　類義語・対義語・多義語 P062

いつも本はそばに
翻訳作品を読み比べよう P064

4 人間のきずな
ヒューマノイド P066
字のない葉書 P072
言葉２　敬語 P076
漢字２　同じ訓・同じ音をもつ漢字 P080

5 論理を捉えて

モアイは語る――地球の未来　P084
聴きひたる　月夜の浜辺　P092

6 いにしえの心を訪ねる

音読を楽しむ　平家物語　P094
「平家物語」の世界／「平家物語」の主な登場人物たち　P096
扇の的――「平家物語」から　P098
仁和寺にある法師――「徒然草」から　P104
漢詩の風景　P108

7 価値を語る

君は「最後の晩餐」を知っているか　P118
「最後の晩餐」の新しさ　P124
文法への扉２　走る。走らない。走ろうよ。（用言の活用）　P128

8 表現を見つめる

走れメロス　P136
文法への扉３　一字違いで大違い（付属語）　P150
〈助動詞活用表〉　P158
言葉３　話し言葉と書き言葉　P160
漢字３　送り仮名　P162
鍵　P166

重要語句一覧　P168

文節

文を自然な発音や意味となる範囲（はんい）でできるだけ短く区切ったまとまりを**文節**という。

〈文〉　鳥が空を飛ぶ。

〈文節〉　鳥が（文節）／空を（文節）／飛ぶ。（文節）

※文に「ネ」を入れて区切ってみるとよい。

文節は、文の中での働きによって、主語・述語・修飾（しゅうしょく）語・接続語・独立語などに分けられる。

①主語・述語

「何（だれ）が」を表す文節を主語、「どうする」「どんなだ」「何だ」「ある（いる）・ない」を表す文節を述語という。

（例）　鳥が（主語）　／　飛ぶ。（述語）

②修飾語

「何の」「どんな」「いつ」「どこで」「何を」「どのように」など、他の部分をくわしく説明する文節を修飾語という。

（例）　白い（修飾語）　／　鳥が　／　青い（修飾語）　／　空を（修飾語）　／　飛ぶ　。

③接続語

文や文節をつなぐ文節を接続語という。

（例）　晴れた。　／　だから、（接続語）　／　外で　／　遊んだ。

④独立語

他の文節と直接は結びつかない文節を独立語という。

（例）　ああ、（独立語）　／　すばらしい　／　景色だ。

確認テスト

(1) 次の文を文節に分け、斜線（／）で区切りなさい。

庭 で ス ズ メ が 鳴 く 。

(2) 次の①～⑤の各文の――線部の文節の種類を、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。

① 空に美しい虹がかかる。〔　　〕
② 街に強い風が吹いた。〔　　〕
③ おや、あれは何だ。〔　　〕
④ 急いだ。しかし、遅れた。〔　　〕
⑤ この建物は図書館です。〔　　〕

ア 主語　**イ** 述語　**ウ** 修飾語
エ 接続語　**オ** 独立語

(3) 例に従って、次の文に含まれる主語に＝線を、述語に――線を引きなさい。

（例）赤い 花が 咲く。

今日、私は 電車で 博物館に 行った。

(4) 次の～～線部の修飾語は、どの文節を修飾しているか。記号で答えなさい。

私は 昨日、公園で 友達に 会った。

ア 私は　**イ** 昨日　**ウ** 友達に　**エ** 会った

〔　　〕

文法基礎 (2)

単語

それだけで意味をもつ最も小さな言葉の単位を**単語**という。

〈文節〉鳥が（文節）／青い（文節）／空を（文節）／飛ぶ（文節）。

〈単語〉鳥（単語）／が（単語）／青い（単語）／空（単語）／を（単語）／飛ぶ（単語）。

●自立語・付属語

単語は、大きく、自立語と付属語に分けられる。

・**自立語**…単独で文節を作ることができる単語。その単語だけで言葉のイメージが浮かぶことが多い。

・**付属語**…単独では文節を作ることができず、自立語と共に使われる単語。その単語だけでは言葉のイメージが浮かばないことが多い。

（例）鳥（自）が（付）／空（自）を（付）／飛ぶ（自）。　おにぎり（自）を（付）／食べ（自）た（付）。

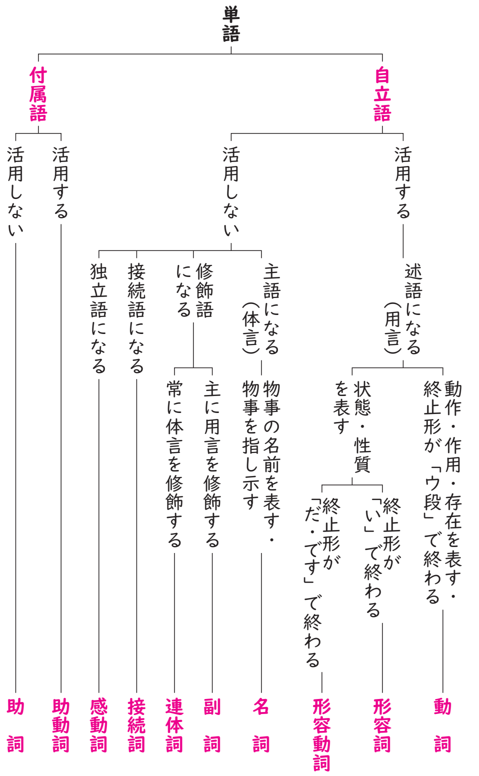
●活用

文中で、言葉の組み合わせに応じて単語の形が変化することを、**活用**という。

（例）
話す＋た　→　話した
明るい＋た　→　明るかった
静かだ＋た　→　静かだった
走ります＋た　→　走りました

●品詞

単語を分類したものを**品詞**という。単語は10種類の品詞に分けられる。



確認テスト

(1) 次の文を単語に分け、斜線(しゃせん)(／)で区切りなさい。

庭でスズメが鳴く。

(2) 例に従って、次の文の自立語を□で囲み、付属語に——線を引きなさい。

(例) 鳥 が 空 を 飛ぶ。

私は自転車で駅に行く。

(3) 次の①~④の品詞が、自立語なら**ア**、付属語なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

① 名詞〔　　〕　② 動詞〔　　〕

③ 助詞〔　　〕　④ 助動詞〔　　〕

(4) 次の文の(　　)に当てはまるように、「歩く」という単語の形を変化させなさい。

私は毎朝、公園を(　　)ます。

〔　　〕

(5) 次の文の(　　)に当てはまるように、「白い」という単語の形を変化させなさい。

雪で外が(　　)なった。

〔　　〕

用言

自立語の中で、**活用があり**、**単独で述語になる**ことができるものを**用言**という。品詞では、**動詞**・**形容詞**・**形容動詞**が用言にあたる。

（例）花が咲く。　花が赤い。　花がきれいだ。

●**動詞**………動作・作用・存在を表す。言い切りが「**ウ段**」で終わる。

（例）話す・咲く・いる

●**形容詞**……状態・性質を表す。言い切りが「**い**」で終わる。

（例）明るい・楽しい・赤い

●**形容動詞**…状態・性質を表す。言い切りが「**だ・です**」で終わる。

（例）静かだ　・きれいだ　・立派だ
　　　静かです・きれいです・立派です

体言

自立語の中で、活用がなく、**主語になる**ことができるものを**体言**という。品詞では、**名詞**が体言にあたる。

（例）空が青い。

●**名詞**………物事の名前を表す。物事を指し示す。活用しない。

（例）山・私・これ

・品詞分類表

- 単語
  - **自立語**
    - 活用する
      - 述語になる（用言）
        - 動作・作用・存在を表す・終止形が「ウ段」で終わる — **動詞**
        - 状態・性質を表す
          - 終止形が「い」で終わる — **形容詞**
          - 終止形が「だ・です」で終わる — **形容動詞**
    - 活用しない
      - 主語になる（体言）— 物事の名前を表す・物事を指し示す — **名詞**
      - 修飾語になる
        - 主に用言を修飾する — **副詞**
        - 常に体言を修飾する — **連体詞**
      - 接続語になる — **接続詞**
      - 独立語になる — **感動詞**
  - **付属語**
    - 活用する — **助動詞**
    - 活用しない — **助詞**

確認テスト

(1) 次の各品詞が、用言なら**ア**、体言なら**イ**、それ以外であれば**ウ**で、それぞれ答えなさい。

① 形容詞〔　　〕　② 形容動詞〔　　〕

③ 助詞〔　　〕　④ 動詞〔　　〕

⑤ 副詞〔　　〕　⑥ 名詞〔　　〕

(2) 次の①～⑥の品詞を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① 美しい〔　　〕　② 読む〔　　〕

③ 辞書〔　　〕　④ のどかだ〔　　〕

⑤ 見る〔　　〕　⑥ 海〔　　〕

ア 動詞　**イ** 形容詞　**ウ** 形容動詞　**エ** 名詞

(3) 例に従って、次の――線部の単語を言い切りの形に直しなさい。

（例）話した　→　〔話す〕

動きます。〔　　　　〕

(4) 例に従って、次の――線部の単語を言い切りの形に直しなさい。

（例）明るかった　→　〔明るい〕

うれしくなる。〔　　　　〕

その他の自立語

●**副詞**……状態や程度などを表す。主に用言を修飾（しゅうしょく）する。

（例）ゆっくり　歩く（用言）。　とても　多い（用言）。

●**連体詞**…常に体言を修飾する。

（例）この　花（体言）　大きな　木（体言）

●**接続詞**…前後の文や語をつなぐ。接続語になる。

（例）だから・しかし

●**感動詞**…感動・呼びかけ・挨拶（あいさつ）・応答を表す。独立語になる。

（例）ああ・ねえ・おはよう・はい

付属語

●**助詞**……自立語の後に付いて、語句と語句の関係を示したり、意味を付け加えたりする。活用しない。

（例）鳥が飛ぶ。　私も笑う。　強くて優しい。　何ですか。

●**助動詞**…用言・体言や他の助動詞などに付いて、意味を付け加えたり、話し手の判断を示したりする。活用する。

（例）走らない。　走った。　中学生だ。

・品詞分類表

- 単語
  - **自立語**
    - 活用する
      - 述語になる（用言）
        - 動作・作用・存在を表す・終止形が「ウ段」で終わる — **動詞**
        - 状態・性質を表す
          - 終止形が「い」で終わる — **形容詞**
          - 終止形が「だ・です」で終わる — **形容動詞**
    - 活用しない
      - 主語になる（体言） — 物事の名前を表す・物事を指し示す — **名詞**
      - 修飾語になる
        - 主に用言を修飾する — **副詞**
        - 常に体言を修飾する — **連体詞**
      - 接続語になる — **接続詞**
      - 独立語になる — **感動詞**
  - **付属語**
    - 活用する — **助動詞**
    - 活用しない — **助詞**

確認テスト

(1) 次の①～④の――線部が、副詞なら**ア**、連体詞なら**イ**、それ以外なら**ウ**で、それぞれ答えなさい。

① あの山。〔　　〕　② 高い山。〔　　〕

③ 早く起きる。〔　　〕　④ いきなり起きる。〔　　〕

(2) 例に従って、次の～～線部の副詞が修飾している文節に――線を引きなさい。

（例）ゆっくり　話す。

私たちは　のんびり　公園を　歩いた。

(3) 例に従って、次の文に含(ふく)まれる連体詞に～～線を引きなさい。

（例）この　花。

私はそんな話は知りません。

(4) 次の各文の――線部が、接続詞なら**ア**、感動詞なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

① もう出発の時間になった。さあ、そろそろ出かけようか。

② みんなで落とし物を探した。ところが、どこにも見つからない。

①〔　　〕　②〔　　〕

(5) 例に従って、次の文に含まれる助詞・助動詞に――線を引きなさい。

（例）白い　鳥　が　飛ん　だ。

私　は　毎　朝、リ　ン　ゴ　を　食　べ　ま　す。

アイスプラネット（1）

椎名 誠

僕のおじさんは「ぐうちゃん」という。津田由起夫三十八歳。いそうろう。

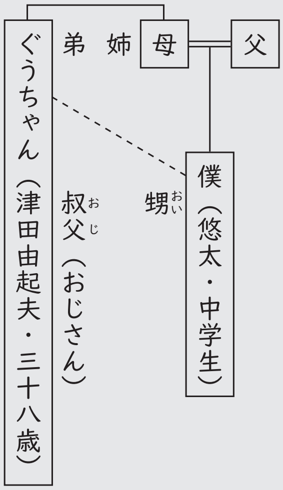
僕の母親の弟だ。いつも母に怒られている。学生の頃に外国のいろんな所を旅していたらしく、気づいたときには僕の家に住み着いていた。そして、長いこと「ぐうたら」しているから、いつのまにか「ぐうちゃん」というあだ名になってしまった。でも、ぐうちゃんは変わった人で、そう言われるとなんだかうれしそうだ。それを見て僕の母はまた怒る。怒るけど「これ、ぐうちゃんの好物。」なんて言いながら、ご飯の支度をしているから母もちょっと変わっている。

（中略）

ぐうちゃんは、家にいるときはたいてい本を読んでいるか、唯一のタカラモノであるカメラの掃除、点検などをしている。全く「ぐうたら」ばかりでもなくて、たまに一週間ぐらい留守にするときもある。ぐうちゃんにきくと、そんなときは、全国を回って測量の仕事をしているという。一度、家に持って帰った測量の道具を見せてもらったけれど、すごく精密な望遠鏡という感じだった。レンズの中をのぞくと中にいっぱい目盛りが付いていて、ダイヤルでピントを合わせる。いかにもプロの人の道具みたいで格好いい。かといって、ぐうちゃんは、測量の専門家でもないらしい。僕の母は、ぐうちゃんのそういう落ち着かない仕事のしかたが気に入らないようだ。「ちゃんと就職して早く独立しなさい。そうして『いそうろう』から卒業しなさい。」といつも怒る。

登場人物の設定

物語や小説を読むときは、登場人物の設定を整理しながら読みすすめるとよい。登場人物が多い場合は、関係性を図にまとめると理解しやすい。



・僕……………中学生。東京の西の郊外の家に住んでいる。
　ぐうちゃんが大好き。

・ぐうちゃん…三十八歳。いそうろう。
　たまに測量の仕事をしている。

・母……………ぐうちゃんとは姉弟の関係。ぐうちゃんの落ち着かない仕事のしかたが気に入らず、いつも怒る。

・父……………単身赴任で仙台にいて、週末に帰ってくる。
　ぐうちゃんのいそうろうを歓迎している。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 「僕のおじさん」が「ぐうちゃん」と呼ばれている理由を、本文中から十五字以上二十字以内で書きぬきなさい。ただし記号も字数に含む。

(2) 「いそうろう」の意味を選びなさい。

ア ある家に古くから住んでいる人。
イ ときどき家を留守にして働きにでる人。
ウ 他人の家に住んで養ってもらっている人。
エ 転勤のため、家族と離れて一人で暮らす人。

〔　〕

(3) 「ぐうちゃん」の説明として正しいものを選びなさい。

ア 「僕」の父の弟で、「僕」のおじさんに当たる。
イ 学生の頃に外国をいろいろと旅していたらしい。
ウ 測量の専門家で、いつも測量で全国を回っている。

〔　〕

(4) 「僕」の母は、ぐうちゃんの何が気に入らず、いつも怒っているのか。本文中から十二字で書きぬきなさい。

(5) 「僕」の母が、いつも怒りながらも、ぐうちゃんに対して愛情をもっていることがわかる一文を本文中から探し、その最初の三字を答えなさい。

アイスプラネット（2）

椎名 誠

（「僕（ぼく）」はぐうちゃんの「ほら話」が大好きで、よくぐうちゃんの部屋に話を聞きに行きます。ある日の夕食後、アマゾンにいるという、馬を飲み込（こ）んでしまうアナコンダや、三メートルもあるナマズの話を聞いていた「僕」は、なんだかばかばかしくなり、気のない返事をしました。）

「あ、信じてないだろう。じゃあがらっと変わって、①きれいで小さい宇宙の話をしようか。」

　ぐうちゃんは話の作戦を変えてきた。宇宙の話は好きだ。例えば宇宙には果てがあるのか、とか二重太陽のある星の話とかだ。ところが、ぐうちゃんの話は、地球の中の宇宙の話だった。

「北極には、一年に一度流氷が解けるときに小さな氷の惑星（わくせい）ができるってイヌイットの間ではいわれている。アイスプラネットだ。めったに現れないので、それを見た者はその年いいことがいっぱいあるといわれている。」

「童話か何かの話？」

「いや、本当にある話だよ。見ることのできた者を幸せにするという、地球の中にある小さな美しい氷の惑星。いい話だろ。」

「やっぱりありえねえ。俺（おれ）、風呂（ふろ）の時間だし。」

　ぐうちゃんは続けて話したそうだったけれど、母親が風呂に入れと大きい声で呼んだので、②それを口実に逃（に）げることにした。ぐうちゃんは、やっぱり今どきの中学生をなめているのだ。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「きれいで小さい宇宙の話」とあるが、これはどのような話か。適当なものを選びなさい。

ア 宇宙に果てはあるかという話。
イ 二重の太陽をもつという星の話。
ウ 北極にできるという氷の惑星の話。

〔　　〕

(2) ぐうちゃんが話す「アイスプラネット」の説明として、正しいものを選びなさい。

ア 北極で一年中見られるもので、流氷が解けるときにできる。
イ イヌイットの間で伝わる話で、見た者を幸せにするという。
ウ 地球の外にある小さな美しい氷の惑星で、めったに現れない。

〔　　〕

(3) ――線②「それを口実に逃げることにした」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 母から風呂に入るよう言われたことを言い訳に、話を切り上げることにしたということ。
イ ぐうちゃんと話を続けたかったが、母が呼ぶので話を続けられなくなってしまったということ。
ウ アイスプラネットの話がいい話だとは思わなかったが、本心を隠して言い逃れることにしたということ。

〔　　〕

(4) アイスプラネットの話に対して「僕」はどのように感じたか。適当なものを選びなさい。

ア 今まで聞いたこともない話で、興味深く感じた。
イ 信じられない話で、自分を子供扱いしていると感じた。
ウ 引き込まれるように美しい話で、童話のように感じた。
エ 怪しい話だが、いつものようにおもしろいと感じた。

〔　　〕

アイスプラネット (3)

椎名 誠

（夏休みになってすぐ、ぐうちゃんは関東地方の各地の川の測量に出かけました。）

　夏休みも終わり近く、いつものように週末に帰ってきた父と母が話しているのが、風呂場にいる僕の耳にも入ってきた。

「僕たちは、都市のビルの中にいるからなかなか気がつかないけど、由起夫君は若い頃に世界のあちこちへ行っていたから、日本の中にいたら気がつかないことがいっぱい見えているんだろうね。なんだか羨ましいような気がするな。」

　母は、珍しくビールでも飲んだらしく、いつもよりもっと強烈に雄弁になっている。

「あなたは何を①<u>のんきなこと</u>を言っているの。由起夫が、いつまでもああやって気ままな暮らしをしているのを見ていると、悠太に悪い影響が出ないか心配でしかたがないのよ。例えば極端な話、大人になっても毎日働かなくてもいいんだ、なんて思って勉強の意欲をなくしていったとしたら、どう責任取ってくれるのかしら。」

　父が何かを答えているようだったが、はっきりとは聞こえなかった。ただ、僕のことでぐうちゃんが責められるのは少し違う気がする。そう思うと、②<u>電気の消えたぐうちゃんの部屋が急に寂しく感じられてきた</u>。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文が、「父」と「母」、それぞれのぐうちゃんに対する思いを説明した文となるように、(　　)に当てはまる言葉を**A**は四字、**B**は七字で、それぞれ本文中から書きぬきなさい。

「父」は、世界のいろいろな所を旅し、日本の中にいたら気がつかないようなことが見えているぐうちゃんを、(**A**)と感じている。一方、「母」は、ぐうちゃんの(**B**)が「僕」に悪い影響を与えるのではないかと心配している。

A □□□□

B □□□□□□□

(2) ――線①「のんきなこと」とあるが、なぜ「のんき」だと言っているのか。適当なものを選びなさい。

ア　「僕」に会話が聞こえているかもしれないのに、「僕」の受け取り方を考えないような発言だったから。

イ　「僕」に悪い影響が出るかもしれないと心配しているのに、そういうことに考えの及んでいない発言だったから。

ウ　ぐうちゃんが世界のあちこちに行っているとしても、日本にいては気づかないことが見えるとは限らないから。

〔　　〕

(3) ――線②「電気の消えた……寂しく感じられてきた」とあるが、このときの「僕」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　自分に悪影響があるという理由でぐうちゃんが非難されていることに、納得のいかないものを感じている。

イ　父と母それぞれの思いを知り、意欲をもって視野を広げていこうとこれまでの考えを改めている。

ウ　母の発言から、自分とぐうちゃんの生き方には大きな違いがあることに思い至っている。

〔　　〕

アイスプラネット(4)

椎名 誠

(九月の新学期が始まってしばらくした頃、ぐうちゃんは「僕」の家に帰ってきました。)

残暑が厳しい日だった。久しぶりにぐうちゃんのほら話を聞きたいと思った。①またからかわれてもいい。暑いから、今度は寒い国の話が聞きたい感じだ。

ところが、ぐうちゃんの話は、でっかい動物のでも、暑い国のでも、寒い国の話でもなかった。

「旅費がたまったから、これからまた外国をふらふらしてくるよ。」

ぐうちゃんは突然そう言った。※「でもまあもう少し。」にはこんな意味があったのか。ぐうちゃんはいつもと変わらずに話を続けている。それなのに、ぐうちゃんの声はどんどん遠くなっていく。気がつくと、僕はぶっきらぼうに言っていた。

「②勝手に行けばいいじゃないか。」

ぐうちゃんは、そのときちょっと驚いた表情をした。何かを話しかけようとするぐうちゃんを残して僕は部屋を出た。

それ以来、僕は③二度とぐうちゃんの部屋には行かなかった。

※「でもまあもう少し。」…以前ぐうちゃんは、いそうろうから卒業するように言う母に対し、「でもまあもう少し。」と答えていた。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線①「またからかわれてもいい」とあるが、なぜからかわれてもいいと思ったのか。適当なものを選びなさい。

ア　ぐうちゃんはいつもほら話しかしないので、からかわれることを気にしてもしかたがないから。

イ　たとえからかわれるとしても、ぐうちゃんの話を久しぶりに聞きたいと感じているから。

ウ　寒い国の話がどうしても聞きたいので、少しくらいからかわれてもがまんしようと思ったから。

〔　　〕

(2)　――線②「勝手に行けばいいじゃないか」とあるが、「僕」はなぜこう言ったのか。適当なものを選びなさい。

ア　ぐうちゃんの話が自分に関わりのないものだと思い、別の話題に切り替え（か）たいと思ったから。

イ　ぐうちゃんから寒い国の話を聞きたいと思っていたのに、いつもと変わらない話を続けられて困惑（こんわく）したから。

ウ　ぐうちゃんが外国に行ってしまうことを受け入れられず、「僕」の気持ちにおかまいなしの様子に怒（いか）りがわいたから。

〔　　〕

(3)　――線③「二度とぐうちゃんの部屋には行かなかった」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　ぐうちゃんがいなくなってしまうことがつらく、素直（すなお）に顔を合わせることができなかったから。

イ　ぐうちゃんが忙（いそが）しいだろうと思い、話をするためだけに部屋に行くのをためらったから。

ウ　ぐうちゃんが何を話しかけようとしていたのか見当がつかず、声をかけづらかったから。

〔　　〕

アイスプラネット(5)

椎名 誠

(十月の初め、ぐうちゃんは「いそうろう」を卒業し、外国へと旅立ちました。)

　ぐうちゃんから外国のちょっとしゃれた封筒で僕に手紙が届いたのは、それから四か月ぐらいたってからだった。珍しい切手がいっぱい貼ってあった。

「あのときの話の続きだ。以前若い頃に、北極まで行ってイヌイットと暮らしていたことがあるんだ。そのとき、アイスプラネットを見に行こう、と友達になったイヌイットに言われてカヌーで北極海に出た。アイスプラネット。わかるだろう。氷の惑星だ。それが北極海に本当に浮かんでいたんだ。きれいだったよ。厳しい自然に生きている人だけが目にできる、もう一つの宇宙なんだな、と思ったよ。地上十階建てのビルぐらいの高さなんだ。そして、海の中の氷は、もっともっとでっかい。悠君にもいつか見てほしい。若いうちに勉強をたくさんして、いっぱい本を読んで、いっぱいの『不思議アタマ』になって世界に出かけていくとおもしろいぞ。世界は、楽しいこと、悲しいこと、美しいことで満ち満ちている。誰もが一生懸命生きている。それこそありえないほどだ。それを自分の目で確かめてほしいんだ。」

　手紙には、ぐうちゃんの力強い文字がぎっしり詰まっていた。

　そして、封筒からは写真が二枚出てきた。一枚は人間の倍ぐらいあるでっかいナマズの写真。もう一枚は、北極の海に浮かぶ、見た者を幸せにするという氷の惑星の写真だった。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ぐうちゃんは、自分の目で見た「アイスプラネット」をどのようなものだと感じたのか。本文中から二十五字以上三十字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

□□□～□□□

(2) ――線部「それ」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア アイスプラネットは決してほら話などではなく、ありえないほど大きなものなのだということ。

イ 若いうちに本をたくさん読めば、本を通じて世界についての知識も得ることができるということ。

ウ 世界は楽しいこと、悲しいこと、美しいことで満ちていて、みんなその中で懸命に生きていること。

〔　　〕

(3) ぐうちゃんからの手紙と写真を見た「僕」の気持ちとして、適当なものを選びなさい。

ア アイスプラネットの話が本当であったと知り、ほら話だと思っていたことを反省している。

イ アイスプラネットが本当にあることを知り、見た者を幸せにするという言い伝えに興味を引かれている。

ウ ぐうちゃんの考え方や生き方を知り、ぐうちゃんが自分に伝えようとした強い思いを感じている。

エ ぐうちゃんとの思い出を振り返り、ぐうちゃんがいなくなった寂しさを改めて感じている。

〔　　〕

アイスプラネット(6)

椎名 誠

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

場面１	場面２	場面３
登場人物の設定 ・ぐうちゃん…「僕」の叔父。いそうろう。 ・僕（悠太）…ぐうちゃんの話が好き。 ・母………ぐうちゃんの落ち着かない仕事のしかたが気に入らない。 ・父………単身赴任で、週末に帰ってくる。ぐうちゃんのいそうろうを歓迎している。	**ある日の夕食後（ぐうちゃんの話）** 「僕」はぐうちゃんから、馬を飲み込んでしまうアナコンダや、三メートルもあるナマズ、アイスプラネットの話を聞いた。 （「僕」の気持ちの変化） 怪しさがやっぱりおもしろい。 ↓ 「僕」を子供扱いしているようで頭にくる。	**ぐうちゃんの話を聞いた日の翌日** 学校に行く途中、同じクラスの吉井と今村に、ぐうちゃんから聞いた話をしたが、「ありえねえ。」「証拠見せろよ。」と言われてしまった。 家に帰り、ぐうちゃんに証拠の写真を求めた「僕」は、写真を整理したら見せると言われ、ぐうちゃんが言い逃れをしていると感じた。

	場面４	場面５
夏休みになってすぐ ぐうちゃんは長い仕事に出たが、「僕」は気にも留めなかった。 **夏休みの終わり近く（父と母の会話）** ・父…ぐうちゃんは日本の中にいたら気がつかないことが見えていて羨ましい。 ・母…ぐうちゃんの気ままな暮らしが「僕」に悪い影響を与えないか心配。 「僕」は自分のことでぐうちゃんが責められるのは少し違うと思い、電気の消えたぐうちゃんの部屋が寂しく感じられた。	**九月の新学期が始まってしばらくした頃** ぐうちゃんが帰ってきた。久しぶりにぐうちゃんのほら話を聞きたいと思ったが、ぐうちゃんは突然、外国に行くと言った。 「僕」は「勝手に行けばいいじゃないか。」とぶっきらぼうに言い、二度とぐうちゃんの部屋に行かなかった。 **十月の初め** ぐうちゃんは「いそうろう」を卒業し、「僕」に力の籠もった握手をして家を出ていった。	**四か月ぐらいたってから（ぐうちゃんからの手紙）** 手紙にはぐうちゃんの力強い文字がぎっしり詰まっていた。封筒からは、人間の倍くらいあるナマズの写真と、氷の惑星の写真が出てきた。

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の各文を、本文の流れに沿って並べかえなさい。

ア ある日の夕食の後、「僕」はぐうちゃんからアイスプラネットの話を聞いた。

イ ぐうちゃんから封筒が届き、中からアイスプラネットの写真が出てきた。

ウ 九月、「僕」はぐうちゃんが外国に行くと聞き、ぐうちゃんの部屋に行かなくなった。

エ 学校に行く途中、「僕」は同じクラスの友達にぐうちゃんから聞いた話をした。

〔　　→　　→　　→　　〕

(2) 次の各文を、本文の流れに沿って並べかえなさい。

ア ぐうちゃんの手紙には力強い文字がぎっしり詰まっていた。

イ ぐうちゃんは「僕」に力の籠もった握手をして家を出ていった。

ウ 「僕」は電気の消えたぐうちゃんの部屋が寂しく感じられた。

エ 「僕」はぐうちゃんに自分の人生がからかわれたと感じた。

〔　　→　　→　　→　　〕

(3) 本文の内容に合うものを二つ選びなさい。

ア 「僕」の母は、「僕」にぐうちゃんの話をよく聞いて勉強してほしいと思っている。

イ 「僕」の母は、ぐうちゃんの気ままな暮らしが「僕」に悪い影響を与えないか心配している。

ウ 「僕」の父は、ぐうちゃんが日本にいたら気づかないことが見えていることを羨ましいと感じている。

エ 「僕」の父は、ぐうちゃんがいつまでも気ままな暮らしをしていることを羨ましいと感じている。

〔　　・　　〕

用言

自立語の中で、**活用があり、単独で述語になる**ことができるものを**用言**という。品詞では、動詞・形容詞・形容動詞が用言に当たる。

●**動詞**………動作・作用・存在を表す。言い切りが「**ウ段**」で終わる。

（例）話す・咲く・いる

動詞は自動詞と他動詞に分けられる。

・**自動詞**…動作の対象「〜を」をとらない動詞。

（例）人が集まる。　ものが壊れる。　花が咲く。

・**他動詞**…動作の対象「〜を」をとる動詞。

（例）人を集める。　ものを壊す。　本を読む。

●**形容詞**……状態・性質を表す。言い切りが「**い**」で終わる。

（例）明るい・楽しい・赤い

●**形容動詞**…状態・性質を表す。言い切りが「**だ**・**です**」で終わる。

（例）静かだ　・きれいだ　・立派だ
　　　静かです・きれいです・立派です

補助動詞・補助形容詞

動詞のうち、上の語に意味を補う、本来の意味が薄れた動詞を、**補助動詞**（形式動詞）という。

（例）人が　歩いて　いる。（補助動詞）

※補助動詞「いる」は、「存在する」という元の意味が薄れ、今動作が継続しているという意味を補う働きをしている。

補助動詞は主に「〜て（で）＋補助動詞」の形で用いられる。

（例）〜て　いる　　〜て　ある　　〜て　みる
　　　〜て　くる　　〜て　いく　　〜て　おく
　　　〜て　あげる　〜て　もらう

形容詞のうち、上の語に意味を補う、本来の意味が薄れた形容詞を、**補助形容詞**（形式形容詞）という。

（例）リンゴが　赤く　ない。（補助形容詞）

補助形容詞には「ない・よい・ほしい」などがあり、主に次の形で用いられる。

・形容詞（形容動詞）＋補助形容詞「ない」
・〜て（で）＋補助形容詞

（例）〜て　ない　　〜て　よい　　〜て　ほしい

確認テスト

(1) 次の①～⑥が、動詞なら**ア**、形容詞なら**イ**、形容動詞なら**ウ**で、それぞれ答えなさい。

① 近い　② 行く
③ 元気だ　④ のどかです
⑤ 書く　⑥ うれしい

(2) 次の①～④の動詞が、自動詞なら**ア**、他動詞なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

① 動く　② 動かす
③ 変える　④ 変わる

(3) 次の中から、――線部が補助動詞であるものを三つ選びなさい。

ア とりあえずやってみる。　**イ** 美術館で絵画を見る。
ウ メモを机の上に置く。　**エ** 楽しみをとっておく。
オ お土産を学校でもらう。　**カ** お菓子(かし)を買ってもらう。

(4) 次の中から、――線部が補助形容詞であるものを二つ選びなさい。

ア 問題は難しくない。　**イ** 何も問題はない。
ウ ヒントがほしい。　**エ** 答えを教えてほしい。

体言

自立語の中で、活用がなく、**主語になる**ことができるものを**体言**という。品詞では、名詞が体言に当たる。

●**名詞**…物事の名前を表す。物事を指し示す。

名詞は、次のように分類される。

普通名詞	ある種類に属する人や物事などを広く表す。 （例）山・花・学校
固有名詞	人名・地名など特定のものを表す。 （例）夏目漱石・東京・万葉集
代名詞	人や物事、場所、方向などを指し示す。 （例）人称代名詞…私・あなた・彼・誰 指示代名詞…これ・そこ・あちら・どれ
数詞	数量や順序を表す。 （例）一人・二個・いくつ・何本
形式名詞	本来の意味が薄れ、常に連体修飾語とともに使われる。 （例）勉強すること　暑いとき　雨のため

名詞の用法

名詞は、主語のほか、述語・修飾語・接続語・独立語になる。

（例）中学生が（主）遊んでいる。　彼は中学生だ（述）。　中学生の（修飾）教科書。

確認テスト

(1) 次の①～⑧の名詞の種類を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

①北海道　〔　　〕　②動物　〔　　〕　③何匹　〔　　〕

④こちら　〔　　〕　⑤五回　〔　　〕　⑥本　〔　　〕

⑦源頼朝　〔　　〕　⑧あなた　〔　　〕

ア　普通名詞　**イ**　固有名詞　**ウ**　代名詞　**エ**　数詞

(2) 次の中から、――線部が形式名詞であるものを選びなさい。

ア　彼のことを知っていますか。

イ　リンゴはいくつ必要ですか。

ウ　駅はどちらにありますか。

エ　私が読んだのはそれです。

〔　　〕

(3) 次の中から、――線部が名詞であるものを三つ選びなさい。

ア　雨だと思ったが晴れた。　**イ**　今日の天気は晴れだ。

ウ　とても難しい話だ。　**エ**　学校で友達と話した。

オ　象は鼻が長い。　**カ**　これくらいの長さだ。

〔　　・　　・　　〕

(4) 例に従って、次の文に含まれる名詞を、全て□で囲みなさい。

（例）［彼］は［中学生］だ。

この学校の校庭には、有名な木が立っている。

(5) 次の各文の――線部の文節の働きを、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。

①夏休みがもうすぐ始まる。　〔　　〕

②夏休みなので、遊びに行こう。　〔　　〕

③夏休み、これは大切な時間です。　〔　　〕

④これが夏休みの宿題です。　〔　　〕

⑤来週の月曜日は夏休みです。　〔　　〕

ア　主語　**イ**　述語　**ウ**　修飾語

エ　接続語　**オ**　独立語

副詞

副詞は主に連用修飾語になり、状態や程度などを表す。

（例）ゆっくり 歩く（用言）。　もし 外に 出かけるなら（用言）、

副詞は次のように分けられる。

・**状態の副詞**…「どのように」という状態や頻度を表す。
　擬音語（擬声語）・擬態語も含まれる。

（例）ゆっくり・いつも・ざあざあ（擬音語（擬声語））・きらきら（擬態語）

※「ゆっくりと」「すぐに」の「と」「に」は、副詞の一部と考える。

・**程度の副詞**…「どれくらい」という程度を表す。

（例）とても・もっと・少し・かなり

※程度の副詞は、他の副詞や名詞を修飾することもある。
　とても　ゆっくり（副詞）　　もっと　前（名詞）

・**呼応**（陳述・叙述）**の副詞**…話し手の判断や述べ方を表す。
　下に決まった言い方がくる。

（例）もし（〜なら）・たとえ（〜ても）・全く（〜ない）
　きっと（〜だろう）・まるで（〜ようだ）・なぜ（〜か）

連体詞

連体詞は常に連体修飾語になる。

（例）この 花（体言）　ある 日（体言）

連体詞には次のようなものがある。

（〜の）　この・その・あの・どの
（〜な）　大きな・小さな・いろんな
（〜る）　ある・あらゆる・いわゆる
（〜た・だ）　たいした・とんだ

連体詞にはほかの品詞とまぎらわしいものもあるので注意する。

（例）大きな（連体詞）　鳥。　大きい（形容詞）　鳥。
　ある（連体詞）　日。　時間が　ある（動詞）。

修飾語になる品詞

副詞と連体詞はともに修飾語になる品詞だが、修飾語になるのは副詞・連体詞ばかりではないので注意する。

・連用修飾語
　ゆっくり（副詞）　話す。　友達に（名詞）　話す。
　明るく（形容詞）　話す。　静かに（形容動詞）　話す。

・連体修飾語
　この（連体詞）　花。　梅の（名詞）　花。　咲く（動詞）　花。
　赤い（形容詞）　花。　きれいな（形容動詞）　花。

確認テスト

(1) 例に従って、次の各文に含ふくまれる副詞に〰〰線を引き、副詞が修飾する文節に――線を引きなさい。また、副詞の種類をそれぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

（例）私は　ゆっくりと　歩いた。

① 今日は　ずいぶん　おだやかな　日だ。〔　　〕

② 彼は　決して　そんな　ことは　しない。〔　　〕

③ 私は　そっと　ドアを　開けた。〔　　〕

ア 状態の副詞　**イ** 程度の副詞　**ウ** 呼応の副詞

(2) 次の――線部の品詞の種類を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 友達と歩く。〔　　〕　② のんびり歩く。〔　　〕

③ 速く歩く。〔　　〕　④ 静かに歩く。〔　　〕

ア 形容詞　**イ** 形容動詞　**ウ** 名詞　**エ** 副詞

(3) 呼応の副詞に注意して、解答欄かいとうらんに当てはまる言葉を答えなさい。

① どうやら雨が降り［　　　］。

② よもや延期にはなる［　　］。

(4) 例に従って、次の文に含まれる連体詞に〰〰線を引き、連体詞が修飾する文節に――線を引きなさい。

（例）ここには　いろんな　本が　ある。

その　赤い　ペンを　とって　ください。

(5) 次の――線部の品詞の種類を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 小さい花。〔　　〕　② 小さな花。〔　　〕

③ 咲さく花。〔　　〕　④ バラの花。〔　　〕

ア 動詞　**イ** 形容詞　**ウ** 名詞　**エ** 連体詞

(6) 次の「こそあど言葉」の品詞をそれぞれ**ア**～**ウ**から選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① こう〔　　〕　② ここ〔　　〕　③ こちら〔　　〕

④ この〔　　〕　⑤ これ〔　　〕　⑥ こんな〔　　〕

ア 名詞　**イ** 副詞　**ウ** 連体詞

接続詞

接続詞は接続語になり、前後の文や語をつなぐ。
接続語の働きには次のようなものがある。

・**順接**…前に述べた内容が、後に述べる内容の原因や理由になる。
（例）だから・すると・したがって

・**逆接**…前に述べた内容から予想されることとは違う内容が後にくる。
（例）しかし・ところが・けれども

・**並列・累加**…前に述べた内容に、後に述べる内容を並べたり、
内容を付け加えたりする。
（例）そして・また・しかも・そのうえ

・**対比・選択**…前後の内容を比べたり、
前後の内容のどちらかを選んだりする。
（例）一方・または・それとも・あるいは

・**説明・補足**…前に述べた内容をまとめたり、理由を述べたりする。
また、内容を補う。
（例）つまり・なぜなら・例えば・ただし・ちなみに

・**転換**…前に述べた内容から話題を変える。
（例）さて・ところで・では

感動詞

感動詞は独立語になり、感動・呼びかけ・挨拶・応答などを表す。
（感動）ああ　（呼びかけ）ねえ
（挨拶）おはよう　（応答）はい・いいえ

まぎらわしい品詞

●「……だ」

・**形容動詞の終止形**
活用があるので、連体形「……な」の形にできる。
（例）ここは　静かだ。→「静かな」○
副詞「とても」で修飾できる。
（例）ここは　平和だ。→　ここは　○とても　平和だ。

・**名詞＋断定の助動詞「だ」**
「……な」の形にできない。
（例）彼は　中学生だ。→「中学生な」×
副詞「とても」で修飾できない。
（例）私の　願いは　世界の　平和だ。
→　私の　願いは　世界の　×とても　平和だ。

●「……な」

・**形容動詞の連体形**
活用があるので、終止形「……だ」の形にできる。
（例）静かな　湖。→「静かだ」○

・**連体詞**
活用がないので、「……だ」の形にはできない。
（例）大きな　湖。→「大きだ」×

確認テスト

(1) 次の――線部の接続詞の働きを、それぞれ**ア**～**カ**から選びなさい。

① ずいぶん探した。しかし、どこにも見つからない。
② あそこにいるのは私の妹の娘（むすめ）、つまり、私のめいです。
③ この話は興味深く、しかも、考えさせられる内容です。
④ 今日は雨です。だから、傘（かさ）を持っていきなさい。
⑤ これで終わりますか。それとも、もう少し続けますか。
⑥ 説明は以上です。ところで、明日の準備はできましたか。

ア 順接　**イ** 逆接　**ウ** 並列・累加
エ 対比・選択　**オ** 説明・補足　**カ** 転換

①［　　］ ②［　　］ ③［　　］
④［　　］ ⑤［　　］ ⑥［　　］

(2) 次の中から、――線部が感動詞であるものを選びなさい。

ア ふと、窓の外を見た。
イ おや、何かが落ちている。
ウ 先生、質問があります。

［　　］

(3) 次の中から、――線部が形容動詞であるものを二つ選びなさい。

ア 好きな季節は春だ。　**イ** 外の様子が変だ。
ウ 彼女（かのじょ）はいつも元気だ。　**エ** 彼は兄の親友だ。

［　　・　　］

(4) 次の中から、――線部が形容動詞であるものを二つ選びなさい。

ア おかしな話。　**イ** にぎやかな通り。
ウ 小さな机。　**エ** 親切な人。

［　　・　　］

枕草子（1）

清少納言

『枕草子』の基礎知識

『枕草子』は**平安時代**中頃の**清少納言**による**随筆**。清少納言は歌人・清原元輔の娘で、一条天皇の※中宮・定子に仕えた女房だが、本名はわかっていない。

『枕草子』には、筆者が宮仕えを通して見聞きしたことや、四季の自然や人に対する鋭い観察・感性が、才気あふれる簡潔な文で表現されている。明るく知的な**「をかし」**の文学といわれる。

※中宮…后の称号。後に藤原道長の娘・彰子が中宮となると、定子の称号は皇后となった。

藤原道隆（兄）― 定子 …… 清少納言
＝ 一条天皇 ＝
藤原道長（弟）― 彰子 …… 紫式部

時代	年	作品
奈良		『万葉集』この頃までに成立
	800	
平安	900	『竹取物語』『古今和歌集』
	1000	『枕草子』『源氏物語』
	1100	
鎌倉	1200	『新古今和歌集』

随筆

筆者が体験したことや感じたことを、筆のおもむくままに自由に書き記した文章を随筆という。

古文の特色

●歴史的仮名遣い

①語頭以外のハ行「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「**わ・い・う・え・お**」
※語頭のハ行や、助詞「は」「へ」などはそのまま。

②「ゐ・ゑ・を」→「**い・え・お**」
※助詞「を」などはそのまま。

③「ぢ・づ」→「**じ・ず**」

④「くわ・ぐわ」→「**か・が**」

⑤助動詞や助詞の「む・なむ」→「**ん・なん**」

⑥母音（a・i・u・e・o）が連続するとき
・au（ア段＋う・ふ）→ **ô**
・iu（イ段＋う・ふ）→ **yû**
・eu（エ段＋う・ふ）→ **yô**

●古文の語句

古文には、「いと（とても）」のように、現代では使われなくなった語句や、「うつくし（かわいらしい）」のように、現代と意味が異なる語句が見られる。

確認テスト

(1) 次の文の（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『枕草子』は（①）の中頃に（②）によって書かれた（③）である。

ア 奈良時代　イ 平安時代　ウ 鎌倉時代
エ 紀貫之　オ 清少納言　カ 紫式部
キ 歌集　ク 紀行文　ケ 随筆

①［　　］②［　　］③［　　］

(2) 次の文の（　）に当てはまる言葉を選びなさい。

『枕草子』は、筆者の鋭い感性が才気あふれる簡潔な文で表現されており、明るく知的な「（　）」の文学といわれる。

ア ますらをぶり　イ たをやめぶり
ウ をかし　エ もののあはれ

［　　］

(3) 次の言葉を現代仮名遣いに直したものとなるように、解答欄に当てはまる言葉をひらがなで答えなさい。

飛び急ぐさへあはれなり

飛び急ぐ［　　］

(4) 次の言葉を現代仮名遣いに直し、ひらがなで答えなさい。

やうやう［　　］

(5) 次の古語の意味を選びなさい。

いと　うつくし

ア しみじみと趣深い
イ ちょっときれいだ
ウ とてもかわいらしい

［　　］

枕草子 (2)

清少納言

枕草子

春はあけぼの。①やうやう白くなりゆく山際、少しあかりて、
春は明け方（がよい）。　明るくなって、

紫だちたる雲の細くたなびきたる。
紫がかった雲が　細くたなびいている（のがよい）。

夏は夜。②月の頃はさらなり、

闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。
闇もやはり、　蛍が多く飛び交っている（のがよい）。

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。
ただ（蛍が）一、二匹など、ほのかに光って飛んでいくのも　風情がある。

雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日の差して山の端いと近うなりたるに、
夕日が差して山の端にたいへん近くなった頃に、

烏の寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、
烏がねぐらに行くというので、三、四羽、　二、三羽などと、

飛び急ぐさへあはれなり。
飛び急ぐことまでもしみじみと趣深い。

まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。
まして　雁などが列になって（飛んで）いるのが、

日入り果てて、③風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。
日が沈んでしまって、　風の音、虫の音など（が聞こえてくるのも）、また言うまでもない。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、
早朝　雪が降っている早朝は言うまでもなく、

霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、
霜がとても白いのも、またそうでなくても（霜などがなくても）とても寒いときに、

火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。
炭を持って通っていくのも、たいへん（冬の早朝に）似つかわしい。

昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、
（寒さが）しだいに暖かくゆるんでいくと、

※火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。
白い灰ばかりになってよくない。

（第一段）

※火桶…木製の丸火鉢。

重要語句

あけぼの	明け方、空が明るくなる頃
やうやう	だんだんと・しだいに
山際	空の、山に接するあたり
なほ	やはり
をかし	風情があってよい
山の端	山の、空に接するところ
いと	とても・たいそう
あはれ	しみじみと趣深い
つとめて	早朝
わろし	よくない

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「やうやう白くなりゆく山際」とはどのような様子を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア 山の周囲のふもとが、かすかに白んでいく様子。
イ 山の尾根にあたる部分が、ようやく白んでいく様子。
ウ 山に近づいた太陽が、ほのぼのと白んでいく様子。
エ 山に接するあたりの空が、だんだんと白んでいく様子。

〔　　　〕

(2) ――線②「月の頃はさらなり」の意味を選びなさい。

ア 月の頃はさらに明るい
イ 月の頃はそうでもない
ウ 月の頃は言うまでもない

〔　　　〕

(3) ――線③「風の音、虫の音」の読みを、解答欄(かいとうらん)に当てはまるようにひらがなで答えなさい。

風(かぜ)の〔　　　〕、虫(むし)の〔　　　〕

(4) 冬の早朝に風情があることとして述べられているものに、当てはまらないものを選びなさい。

ア 早朝に雪が降っている様子。
イ 火を起こして炭を持って通っていく様子。
ウ 火鉢(ひばち)が白い灰ばかりになる様子。

〔　　　〕

(5) 本文で、各季節で特に風情があると述べられている時間帯をそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

春〔　　　〕　夏〔　　　〕
秋〔　　　〕　冬〔　　　〕

ア あけぼの　**イ** つとめて　**ウ** 夕暮れ　**エ** 夜

枕草子 (3)

清少納言

枕草子

うつくしきもの　【瓜にかきたるちごの顔。
かわいらしいもの。　瓜に描いてある幼児の顔。
①雀の子のねず鳴きするに踊り来る。　二つ三つばかりなるちごの、
二、三歳ほどの幼児が、
急ぎて這ひ来る道に、いと小さき塵のありけるを、
急いではって来る途中に、　とても小さいごみがあったのを、
目ざとに見つけて、いとをかしげなる②指に捕らへて、
目ざとく　とても愛らしい指につかまえて、
大人ごとに見せたる、いとうつくし。
大人たち一人一人に見せている（様子は）、
頭は※尼そぎなるちごの、目に髪の覆へるを、かきはやらで、
頭はあまそぎにしている幼女が、　目に髪がかかっているのを、かき払いはしないで、
うち傾きて物など見たるも、うつくし。】
顔を傾けて
（第百四十五段）

月のいと明かきに、川を渡れば、牛の歩むままに、
月のとても明るい夜に、（牛車で）川を渡ると、牛が歩くにつれて、
③水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。
水晶などが割れたように、　水が飛び散ったのは　風情がある。
（第二百十六段）

※尼そぎ…髪を肩のあたりで切りそろえる髪型。当時の女性は、出家して尼となる場合、髪を肩のあたりで切りそろえた。この尼の髪型のようであるので、尼そぎという。

ものづくし

『枕草子』の約三百の章段の中には、「山は」「うつくしきもの」など、ある標題を掲げてその同類のものを列挙するものがあり、「ものづくし」とよばれる。

（例）あてなるもの　薄色に白襲の汗衫。かりのこ。削り氷に甘葛入れて、あたらしき鋺に入れたる…　（第四十段）

虫は　鈴虫。蜩。蝶。松虫。きりぎりす…（第四十一段）

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中の【 】で囲まれた範囲(はんい)で、「うつくしきもの」として挙げられているものはいくつあるか。算用数字で答えなさい。

〔　　〕

(2) ――線①「雀の子のねず鳴きするに踊り来る」とはどのような意味か。適当なものを選びなさい。

ア 雀の子が、ねずみのような鳴き声で踊るようにやって来る。
イ ねずみが、雀の子のもとに鳴きながら踊るようにやって来る。
ウ 雀の子の鳴き声を聞いて、ねずみが踊るようにやって来る。
エ ねずみの鳴きまねをすると、雀の子が踊るようにやって来る。

〔　　〕

(3) ――線②「指に捕らへて」とあるが、何を指でつまんでいるのか。適当なものを選びなさい。

ア 瓜　**イ** 雀の子　**ウ** 塵　**エ** 大人

〔　　〕

(4) 「うつくしきもの」として述べられている内容に合うものを選びなさい。

ア 瓜に描いてある幼児の顔はかわいらしい。
イ 見つけたごみを捨てる幼児はきれい好きだ。
ウ 尼そぎの幼児が髪を払いのける姿は美しい。

〔　　〕

(5) ――線③「水晶などのわれたるやうに」とは何の様子をたとえたものか。適当なものを選びなさい。

ア 月がとても明るい様子。
イ 牛が歩く様子。
ウ 水が飛び散る様子。

〔　　〕

クマゼミ増加の原因を探る（1）

沼田 英治

研究のきっかけ

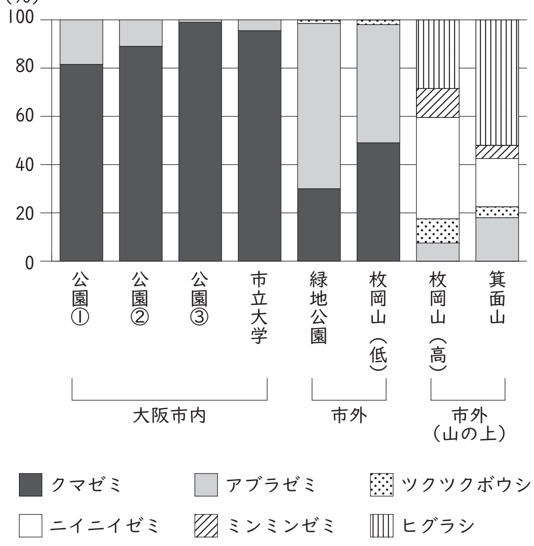
一九六〇年代、大阪市に隣接する豊中市で少年時代を過ごした私にとって、クマゼミは「セミの王様」だった。全長六、七センチメートルもある、重厚で黒光りのする体。羽化したての若い成虫には、金色の毛が輝く。何よりも数が少なく、めったに捕ることができなかった。

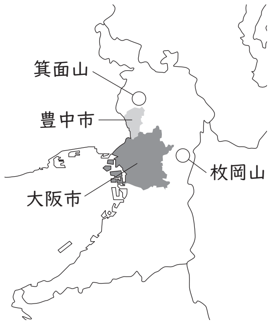
私はその後、豊中市を離れ、一九八四年に戻ってきた。クマゼミの声が大きくなったと気づいたのは、そのときだ。大阪市内はさらに顕著で、ほぼクマゼミの声しか聞こえなくなっていた。クマゼミが増えているのか。検証の機会は二〇〇三年に訪れた。私は、当時学生だった森山実さんと、六年間に及ぶ調査を開始した。

（中略　**図1**は大阪府内のセミの抜け殻調査の結果を示したものです。）

大阪市内では、なぜクマゼミの占める割合が、これほど高くなったのだろうか。一九六〇年代からの主な変化として挙げられるのが、この地域の都市化、気温上昇、湿度の低下である。急速な都市化にともない、植物や土で覆われた地面は舗装されてビルや道路になった。都市化は※ヒートアイランド現象を引き起こす。一九六〇年からの五十年間で大阪市の年平均気温は約一度上昇し、湿度は十パーセント近く低下した。つまり、現在の大阪市内は、以前より暑く、乾燥している。クマゼミは、もともと西日本の温暖な地域に多く生息し、暑さには強いと考えられる。ヒートアイランド現象による環境変化が有利に働いたのではないだろうか。私たちは、この点について検証していくことにした。

図1　抜け殻調査の結果（2008年）





※ヒートアイランド現象…都市部の気温が周囲よりも高くなる現象。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線部「大阪市内では……高くなったのだろうか」とあるが、これに対する筆者の仮説を述べた一文を探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□ 〜 □□□

(2) 一九六〇年代以降の大阪市の変化に当てはまるものを三つ選びなさい。

ア 都市化で緑地が増えた。
イ 都市化で地面が舗装された。
ウ 平均気温が高くなった。
エ 平均気温が低くなった。
オ 湿度が高くなった。
カ 湿度が低くなった。

〔　　・　　・　　〕

(3) 図1を参考に、次の各地点を、そのセミのうちクマゼミの占める割合が高い順に並べかえなさい。

ア 大阪市内の市立大学
イ 大阪市外の山の上
ウ 大阪市外の緑地公園

〔　　→　　→　　〕

(4) 本文や図1の内容に合うものを選びなさい。

ア クマゼミは、ほかのセミよりも声をよく聞くことから、「セミの王様」と呼ばれていた。
イ クマゼミは、大阪市内よりも大阪市外のほうが、セミの数に占める割合が高い傾向がある。
ウ クマゼミは、もともと西日本の温暖な地域に多く生息しており、暑さに比較的強いと考えられる。

〔　　〕

クマゼミ増加の原因を探る(2)

沼田 英治

［前提］クマゼミの一生と、環境の影響を受ける時期

気温や湿度がクマゼミに与える影響を考えるために、まずは、その一生を確認しておこう。

①卵の段階　クマゼミは、夏に枯れ枝に産卵する。卵はやがて休眠に入り、そのまま地上で冬を越す。

②孵化して土に潜る段階　休眠を終えた卵は、春、気温が上がると体を作り始め、梅雨から夏にかけて孵化する。雨の日に孵化し、幼虫はすぐ土に潜る。

③幼虫として地中で過ごす段階　植物の根から栄養を取り、七年ほどかけて成長する。

④地上に出て成虫になる段階　幼虫は夏に地上に出て羽化し、産卵して一生を終える。

この中で、気温や湿度の影響を受けやすいのは、地上で外気にさらされる①②④の段階であると推定できる。特に、小さく未熟な状態である①と②は危険だ。①の卵は野外で冬を越すため、厳しい寒さに耐える必要がある。また、②の孵化したばかりの幼虫は弱く、一時間以内に地中に潜らないと、アリに襲われたり乾燥したりして死んでしまう。そのときの環境に、生存が左右されるおそれがあるのだ。

仮説1の検証

筆者は**①卵の段階**に注目して**仮説1**を立て、検証を行った。

［仮説1］　クマゼミの卵は寒さに弱く、昔の大阪では冬を越せるものが少なかった。しかし、気温上昇で寒さが和らぎ、越冬できる卵が増えた。

・検証結果　クマゼミの卵は寒さに強く、昔の大阪でも十分越冬できた。冬の寒さの緩和はクマゼミ増加の原因ではない。

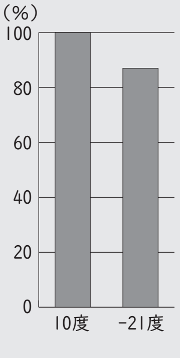


図3
10度に1日置いた場合と、氷点下21度に1日置いた場合の生存率の比較

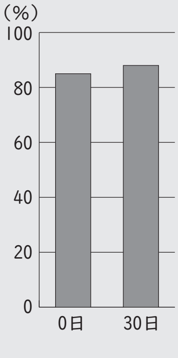


図4
氷点下5度に置かなかった場合と、30日間置いた場合の孵化率の比較

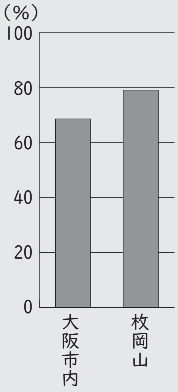


図5
気温の違う野外に1年間置いた場合の孵化率の比較

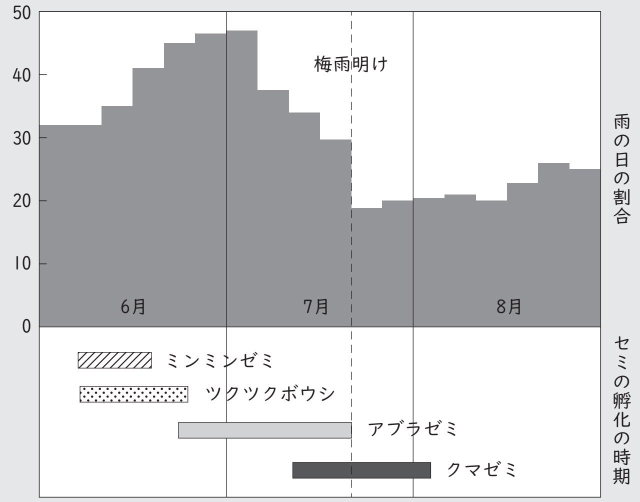
仮説2の検証

筆者は**②孵化して土に潜る段階**に注目て**仮説2**を立て、検証を行った。

> **【仮説2】** 気温上昇で孵化が早まり、梅雨に重なったことで、孵化できる卵が増えた。

・検証結果　クマゼミが増えた一因ではあるが、これだけが原因でクマゼミの占める割合がこれほど高くなったとは考えにくい。

図6　セミの孵化の時期（2007年）と雨の日の割合



確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の中から、クマゼミが気温や湿度の影響を受けやすい時期を三つ選び、①～④の記号で答えなさい。

①卵の段階　②孵化して土に潜る段階
③幼虫として地中で過ごす段階　④地上に出て成虫になる段階

［　・　・　］

(2) 次の中から、クマゼミが野外で冬を越す段階を選び、①～④の記号で答えなさい。

①卵の段階　②孵化して土に潜る段階
③幼虫として地中で過ごす段階　④地上に出て成虫になる段階

［　］

(3) クマゼミが孵化する時期を選びなさい。

ア　春、気温が上がる時期。　**イ**　梅雨から夏にかけての時期。
ウ　夏から秋にかけての時期。　**エ**　冬、寒さが厳しい時期。

［　］

クマゼミ増加の原因を探る(3)

沼田 英治

【仮説3】ヒートアイランド現象による乾燥と地表の整備による土の硬化

大阪市内では、なぜクマゼミの占める割合が、これほど高くなったのか。私たちは、再び幼虫が「**②孵化して土に潜る段階**」に注目した。

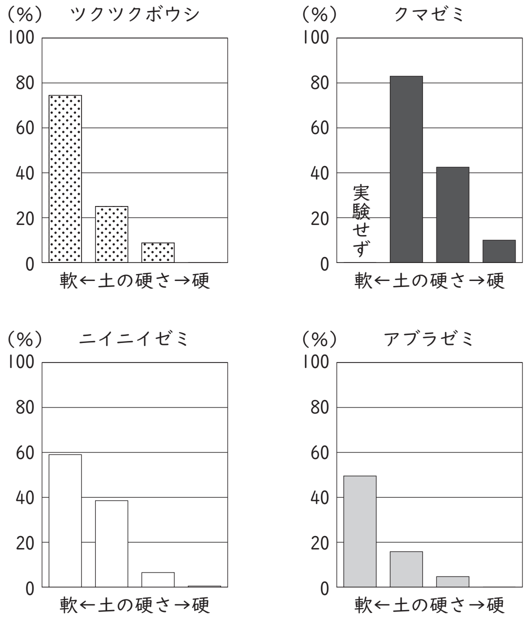
【仮説2】でも述べたとおり、雨が降ると土がぬかるんで軟らかくなり、幼虫が地面に潜りやすくなる。しかし、都市化の進んだ大阪市内では、地表の大半が舗装されており、セミは地面に潜れない。さらに、公園などに残された土も、人の足で踏み固められ、ヒートアイランド現象の影響で乾燥し切っている。雨が降っても、野原や森林の土のように、ぬかるむことはない。

私たちは、**図1**に示した抜け殻調査をする際に、それらの地点の土の硬さも測定していた。その結果、クマゼミが多い市内の公園は土が硬く、クマゼミが少ない市外の緑地や森林は土が軟らかいことがわかった。私たちは、①この違いに注目し、次のような仮説を立てた。

> **【仮説3】**クマゼミの幼虫は土を掘る力が強く、ヒートアイランド現象による乾燥と地表の整備によって硬化した地面にも潜ることができる。

この仮説を検証するために、私たちは、セミの幼虫が土に潜る能力を実験で比較した。まず、四段階の硬さに押し固めた土を用意して、そこに孵化したばかりの幼虫を入れた。そして、②一時間以内に潜れるかどうかを観察した。結果が**図7**である。クマゼミは他のセミと比べ、硬い土に潜る能力が圧倒的に高かった。乾燥と地表整備で、他のセミが潜れなくなるほど硬くなった地面にも、クマゼミだけは潜ることができる。これが、大阪市内でクマゼミの占める割合が高まった原因と考えられる。

図7 土に潜ることのできた幼虫の割合



文章と図表

図表を含む文章では、図表が何を示すためのものなのかに注意する。**図7**は、クマゼミは硬い土に潜ることのできた幼虫の割合が高い（＝他のセミと比べ、硬い土に潜る能力が高い）ことを示している。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) **仮説3**は、クマゼミのどの段階に着目したものか。次の中から選び、①～④の記号で答えなさい。

①卵の段階　②孵化して土に潜る段階
③幼虫として地中で過ごす段階　④地上に出て成虫になる段階

〔　　〕

(2) ――線①「この違い」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア クマゼミの多い場所は土が硬く、クマゼミの少ない場所は土が軟らかいという違い。
イ クマゼミの幼虫は土を掘る力が強く、他のセミの幼虫は土を掘る力が弱いという違い。
ウ 大阪市内はヒートアイランド現象で気温が高いが、大阪市外は寒さが厳しいという違い。
エ 大阪市内は地表整備のためにセミが生息していないが、大阪市外はセミが多いという違い。

〔　　〕

(3) ――線②「一時間以内に潜れるかどうかを観察した」のは、何を調べるためか。適当なものを選びなさい。

ア 大阪市内の土は市外の土に比べて乾燥しているか。
イ セミの幼虫は孵化した後に土に潜ろうとするかどうか。
ウ 実験で用いられている土はそれぞれどれくらいの硬さか。
エ それぞれのセミの幼虫の土を掘る力はどれくらい強いか。

〔　　〕

(4) **図7**を参考に、**仮説3**を検証した実験の説明として適当なものを選びなさい。

ア 実験から、クマゼミが多い市内の公園は土が硬く、クマゼミが少ない市外の緑地や森林は土が軟らかいことがわかった。
イ クマゼミの幼虫は硬い土で実験を行い、その他のセミの幼虫はクマゼミのときよりも軟らかい土を使って実験した。
ウ 同じ硬さの土であれば、他のセミよりもクマゼミのほうが、土に潜ることのできた幼虫の割合が高かった。

〔　　〕

クマゼミ増加の原因を探る(4)

沼田 英治

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

研究のきっかけ	前提	仮説1
一九六〇年代、クマゼミは数が少なく、めったに捕ることができなかった。しかし一九八四年に、クマゼミの声が大きくなっていることに気づいた。 ・抜け殻調査の結果…大阪市内ではクマゼミが圧倒的に多い。 **問題提起** 大阪市内では、なぜクマゼミの占める割合が高くなったのか。 （大阪市内の変化）都市化、ヒートアイランド現象による気温上昇、湿度の低下。 （クマゼミの生態）もともと温暖な地域に多く生息している。 **大きな仮説** ヒートアイランド現象による環境変化がクマゼミに有利に働いたのではないか。	**クマゼミの一生と、環境の影響を受ける時期** **①卵　②孵化して土に潜る　③幼虫として地中で過ごす** **④地上に出て成虫になる** 気温や湿度の影響を受けやすいのは、地上で外気にさらされる①②④の時期。	**冬の寒さの緩和** ・検証結果 クマゼミの卵は寒さに強く、昔の大阪でも十分越冬できた。冬の寒さの緩和はクマゼミ増加の原因ではない。

仮説2	仮説3	まとめ
気温上昇による孵化の時期の変化 ・検証結果 孵化が早まり梅雨に重なったことはクマゼミが増えた一因ではあるが、これだけが原因でクマゼミの占める割合がこれほど高くなったとは考えにくい。	**ヒートアイランド現象による乾燥と地表の整備による土の硬化** ・検証結果 クマゼミは硬い土に潜る能力が高く、他のセミが潜れなくなるほど硬くなった地面にも潜れることが、大阪市内でクマゼミの占める割合が高まった原因と考えられる。	**結論** 大阪市内でクマゼミの占める割合が高くなった背景には、都市部のヒートアイランド現象の影響がある。 ・要因1　気温上昇で孵化が早まり、梅雨と重なってクマゼミの孵化率が向上した。 ・要因2　都市部の土が硬化し、硬い土に潜る能力が高いクマゼミに有利になった。 **筆者の考え** 物事の原因を追究するには、科学的な根拠を一歩一歩積み上げて臨む姿勢が大切である。

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア クマゼミの卵は地中に産みつけられ、地下で冬を過ごす。
イ クマゼミは梅雨から夏にかけて、雨の日に孵化する。
ウ クマゼミの幼虫は他のセミに比べ、土を掘る力が弱い。
エ クマゼミはもともと寒冷な地域に生息し、寒さに強い。

［　　　］

(2) **仮説1〜3**は、次のどの段階に着目したものか。①〜④の記号で答えなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

①卵の段階　②孵化して土に潜る段階
③幼虫として地中で過ごす段階　④地上に出て成虫になる段階

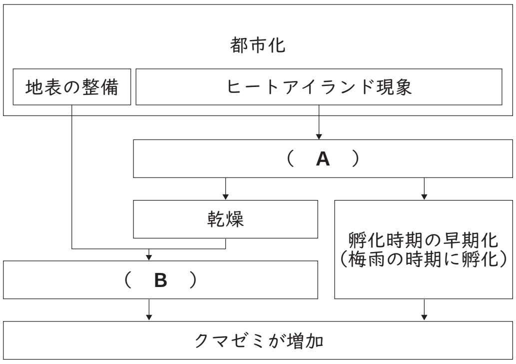
仮説1［　　　］　**仮説2**［　　　］　**仮説3**［　　　］

(3) 大阪市内でのクマゼミの増加に関係があるものを全て選びなさい。

ア 冬の寒さが和らいだことで、寒さに弱いクマゼミの卵でも越冬できるものが増えた。
イ 気温上昇で孵化が早まり、梅雨と重なったことで、孵化できるクマゼミの卵が増えた。
ウ 都市部の土が硬化し、他のセミに比べて硬い土に潜る能力が高いクマゼミに有利になった。

［　　　］

(4) 次の図は大阪市内でクマゼミの占める割合が高くなった要因をまとめたものである。（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。



ア 気温上昇
イ 気温低下
ウ 地面の硬化
エ 地面の軟化（なんか）

A［　　　］　**B**［　　　］

漢字1 熟語の構成(1)

二字熟語

二字以上の漢字が組み合わさってできた語を**熟語**という。熟語の構成を理解すると、その語の意味を推測しやすくなる。

二字熟語の構成には次のようなものがある。

●二字が**似た意味**をもつもの。

（例） 思考（思う≒考える） 道路（道≒路）

●二字が**対の意味**をもつもの。

（例） 高低（高い⇔低い） 進退（進む⇔退く）

●上の漢字が**主語**、下の漢字が**述語**の関係になるもの。（主・述の関係）

（例） 国立（国が立てる） 雷鳴（雷が鳴る）

●上の漢字が下の漢字を**修飾**するもの。（修飾・被修飾の関係）

（例） 海水（海の水） 必要（必ず要る）

●下の漢字が上の漢字の**目的**や**対象**となるもの。

（例） 読書（書を読む） 着席（席に着く）

●**同じ漢字**を重ねるもの。

（例） 転転（転々） 喜喜（喜々）

※「々」は、同じ漢字を重ねることを表す記号で、**踊り字**という。

二字が「主・述の関係」になっている熟語と「修飾・被修飾の関係」になっている熟語は、上から下への係り受けの方向が同じなのでまぎらわしい。上の漢字に「……が」を付けて読み、主語になっているかどうかを確認するとよい。

・人造（人が造る） → 主語と述語の関係

・偉人（偉い人） → 修飾語と被修飾語の関係

確認テスト

(1) 次の①〜⑤の熟語の構成を、それぞれ**ア**〜**オ**から選びなさい。

①往復［　　］　②絵画［　　］　③最大［　　］
④登山［　　］　⑤日没（にちぼつ）［　　］

ア 意味が似た漢字の組み合わせ。
イ 意味が対になる漢字の組み合わせ。
ウ 上の漢字が主語、下の漢字が述語の関係となる。
エ 上の漢字が下の漢字を修飾する。
オ 下の漢字が上の漢字の目的や対象となる。

(2) 次の①〜⑤の熟語の構成を、それぞれ**ア**〜**オ**から選びなさい。

①温暖［　　］　②地震（じしん）［　　］　③就職［　　］
④晴天［　　］　⑤増減［　　］

ア 意味が似た漢字の組み合わせ。
イ 意味が対になる漢字の組み合わせ。
ウ 上の漢字が主語、下の漢字が述語の関係となる。
エ 上の漢字が下の漢字を修飾する。
オ 下の漢字が上の漢字の目的や対象となる。

(3) 次の①〜⑤の熟語と同じ構成の熟語を、それぞれ**ア**〜**オ**から選びなさい。

①国営［　　］　②再会［　　］　③納税［　　］
④売買［　　］　⑤豊富［　　］

ア 暗示　**イ** 開会　**ウ** 取捨　**エ** 停止　**オ** 年長

(4) 次の中から、熟語の構成が他と異なるものを選びなさい。

ア 収支　**イ** 乗降　**ウ** 頭痛　**エ** 貧富（ひんぷ）［　　］

(5) 次の中から、熟語の構成が他と異なるものを選びなさい。

ア 樹木　**イ** 親友　**ウ** 清流　**エ** 濃霧（のうむ）［　　］

漢字1　熟語の構成(2)

二字熟語

二字熟語の構成には他に次のようなものもある。

●上に**接頭語**「**不・無・非・未**」が付くもの。

「不・無・非・未」は、打ち消しや、存在しないといった意味をもつ漢字である。

（例）不安（安心でない）
　　無理（理がない）
　　非常（常ではない）
　　未来（まだ来ていない）

●下に**接尾語**（せつび）「**的・性・然・化**」が付くもの。

「的・性・然」は性質や状態などの意味を、「化」は変化の意味をもつ漢字である。

（例）知的（知性がある様子の）
　　急性（急に起こる性質の）
　　平然（平気な様子）
　　美化（美しくする）

●長い熟語を**省略**したもの。

（例）特急（特別急行）
　　国連（国際連合）
　　原発（原子力発電所）

三字熟語

三字熟語の構成には次のようなものがある。

●漢字一字の語を組み合わせたもの。

（例）衣食住…衣＋食＋住

●漢字一字の語と二字熟語を組み合わせたもの。

（例）未完成…未＋完成
　　共通語…共通＋語

四字熟語

四字熟語の構成には次のようなものがある。

●漢字一字の語を組み合わせたもの。

（例）春夏秋冬…春＋夏＋秋＋冬

●二字熟語を組み合わせたもの。

（例）自由研究…自由＋研究

確認テスト

(1) 次の①〜④がそれぞれ（　　）内の意味の熟語となるように、□に入る漢字を「不・無・非・未」の中から答えなさい。ただし同じ漢字を二度使ってはならない。

① □益（益がない）　② □番（当番でない）

③ □知（まだ知らない）　④ □在（いない）

(2) 次の①〜④がそれぞれ自然な文となるように、□に入る漢字を「的・性・然・化」の中から答えなさい。ただし同じ漢字を二度使ってはならない。

① 都心を緑□する。　② 私□な発言。

③ 突(とっ)□、雨が降る。　④ 理□を保つ。

(3) 次の①〜④がそれぞれ（　　）内の意味の熟語となるように、□に入る漢字を「不・無・非・未」の中から答えなさい。ただし同じ漢字を二度使ってはならない。

① □完全（完全ではない）　② □完成（まだ完成していない）

③ □意味（意味がない）　④ □常識（常識にはずれている）

(4) 次の①〜③と熟語の構成が同じものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 新製品〔　　〕　② 天地人〔　　〕

③ 開会式〔　　〕

ア 松竹梅　**イ** 図書館　**ウ** 大発見

(5) 次の①・②と熟語の構成が同じものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 平均気温〔　　〕　② 花鳥風月〔　　〕

ア 起承転結　**イ** 国立公園

短歌に親しむ (1)

栗木 京子

A

くれなゐ(イ)の二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらか(ウ)に春雨のふる　正岡子規

四季の変化に富む日本では、季節の情感を大切にしながら短歌が作られてきました。この歌は「くれなゐ」(紅色)という色彩や「二尺」(約六十・六センチメートル)という長さによって、薔薇の芽を丁寧に描写しています。さらに、薔薇のとげを「針」と表現し、「針やはらかに」と続けたところが巧みです。新芽のとげのみずみずしく柔らかな様子が伝わってきます。「くれなゐの」「薔薇の芽の」「春雨の」と、助詞「の」が続いていることも、歌に優しさを添えています。

B

夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり　与謝野晶子

(中略)牧場の若い馬たちが気持ちよさそうに風に吹かれています。「三百」は、たくさんという意味で使われていますが、「たくさんの牧の若馬」よりも「三百の牧の若馬」と表現したほうが鮮やかな印象を残します。数量や順序を示す語を「数詞」といいますが、ここでは数詞を生かすことで情景に臨場感が備わっているといえるでしょう。遠い山に向けられていた視線が、やがて牧場へと下り、最後には目の前の若馬の耳に移っていきます。こうした動きが歌の中に爽やかな流れを作り、言葉の背後から生命への賛歌が聞こえてくるようです。

短歌の基礎知識

●定型

短歌は**五・七・五・七・七**の三十一音からなり、三十一文字とも呼ばれる。五・七・五・七・七はそれぞれ、初句・二句・三句・四句・結句といい、また、五・七・五を上の句、七・七を下の句という。定型より音数が多いものを**字余り**、少ないものを**字足らず**という。

●句切れ

一首の中での言葉や意味の切れ目を句切れという。言い切りの表現があるところなどに句切れがある。

・初句切れ……五／七・五・七・七
・二句切れ……五・七／五・七・七
・三句切れ……五・七・五／七・七
・四句切れ……五・七・五・七／七

句切れがない歌(句切れなし)や、句切れが二か所以上ある歌もある。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) Aの歌の説明として適当なものを選びなさい。

ア 助詞「の」の繰り返しが、柔らかなリズムを生んでいる。
イ 「針」という表現から、とげの鋭さや硬さが感じられる。
ウ 激しい雨に打たれるみずみずしい新芽がうたわれている。

〔　　〕

(2) Aの歌には助詞「の」がいくつ含まれるか。漢数字で答えなさい。

〔　　〕

(3) Bの歌の説明として適当なものを二つ選びなさい。

ア 「三百」は牧場にいる馬の正確な数を表している。
イ 「三百」という表現が、鮮やかさや臨場感を与えている。
ウ 視線は若馬の耳から、最後は遠くの山に移っていく。
エ 視線は遠くの山から牧場に下り、若馬の耳へと移っていく。

〔　　・　　〕

(4) Bの歌に含まれる数詞を書きぬきなさい。

〔　　〕

短歌に親しむ (2)

栗木 京子

C 死に近き母に添寝(そひね)のしんしんと遠田(とほだ)のかはづ天に聞(きこ)ゆる

斎藤茂吉(さいとうもきち)

生きる喜びを歌った晶子(あきこ)の歌に対し、茂吉のこの歌では死にゆく母を見つめています。一九一三（大正二）年五月、母危篤(きとく)の知らせを受け、作者は東京から実家のある山形県に帰りました。母の看病をしていると、遠くの田から蛙(かえる)の声が聞こえてきます。その声は、まるで天まで届くように感じられたのでした。「しんしんと」は夜がふけてゆく状況(じょうきょう)とともに、蛙の声が空に響(ひび)く様子を表しています。母の死と向き合う悲しみを、ふるさとの大きな自然が包み込(こ)んでいます。

では、ここからは、今日(こんにち)の短歌を読んでみましょう。

D 鯨(くじら)の世紀恐竜(きょうりゅう)の世紀いづれにも戻(もど)れぬ地球の水仙(すいせん)の白

馬場(ばば)あき子(こ)

（中略）

E 蛇行(だこう)する川には蛇行の理由あり急げばいいってもんじゃないよと

俵(たわら)万智(まち)

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) Cの歌の説明として適当なものを二つ選びなさい。

ア 作者が東京から山形県の母のもとに帰る途上(とじょう)での情景がうたわれている。

イ 作者が山形県の実家で母の看病をしているときの情景がうたわれている。

ウ 「しんしんと」は、夜がふけていく状況や蛙の声が空に響く様子を表している。

エ 「しんしんと」は、夜がふけて静まりかえったふるさとの様子を表している。

〔　　・　　〕

(2) Dの歌の説明として適当なものを選びなさい。

ア 鯨の世紀は今の時代を表しており、恐竜の世紀は過去の時代を表している。

イ 水仙の白は、はるか昔の地球上に咲(さ)いていた花の美しさをうたったものである。

ウ 鯨の世紀恐竜の世紀といった大きな時間と、水仙の白という小さな時間が詠(よ)み込まれている。

〔　　〕

(3) Eの歌の説明として適当なものを選びなさい。

ア 曲がりくねった川に、急ぐだけがいいわけではないということに気づかされている。

イ 寄り道をする川にむかって、まっすぐ進んだほうがよいのにと口語で呼びかけている。

ウ 蛇行する川のほうがむしろむだなく早く進めることを、文語を用いた表現で表している。

〔　　〕

(4) C〜Eの中で、字余りのものを二つ選び、記号で答えなさい。

〔　　・　　〕

(5) C〜Eの中で、体言止めが用いられているものを選び、記号で答えなさい。

〔　　〕

短歌を味わう

A

白鳥はかなしからずや空の青海のあを(オ)にも染まずただよふ(ウ)

若山牧水(わかやまぼくすい)

B

※不来方(こずかた)のお城の草に寝(ね)ころびて
空に吸は(ア)れし
十五の心

石川啄木(いしかわたくぼく)

C

のぼり坂のペダル踏(ふ)みつつ子は叫(さけ)ぶ
「まっすぐ?」、そうだ、どんどんのぼれ

佐佐木幸綱(ささきゆきつな)

D

ぽぽぽぽと秋の雲浮(う)き子供らはどこか遠くへ遊びに行けり

河野裕子(かわのゆうこ)

E

観覧車回れよ回れ想(おも)ひ(イ)出は君には一日(ひとひ)我には一生(ひとよ)

栗木京子(くりききょうこ)

F

一本の道をゆくとき風は割れ僕(ぼく)の背中で元(もと)に戻った

木下龍也(きのしたたつや)

※不来方…岩手県盛岡の古称。

確認テスト 短歌を読んで、問いに答えなさい。

(1) **A**の歌は何句切れか。適当なものを選びなさい。

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 三句切れ
エ 四句切れ　**オ** 句切れなし

〔　　〕

(2) **E**の歌で用いられている表現技法として適当なものを選びなさい。

ア 倒置（とうち）　**イ** 対句（ついく）　**ウ** 直喩（ちょくゆ）

〔　　〕

(3) **A**～**F**の中で、字余りのものを選び、記号で答えなさい。

〔　　〕

(4) **A**～**F**の中で、体言止めが用いられているものを**二つ**選び、記号で答えなさい。

〔　　・　　〕

(5) 次の鑑賞文（かんしょう）に当てはまるものをそれぞれ選び、**A**～**F**の記号で答えなさい。

① 相手にとっては何気ない時間も、相手を恋（こい）しく思う自分にとってはかけがえのないものと感じている。
② 思春期に感じた気持ちを思い起こし、当時の少年らしい心を、懐（なつ）かしく感じている。
③ 周囲の色に染まることなくただよう孤高（ここう）な鳥の姿に、自らを重ね合わせている。
④ 懸命（けんめい）に進んでいく子どもの姿に、まっすぐに成長していってほしいとエールを送っている。

①〔　　〕 ②〔　　〕 ③〔　　〕 ④〔　　〕

言葉の力 (1)

大岡　信

人はよく美しい言葉、正しい言葉について語る。しかし、私たちが用いる言葉のどれをとってみても、単独にそれだけで美しいと決まっている言葉、正しいと決まっている言葉はない。①ある人があるとき発した言葉がどんなに美しかったとしても、別の人がそれを用いたとき同じように美しいとはかぎらない。それは、言葉というものの本質が、口先だけのもの、語彙だけのものではなくて、それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまうところにあるからである。人間全体が、ささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうからである。

（中略　あるとき筆者は、染織家の志村ふくみさんから、桜の花が咲く直前の頃の黒っぽい樹皮から、美しいピンクの色がとれるという話を聞きます。）

花びらのピンクは、幹のピンクであり、樹皮のピンクであり、樹液のピンクであった。桜は全身で春のピンクに色づいていて、花びらはいわばそれらのピンクが、ほんの尖端だけ姿を出したものにすぎなかった。

考えてみればこれはまさにそのとおりで、木全体の一刻も休むことない活動の精髄が、春という時節に桜の花びらという一つの現象になるにすぎないのだった。しかしわれわれの限られた視野の中では、桜の花びらに現れ出たピンクしか見えない。たまたま志村さんのような人がそれを樹木全身の色として見せてくれると、②はっと驚く。

このように見てくれば、③これは言葉の世界での出来事と同じことではないかという気がする。言葉の一語一語は、桜の花びら一枚一枚だといっていい。一見したところ全然別の色をしているが、しかし本当は④全身でその花びらの色を生み出している大きな幹、それを、その一語一語の花びらが背後に背負っているのである。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「ある人が……かぎらない」とあるが、この理由を述べている文を本文中から二つ探し、最初の五字をそれぞれ答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

[　　　　　]・[　　　　　]

(2) ――線②「はっと驚く」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 桜の花びらに現れ出たピンクは、われわれの視野に入りにくいと気づかされるから。
イ 桜の花びらに現れ出たピンクは、春にしか見られないものなのだと気づかされるから。
ウ 桜の花びらに現れ出たピンクは、樹木全体の色が現れたものだったのだと気づかされるから。

〔　　〕

(3) ――線③「これは言葉の世界での出来事と同じことではないか」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 桜の花びらの色は樹木全体の色が姿を現したものであるように、言葉の一つ一つはそれを発する人間全体を背後に背負っているのだということ。
イ 桜の黒っぽい樹皮は桜のピンクの花びらとは色が全く異なるように、ある言葉とそれを発する人間とは全く別のものであるということ。
ウ 桜の木の活動はその一部しか人間の目には見えないように、一語一語の言葉からはそれを発する人間のことはわからないということ。

〔　　〕

(4) ――線④「全身でその花びらの色を生み出している大きな幹」は、言葉の世界では何に当たるか。適当なものを選びなさい。

ア その言葉が用いられる社会の全体。
イ その言葉自体がもつ全ての意味。
ウ その言葉を発している人間全体。
エ その言葉を話す全ての人たち。

〔　　〕

言葉の力 (2)

大岡 信

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

まとまり1	まとまり2	まとまり3
言葉の本質 単独にそれだけで美しい言葉、正しい言葉というものはない。 （理由） 言葉というものの本質が、それを発している人間全体の世界を背負ってしまうところにあるから。 ＝（言い換（か）え） 人間全体が、ささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうから。	**染織（せんしょく）家志村（しむら）ふくみさんの話** 筆者は、志村さんから、桜の花が咲（さ）く直前の頃（ころ）の黒っぽい桜の皮から美しいピンクの色がとれると聞いた。 ↓ 桜は樹木全身で春のピンクに色づき、そのピンクの先端（せんたん）だけが花びらに現れ出る。	**桜の花びらと言葉** 言葉の一語一語は、桜の花びら一枚一枚と同じ。花びらがその背後に花びらの色を生み出している大きな幹を背負っているように、言葉はその背後にそれを発している人間全体を背負っている。 そうしたことを念頭において言葉を考えれば、一語一語の言葉の大きな意味が実感でき、美しい言葉、正しい言葉が初めて身近なものになる。

確認テスト　教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 言葉はそれを発する人間全体を背負ってしまうので、単独でも美しく正しい言葉だけを使うようにするべきである。

イ 言葉というものの本質は、その言葉のもつ美しさが、それを発している人間とは無関係だということにある。

ウ 言葉を発するときには、その人間の全体が、発する言葉の一つ一つに反映してしまうものである。

〔　　〕

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 筆者は、志村さんから、春先の桜の花びらから美しいピンクの色がとれるという話を聞いた。

イ 筆者は、志村さんから、春先の桜の皮から美しいピンクの色がとれるという話を聞いた。

ウ 筆者は、志村さんから、桜の樹皮は春先には黒っぽくてごつごつしているのだと聞いた。

〔　　〕

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 言葉は口先だけのものにすぎないので、単独にそれだけで美しい言葉、正しい言葉というものはない。

イ 言葉はその背後に大きな幹があるので、どんな言葉であっても美しい言葉、正しい言葉であるといえる。

ウ 言葉はそれを発する人間全体を背負っているのだということを意識すると、美しい言葉、正しい言葉が身近になる。

〔　　〕

(4) 一語一語の言葉は、桜における何に当たるか。適当なものを選びなさい。

ア 桜の花びら　　**イ** 桜の樹皮

ウ 桜の幹　　**エ** 桜の木全体

〔　　〕

類義語・対義語

●**類義語**
互いに似た意味をもつ語を類義語という。
（例）「去年」と「昨年」　「用意」と「準備」

類義語には、表す意味が微妙に異なるものもある。
（例）「案外」と「意外」
案外…予想や常識とくいちがっている様子。
意外…自分が考えていたこととくいちがっていたり、
予想もできなかったりする様子。

●**対義語**
意味が反対の関係や対の関係にある二つの語を対義語という。
（例）「生産」と「消費」　「需要」と「供給」
「直接」と「間接」　「偶然」と「必然」

対義語は、着目する観点によって変わることもある。
（例）「姉」↔「妹」…年上と年下
「姉」↔「兄」…女性と男性

多義語

一つの語で複数の意味や用法をもつ語を**多義語**という。
（例）高い所……位置
高い商品…値段

多義語は、それぞれの意味によって、類義語・対義語が変わることがある。
（位置が）「高い」↔「低い」
（値段が）「高い」↔「安い」

確認テスト

(1) 次の①・②の類義語となるように、□に入る漢字を後の〈　〉の中からそれぞれ選びなさい。

①有名・□名　②帰郷・帰□

〈近　故　述　書　省　属　著　無〉

(2) 次の①・②の類義語となるように、□に入る漢字を後の〈　〉の中からそれぞれ選びなさい。

①方法・□□　②重要・□□

〈大　手　切　不　的　厚　段　量〉

(3) 次の①～④の対義語となるように、□に入る漢字を後の〈　〉の中からそれぞれ選びなさい。

①積極・□極　②主観・□観

③収入・□出　④拡大・□小

〈客　支　縮　消　対　張　得　楽〉

(4) 次の①～④の対義語となるように、□に入る漢字を後の〈　〉の中からそれぞれ選びなさい。

①原因・□□　②抽象（ちゅうしょう）・□□

③集合・□□　④形式・□□

〈内　体　果　具　容　結　散　解〉

(5) 次の文の――線部の語の意味を選びなさい。

彼女（かのじょ）はこのクラスの<u>顔</u>だ。

ア 頭部の前面。
イ 顔つき、表情。
ウ ある集団の代表的な人やもの。
エ 体面、面目（めんぼく）。

〔　　〕

いつも本はそばに

翻訳作品を読み比べよう

星の王子さま　サン＝テグジュペリ

（飛行機の操縦士の「僕」は、サハラ砂漠に不時着し、そこで「王子さま」と出会う。「僕」が飛行機で空から落ちてきたと知った「王子さま」はひどく驚いた。）

A　内藤濯　訳

「へええ！　変だなあ、そりゃ……。」
王子さまは、そう言って、①たいそうかわいらしい声で笑いました。笑われた僕は、②とても腹が立ちました。天から落ちるなんて、ありがたくないことなんですから、真剣に考えてもらいたかったのです。やがて、王子さまはまたこう言いました。
「じゃあ、君も、天からやって来たんだね！　どの星から来たの？」

B　池澤夏樹　訳

「ああ、それはおかしいね。」
そう言って王子さまが❶けらけらと笑ったので、僕は相当むっとした。僕としては自分の不運をもう少し真剣に受け止めてほしかったのだ。
❷次に彼はこう言った――。
「君も空から来たんだ！　君の星はどれ？」

翻訳

ある言語で書かれた文章を他の言語に置き換えることを翻訳という。同じ作品でも、翻訳者がどのような表現を用いるかによって、受ける印象は異なる。

（例）「星の王子さま」（原文はフランス語）
・内藤濯訳　「へええ！　変だなあ、そりゃ……。」
・池澤夏樹訳　「ああ、それはおかしいね。」

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「たいそうかわいらしい声で笑いました」❶「けらけらと笑った」という翻訳から、それぞれどのような印象を受けるか。適当なものを選びなさい。

ア やんちゃで活発な印象。　**イ** 幼く、愛らしい印象。

①〔　　〕　❶〔　　〕

(2) ——線②「とても腹が立ちました」は、**B**ではどのように翻訳されているか。書きぬきなさい。

〔　　　　　　　　〕

(3) ——線❷「次に彼はこう言った——。」は**A**ではどのように翻訳されているか。一文で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□ ～ □□□

(4) 次の表現の特徴は、**A**・**B**のどちらに当てはまるか。記号で答えなさい。

文末は「……です。」「……ます。」の敬体が用いられ、表現がやわらかく、おとぎ話のような印象を受ける。

〔　　〕

ヒューマノイド (1)

伊坂 幸太郎

（三十歳の「僕」は、先輩社員との会話をきっかけに十数年前の同級生の言葉を思い出します。「僕」には中学生の頃、たわいもない話をする間柄のタクジという友達がいました。）

そもそもタクジと話すようになったのも、「人間の機能」の話題がきっかけだった。「恥ずかしくなる」機能について、だ。

その日、僕は登校中に恥をかいた。交差点の赤信号で止まっているとき、左前方に同級生らしき姿を見つけ、「アイコ、おはよう。」と声をかけた。相手が振り返り、それがアイコではなく、上級生だとわかったときには、ぞっとした。向こうはけげんそうに①眉をひそめていたが、僕は、「間違えました。」とも「すみません。」とも言えなかった。②取り繕うように髪の毛を触り、信号が切り替わるのを待つだけだった。

そこを、タクジに目撃されたのだ。

からかわれるにちがいない、と覚悟した。けれど、彼は笑うでもなく、「どうして人間って恥ずかしくなるのか、前から不思議だったんだよね。」と真剣な顔で言うものだから、③驚いた。

「どういうこと。」

「だって、恥ずかしい気持ちなんて要らないじゃないか。誰かに迷惑をかけたならまだしも、人前で転んだだけでも恥ずかしくなる。恥をかくと、見捨てられたような気持ちになるし、自分の評価が地におちたような気分になる。そんな機能があって、何の役に立つんだろう。」

僕は困惑した。「恥ずかしさ」と「機能」を結び付ける人に初めて会った。

少しすると彼が、「あ、わかった。」と、うれしそうにこっちを見た。

「失敗を繰り返さないためかな。こんな恥ずかしいことはもうごめんだ、と思って、次には気をつける。そのための機能なのかも。」

「でも、大勢の前で名前を呼ばれただけでも恥ずかしくなるよ。失敗したときだけではなくて、目立っただけで恥をかく。」

「確かに。」タクジも認めた。少し考えた後で、「もし僕がヒューマノイドロボットを作るなら、④人間の恥ずかしい気持ちを理解できるようにする。」と宣言するように言った。

「え。」

「人間にとって、恥をかくか、かかないかというのは重要なことだろ。恥ずかしかった記憶はいつまでたっても、くっきりと覚えている。恥をかいたことで泣く人もいれば、怒る人もいる。そんなこともわかってくれないロボットなんて信用したくない。」

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「眉をひそめていた」とあるが、「眉をひそめる」の意味として適当なものを選びなさい。

ア 心配事がなくなってほっとし、明るい顔になる。
イ 不快な気持ちや心配の気持ちで顔をしかめる。
ウ まるで動じず、表情を少しも変えない。

〔　　〕

(2) ――線②「取り繕うように……待つだけだった」とあるが、これは「僕」のどのような様子を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア とても緊張（きんちょう）している様子。
イ 驚き慌（あわ）てている様子。
ウ 不安でおびえている様子。
エ 気まずくてうろたえている様子。

〔　　〕

(3) ――線③「驚いた」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 「僕」が人違いをしたことにタクジは気づいていなかったから。
イ 「僕」のミスをからかった上級生にタクジが話しかけたから。
ウ タクジが恥ずかしい思いをした「僕」を真剣に慰（なぐさ）めてきたから。
エ タクジが真剣な顔で思いもよらない疑問を投げかけてきたから。

〔　　〕

(4) ――線④「人間の恥ずかしい気持ちを理解できるようにする」とあるが、タクジがそう考えたのはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 人間と同じような感情を持つヒューマノイドロボットを開発することで、人間の機能を改善することができるから。
イ ロボットも人間の恥ずかしい感情を理解できるようにすることで、落ち込（こ）む「僕」を慰められると思ったから。
ウ 恥ずかしさは人間にとって深刻なものなので、人間と関わるロボットもその重要性を理解する必要があるから。

〔　　〕

ヒューマノイド (2)

伊坂 幸太郎

(「僕」は職場での会議中、中学時代のことを思い出しています。ある美術の授業中タクジは転倒し、絵の具が周囲に飛び散りました。)

　タクジは立ち尽くし、少ししてから謝った。耳まで赤くなっていた。美術の授業は急きょ、雑巾とバケツを使った大掃除の時間となる。誰かが舌打ちをし、別の誰かがタクジを責める言葉をつぶやいた。僕はといえば、①謝り続けるタクジの顔を見ることができず、ひたすら床を拭いた。

　その日の放課後だ。

　教室を出た僕を、タクジが呼び止めてきた。何の用かと思えば、「明日、六月十日はロボットの日らしいんだ。語呂で、ロボットと読めるから。」と言う。「駅前の広場で、ロボットに関するイベントをやるから、いっしょに行こうよ。」

　②怒りにも似た、いら立ちが湧いた。

　さっき絵の具をひっくり返し、クラス中に迷惑をかけたというのに、どうしてそんなにのんきなことが言えるのか。何がロボットのイベントだ。

「行かないよ。」自分でも意外なほど、冷たい声が出ていた。「それどころじゃないから。」

　タクジは笑顔のできそこないを浮かべた後で、視線をそらした。

「そうか。そうだよね。」彼は寂しげな表情になったが、雰囲気を少しでも和らげるためなのか、「じゃあ、二十歳になったときに。」と言った。軽口のつもりだったのだろう。「ロボットの日、六月十日に、駅前広場で会おう。」

「意味のわからないことを言わないでよ。」

　タクジは③肩を落としたが、最後の力を振り絞るかのように、「僕がロボットを作るとしたら、転ばないようにはするね。」と口にした。

　僕は無言で回れ右をして、廊下を先に進んだ。その背中に、「二十歳がだめなら、じゃあ、三十歳になったときにしようか。」と彼の声が聞こえてきたけれど、立ち止まらなかった。

　週明け、タクジが引っ越したことが判明した。タクジ側の希望で、みんなには知らせることができなかった、と先生が申し訳なさそうに説明するのを、僕は窓の外を眺めながら聞いていた。

(中略)

　タクジが引っ越した後、僕は連絡を取ろうと思ったものの、行動には移さなかった。最後のやり取りに後ろめたさがあり、その後ろめたさと向き合うことを避けていたのだろう。部活動の大会や高校受験のあれやこれやで忙しいのをいいことに、結局、それきりになった。ただ、時おり、タクジとの最後のやり取りのときの自分の態度を思い出すと、胸の奥に重苦しいものを感じた。

　駅のホームで、電車が来るのを待っているときも、僕はタクジのことを考えていた。あの美術の授業で、タクジはわざと転んだわけではなかった。謝ってもくれた。

　プラットホームに設置されたディスプレイ広告が目に入った。カラフルな絵の具がはじける映像が繰り返されている。④頭の中を小突かれたような気分になった。

　自宅とは逆方向に行く列車に乗り込んでいた。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「謝り続けるタクジの顔を見ることができず、ひたすら床を拭いた」とあるが、このときの「僕」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　タクジの姿が痛々しくて見ていられず、気まずい気持ち。
イ　掃除をしなくてはならなくなったことにいら立つ気持ち。
ウ　床をきれいにして、クラスの仲を取り持ちたい気持ち。

〔　　〕

(2) ――線②「怒りにも似た、いら立ちが湧いた」のはなぜか。最も適当なものを選びなさい。

ア　部活動や受験で忙しい中、タクジがのんきな態度でロボットのイベントに行こうと誘ってきたから。
イ　クラス中に迷惑をかけた直後にもかかわらず、タクジがそのことを気にかけていないような発言をしたから。
ウ　まもなく引っ越ししてしまうのに、タクジがそのことを隠して別れと関係のない話を進めようとしたから。

〔　　〕

(3) ――線③「肩を落とした」とあるが、「肩を落とす」の意味として適当なものを選びなさい。

ア　対立しているものの一方の味方をする。
イ　責任や義務から解放されて気が楽になる。
ウ　落胆や失望などでうなだれる。
エ　相手を肩につかまらせ助けてやる。

〔　　〕

(4) ――線④「頭の中を小突かれたような気分になった」とあるが、このきっかけを正しく述べているものを選びなさい。

ア　ディスプレイ広告に、中学時代の美術の授業での出来事を連想させるような映像が映っていたこと。
イ　中学時代の後ろめたさを思い出していたところ、会議が終了して気持ちを切り替えることができたこと。
ウ　自宅に向かう電車がホームにやってきたことで、タクジのことを思い返していた思考がふと途切れたこと。

〔　　〕

ヒューマノイド (3)

伊坂 幸太郎

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

場面１	場面２	場面３	場面４
三十歳の六月十日 職場の会議室で「人間は、恥ずかしいと思うようにできていますから。」と口にした「僕」は、十数年前にその言葉を同級生のタクジから聞いたことや、三十歳の六月十日に会おうというタクジの言葉を思い出した。	**回想　タクジとのたわいもない話** 「僕」はタクジと特別仲がよいというほどではなかったが、教室でたわいもない話をするのは好きだった。タクジはヒューマノイドロボットを作るなら、という話をよくしていた。	**回想　タクジと話すようになったきっかけ** 登校中、同級生と間違って上級生に声をかけ、恥をかいた「僕」にタクジは、人間の「恥ずかしくなる」機能についての話をした。タクジは、「もし僕がヒューマノイドロボットを作るなら、人間の恥ずかしい気持ちを理解できるようにする。」と言った。	**会議中、中学時代のことに思いをはせる** 「僕」は恥をかく場面でも動揺しないタクジに、憧れに近い思いを抱いていたのかもしれないと考える。「僕」の視線の先に美術の時間の場面が浮かんだ。

場面５	場面６	場面７
回想　タクジとの約束 美術の時間、転倒したタクジは絵の具をひっくり返し、クラス中に迷惑をかけてしまった。 その日の放課後、タクジは、明日の六月十日、駅前の広場で開催されるロボットのイベントに行こうと「僕」を誘ってきた。冷たく断る「僕」にタクジは、「二十歳がだめなら、じゃあ、三十歳になったときにしようか。」と声をかけた。 週明け、タクジは引っ越していた。	**会議後** 「僕」はタクジが引っ越した後、連絡を取らないままになっていた。 帰りの駅のホームで絵の具がはじける映像が目に入った「僕」は、自宅とは逆方向に行く列車に乗り込んだ。	**ロボットの日** 駅前広場だった場所にある施設では、ロボットの日のイベントが行われていた。ステージ上でロボットが転倒し、それに対する開発者の言葉に「僕」は引っ掛かりを覚える。 「久しぶり！」「元気だった？」とステージ上から「僕」に大声で呼びかけたのはタクジだった。皆の視線が「僕」に集まる中、「僕」に向かって手を振るヒューマノイドロボットは恥ずかしさをわかっているようには見えなかった。

確認テスト

(1) 教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

次の各文の出来事を、最も過去のものから順に並べかえなさい。

ア 「僕」は職場の会議室で、今日が三十歳の六月十日だということに気がついた。

イ 上級生に間違えて声をかけてしまった「僕」に、タクジが話しかけてきた。

ウ 転倒して絵の具をひっくり返してしまったタクジは、しばらく立ち尽くした。

エ ロボットの日に駅前広場のイベントに行こうと誘うタクジに、「僕」は冷たい態度をとった。

［　→　→　→　］

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア タクジは中学時代、飽きることなく作業ができるヒューマノイドロボットを開発したいと考えていた。

イ タクジと「僕」は、人間の「恥ずかしくなる」機能の話題をきっかけに、話をするようになった。

ウ 「僕」はタクジとの最後のやり取りを後悔しており、三十歳の六月十日に会う約束をずっと覚えていた。

エ 「僕」と再会したタクジは、中学時代の言葉どおり、決して転ぶことのないロボットを開発していた。

［　］

(3) 次の①・②に対する伏線となっている出来事をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① プラットホームに設置されたディスプレイ広告に、カラフルな絵の具がはじける映像が繰り返されていた。

② マイクを通して大きな声で名前を呼ばれた「僕」は、観客席にいる人たちの注目をあび、顔が真っ赤になった。

ア 恥ずかしさは失敗を繰り返さないための機能だというタクジに、失敗したときだけでなく、大勢の前で名前を呼ばれただけでも恥ずかしくなることを「僕」は指摘した。

イ 言い間違いをしてしまって同級生から笑われた「僕」はどうしていいかわからなくなったが、別の言い間違いをしたタクジは動揺していない様子だった。

ウ 美術の時間、タクジは絵の具を踏み潰してしまい、チューブからは色とりどりの中身が飛び出した。

エ ロボットの日のイベントの会場では、大型ビジョンにキャッチボールをするロボットが映されていた。

①［　］　②［　］

字のない葉書（1）

向田 邦子

（終戦の年の四月、空襲を避けるため、筆者の小学校一年の末の妹は一人で甲府に学童疎開をすることになりました。）

妹の出発が決まると、暗幕を垂らした暗い電灯の下で、母は当時貴重品になっていたキャラコで肌着を縫って名札を付け、父はおびただしい葉書にきちょうめんな筆で自分宛ての宛名を書いた。

「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい。」

と言ってきかせた。妹は、まだ字が書けなかった。

宛名だけ書かれたかさ高な葉書の束をリュックサックに入れ、雑炊用のどんぶりを抱えて、妹は遠足にでも行くようにはしゃいで出かけていった。

一週間ほどで、初めての葉書が着いた。紙いっぱいはみ出すほどの、威勢のいい赤鉛筆の大マルである。付き添っていった人の話では、地元婦人会が赤飯やぼた餅を振る舞って歓迎してくださったとかで、かぼちゃの茎まで食べていた東京に比べれば大マルにちがいなかった。

ところが、次の日からマルは急激に小さくなっていった。情けない黒鉛筆の小マルは、ついにバツに変わった。その頃、少し離れた所に疎開していた上の妹が、下の妹に会いに行った。

下の妹は、校舎の壁に寄り掛かって梅干しの種をしゃぶっていたが、姉の姿を見ると、種をぺっと吐き出して泣いたそうな。

まもなくバツの葉書も来なくなった。三月目に母が迎えに行ったとき、百日ぜきをわずらっていた妹は、しらみだらけの頭で三畳の布団部屋に寝かされていたという。

妹が帰ってくる日、私と弟は家庭菜園のかぼちゃを全部収穫した。①小さいのに手をつけると叱る父も、この日は何も言わなかった。私と弟は、ひと抱えもある大物からてのひらに載る※うらなりまで、二十数個のかぼちゃを一列に客間に並べた。これぐらいしか妹を喜ばせる方法がなかったのだ。

夜遅く、出窓で見張っていた弟が、

「帰ってきたよ！」

と叫んだ。茶の間に座っていた父は、はだしで表へ飛び出した。防火用水桶の前で、痩せた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。②私は父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た。

あれから三十一年。父はなくなり、妹も当時の父に近い年になった。だが、あの字のない葉書は、誰がどこにしまったのかそれともなくなったのか、私は一度も見ていない。

※うらなり…つるの末のほうになる実。小ぶりで味も落ちる。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文は、妹の疎開が決まってからの父の行動をまとめたものである。解答欄に当てはまる言葉を本文中からそれぞれ書きぬきなさい。

妹はまだ［　　　　　　　　］ので、
父は［　　　　］の宛名を書いたおびただしい葉書を妹に渡し、その日元気であればマルを書き、毎日一枚ずつポストに入れるよう伝えた。

(2) 次の文は、妹から届いた葉書の内容をまとめたものである。解答欄に当てはまる言葉を本文中からそれぞれ書きぬきなさい。

妹が出発してから一週間ほどで届いた初めての葉書には、威勢のいい［　　　　　　　］が記されていたが、すぐに情けない［　　　　　　　］になっていき、ついには［　　］に変わってしまった。

(3) ――線①「小さいのに……何も言わなかった」とあるが、これはなぜだと考えられるか。適当なものを選びなさい。

ア　妹が帰ってくる状況で、「私」や弟を叱るのをためらったから。
イ　妹を待っていて、かぼちゃのことに頭が回らなかったから。
ウ　妹を喜ばせようとする「私」と弟の思いを理解していたから。

［　　］

(4) ――線②「私は父が、……初めて見た」という表現から読み取れる筆者の思いとして適当なものを選びなさい。

ア　父の姿に驚くと同時に、父の思いを感じて心を打たれている。
イ　父の涙に困惑し、普段と違う父の様子を不思議に思っている。
ウ　父のような大人が声を立てて泣く姿に違和感を覚えている。

［　　］

(5) 筆者が本文を書いている具体的な時点がわかる段落を探し、その最初の三字を答えなさい。

［　　　］

字のない葉書(2)

向田 邦子

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

前半(筆者が親元を離れていたとき)	後半(終戦の年)
父からの手紙(筆者が女学校一年、十三歳のとき) 死んだ父は筆まめな人であった。親元を離れたときに届いた父からの手紙の「向田邦子殿」という表書きを見て、筆者はひどく驚いた。 ・日頃の父 罵声やげんこつは日常のこと。ふんどし一つで家中を歩き回り、大酒を飲み、かんしゃくを起こして家族に手を上げる。 ・手紙の中の父 折り目正しい時候の挨拶。「私」を貴女とよび、訓戒も添えられていた。 (＝威厳と愛情にあふれた非の打ちどころのない父親) 父は暴君だが反面照れ性でもあったので、他人行儀という形でしか娘に手紙が書けなかったのだろう。	**字のない葉書** ・末の妹の学童疎開 まだ字が書けなかった妹に、父はおびただしい葉書に自分宛ての宛名を書いて持たせた。 ・妹からの葉書 初めての葉書は威勢のいい赤鉛筆の大マル。次の日からマルは急激に小さくなっていき、情けない黒鉛筆の小マルはついにバツに変わった。まもなくバツの葉書も来なくなった。 ・妹が帰ってくる日 「私」と弟がかぼちゃを全部収穫しても父は何も言わなかった。妹が帰ってくると、父ははだしで表へ飛び出し、痩せた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。 **(あれから三十一年)** あの字のない葉書を、その後私は一度も見ていない。

表現の違い

本文の前半と後半では、人柄や心情の表現のしかたが異なる。
・前半…人柄や心情は、直接的に描かれている。
・後半…人柄や心情は、人物の行動などを通して描かれている。

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 「筆まめ」の意味を選びなさい。

ア 手紙や文章の文字がきちょうめんであること。
イ 手紙や文章の文字がいい加減であること。
ウ 面倒がらずに手紙や文章をよく書くこと。
エ 面倒がって手紙や文章をあまり書かないこと。

〔　　〕

(2) 本文の前半の内容に合うものを選びなさい。

ア 筆者の父はそれまで手紙を書くことがなかったので、筆者は父から手紙が届いたことにひどく驚いた。
イ 筆者の父は日頃から筆者のことを「貴女」とよぶなど、他人行儀だが威厳と愛情にあふれる人柄だった。
ウ 筆者の父の手紙は、時候の挨拶から始まり訓戒が添えられているなど、普段の父の姿とは異なるものだった。
エ 筆者の父の手紙は、暴君だが反面照れ性でもあった父らしく、用件だけ書かれたそっけないものだった。

〔　　〕

(3) 本文の後半の内容に合うものを選びなさい。

ア 疎開をすることになった末の妹は、自分宛ての宛名を書いた葉書をたくさん準備した。
イ 疎開をした妹から初めて届いた葉書には、情けない黒鉛筆の小マルが記されていた。
ウ 妹が帰ってくる日、小さいかぼちゃまで全部収穫してしまった筆者と弟を父は叱った。
エ 妹が帰ってくると、父ははだしで表に飛び出し、妹の肩を抱いて声を上げて泣いた。

〔　　〕

(4) 本文中の表現の説明として適当なものを選びなさい。

ア 筆者が親元を離れていたときを描いた前半の箇所では、愛情にあふれる父の人柄が、日頃の父の姿を通して描かれている。
イ 終戦の年を描いた後半の箇所では、父の心情や家族への思いが、父の行動を通して描かれている。
ウ 本文全体を通して、父の人柄や心情は、行動を通してではなく直接表現されている。

〔　　〕

敬語の働き

聞き手や話題の中の人物に敬意を表す表現を**敬語**という。敬語は、他者とのコミュニケーションをとるうえで、大切な表現である。

敬語には、相手に対する敬意を表すほかに、改まった気持ちを表したり、相手との距離(きょり)をとったりする働きもある。状況(じょうきょう)や相手との関係に応じて、適切な敬語を使うことが大切である。

敬語の種類

敬語には、丁寧(ていねい)語・尊敬語・謙譲(けんじょう)語などの種類がある。

●**丁寧語**・美化語

丁寧な表現を使って、話し手が聞き手に敬意を表す言葉を丁寧語という。

〈主な表現〉「……**です**」「……**ます**」「……**ございます**」

(例) 私は中学生だ。 → 私は中学生です。
　　朝食を食べる。 → 朝食を食べます。

また、物事を上品に述べる言葉を美化語という。美化語は、名詞に「**お**(ご)」を付けるものが多い。

(例) お米・お金

●**尊敬語**

動作・行為(こうい)をする人(主体)を高めて言う言葉を尊敬語という。

〈主な表現〉

・「**お**(**ご**)……**になる**」
(例) 話す → お話しになる

・「**お**(**ご**)+名詞」 ※謙譲語の場合もある
(例) (先生からの)お電話　ご挨拶(あいさつ)

・助動詞「……**れる**(**られる**)」
(例) 話す → 話される

・尊敬の意味をもつ特別な動詞

行く・来る・いる	**いらっしゃる・おいでになる**
見る	**ご覧になる**
言う・話す	**おっしゃる**
食べる・飲む	**召(め)し上がる**
くれる	**くださる**
する	**なさる**

確認テスト

(1) 次の①～④の――線部が、丁寧語なら**ア**、尊敬語なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

①今日はいい天気ですね。

②昨日、田中先生に会いました。

③先生が昔のことを話される。

④右が入口でございます。

(2) 次の①～④の――線部が、美化語なら**ア**、尊敬語なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

①お花をかざる。

②お言葉をいただく。

③お水をください。

④お菓子（かし）を買う。

(3) 次の①～④の――線部が、尊敬語なら**ア**、尊敬語でなければ**イ**で、それぞれ答えなさい。

①先生がお帰りになる。

②先生にお伝えする。

③全員がご着席になる。

④私からご連絡（れんらく）する。

(4) 次の――線部の言葉をひらがな五文字の尊敬語に直しなさい。

先生が言うとおりでした。

(5) 次の――線部の言葉をひらがな四文字の尊敬語に直しなさい。

あの方はいつも助けてくれる。

(6) 次の①～④の言葉の尊敬語をそれぞれ選びなさい。

①来る　②見る

③食べる　④する

ア　ご覧になる　**イ**　召し上がる

ウ　いらっしゃる　**エ**　なさる

敬語の種類

●謙譲語（けんじょう）

動作・行為（こうい）の受け手（客体）などを高めて言う言葉を謙譲語という。

〈主な表現〉

・「**お（ご）……する**」

（例）話す　→　お話しする　※「お話しになる」は尊敬語

・「**お（ご）**＋名詞」　※尊敬語の場合もある

（例）（先生への）お電話　ご挨拶（あいさつ）

・謙譲の意味をもつ特別な動詞

行く・来る	**伺う（うかが）・※参る**
いる	**※おる**
見る	**拝見する**
聞く	**伺う・承る（うけたまわ）**
言う・話す	**※申す・申し上げる**
食べる・飲む・もらう	**いただく**
やる・与える（あた）	**差し上げる**
する	**※いたす**

謙譲語のうち、自分や自分に近い人の動作をかしこまって言うことで聞き手への敬意を表す言葉を**丁重語**（ていちょう）（※）ということもある。丁重語は、「ます」を付けて用いられることが多い。

（例）おります。

敬語の使い方

・自分や、身内など自分に近い人に尊敬語を使わない。

（例）×お父さんは今×いらっしゃいません。

→　父は今おりません。

・敬語を重ねすぎない。

（例）お話を×お承りする。　→　お話を承る。

×お読みになられる。　→　お読みになる。

確認テスト

(1) 次の①～⑥の――線部が、謙譲語なら**ア**、謙譲語でなければ**イ**で、それぞれ答えなさい。

① 私からお届けする。〔　〕
② 荷物をお預かりする。〔　〕
③ ここをお使いになる。〔　〕
④ 会場までご案内する。〔　〕
⑤ 概要（がいよう）をご説明する。〔　〕
⑥ お客様がご利用になる。〔　〕

(2) 次の――線部の言葉をひらがな四文字の謙譲語に直しなさい。

校長先生のお話を聞く。

(3) 次の――線部の言葉をひらがな六文字の謙譲語に直しなさい。

ご意見を聞く。

(4) 次の――線部の言葉をひらがな四文字の謙譲語に直しなさい。

お祝いの言葉をもらう。

(5) 次の言葉の謙譲語を選びなさい。

見る

ア 拝見する　**イ** 召（め）し上がる
ウ ご覧になる　**エ** 差し上げる

〔　〕

(6) 次の――線部の敬語を正しく直しなさい。

新聞をお読みになられた。

新聞をお読みに＿＿＿。

同じ訓をもつ漢字

同じ訓をもつ漢字を**同訓異字**という。漢字ごとの意味の違(ちが)いに注意して、同訓異字を使い分けるようにする。

(例) 友達と会(あ)う。　性格が合(あ)う。

あつい	
暑い	気温が高い。(夏は暑い。　猛暑(もうしょ))
熱い	物質が熱をもっている。(お湯が熱い。　熱湯)
厚い	幅(はば)が大きい。(本が厚い。　厚紙) 気持ちの入れ方の程度が深い。(人情に厚い。　温厚(おんこう))

あらわす	
表す	思いや意味を示す。(思いを表す。　表情)
現す	見えなかった形を見せる。(姿を現す。　出現)
著す	書物を書き、世に出す。(本を著す。　著書)

はかる	
計る	時間、数などを調べる。 (時間を計る。　時計・計算・計画)
測る	長さ、高さ、面積、深さなどを調べる。 (面積を測る。　観測・測定)
量る	重さ、体積などを調べる。 (分量を量る。　重量・雨量)
図る	物事を実行するために工夫(くふう)する。 (解決を図る。　意図)
諮る	相談する、協議する。 (会議に諮る。　諮問(しもん))
謀る	くわだてる、だます。 (悪事を謀る。　陰謀(いんぼう))

確認テスト

(1) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 勉強をはじめる。

② はじめての出来事。

(2) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 机を隣(となり)の部屋にうつす。

② ノートに書きうつす。

③ 池に月がうつっている。

(3) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 窓をあける。

② 夜があける。

③ 席をあける。

(4) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 会社につとめる。

② 主役をつとめる。

③ 解決につとめる。

(5) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 成功をおさめる。

② 税金をおさめる。

③ 国をおさめる。

④ 学問をおさめる。

同じ音をもつ漢字

同じ音をもつ漢字を**同音異字**という。中国語と日本語では発音のしかたが異なるので、中国語では異なる発音でも、日本語の音読みでは同じ音となった漢字も多い。

（例）口・工・広・交・向

同じ読みで、異なる意味をもつ語を**同音異義語**という。

（例）正確と性格

タイショウ	
対象	行為(こうい)の目標。（調査の対象。）
対称	つり合っている。（左右対称。）
対照	照らし合わせて比べる。（対照的な性格。）

イギ	
意義	意味、価値。（意義のある仕事。）
異義	異なる意味。（同音異義語。）
異議	異なる意見。（異議を唱える。）

ホショウ	
保証	確かだと請(う)け合う。（正しいと保証する。）
保障	立場や権利を保護し守る。（憲法で保障された権利。）
補償	損失を補う。（損害を補償する。）

カンショウ	
鑑賞	芸術作品を味わう。（音楽を鑑賞する。）
観賞	見て楽しむ。（熱帯魚を観賞する。）
干渉	他人のことに立ち入る。（他国の政治に干渉する。）
感傷	物に感じて心をいためる。（感傷的になる。）

確認テスト

(1) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 止まれとシジされる。

② 国民のシジを得る。

(2) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 駅まで車でイドウした。

② 海外支店にイドウになる。

③ 原作とのイドウが気になる。

(3) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① シュウカン誌を読む。

② 天気のシュウカン予報。

③ 早起きがシュウカンになる。

(4) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 同音異義語にカンシンをもつ。

② すばらしい演奏にカンシンした。

③ 昨今の風潮はカンシンに堪（た）えない。

(5) 次の――線部を漢字に直しなさい。

① 校庭をカイホウする。

② 人質をカイホウする。

③ 病気がカイホウに向かう。

モアイは語る――地球の未来(1)

安田 喜憲

（次の文章は、南太平洋の孤島イースター島にあるモアイという巨大な石像に関する論説です。イースター島はチリ領の火山島で、島内では千体近いモアイが発見されています。）

3　絶海の孤島の巨像を作ったのは誰か。謎が謎を呼び、宇宙人がやって来て作ったのではないかという説まで飛び出した。しかし、最近になって、①それは西方から島伝いにやって来たポリネシア人であることが判明した。墓の中の化石人骨の分析や、彼らが持ってきたヒョウタンなどの栽培作物の分析から明らかになったのだ。さらに、初期の遺跡から出土した炭化物を測定した結果、②ポリネシア人が最初にこの島にやって来たのは、五世紀頃であることも明らかになった。

4　その頃、人々は※ポリネシアから運んできたバナナやタロイモを栽培し、豊かな海の資源を採って生活していた。そして、十一世紀頃、突然巨大なモアイの製造が始まる。同じ時期に、遺跡の数も急増しており、この島の人口が急激に増加を始めたことがわかる。人口は百年ごとに二倍ずつ増加し、十六世紀には一万五千から二万に達していたと推定されている。

5　大半のモアイは、島の東部にあるラノ・ララクとよばれる石切り場で作られた。このラノ・ララクには、モアイを作るのに適した軟らかい凝灰岩が露出していたからである。人々は硬い溶岩や黒曜石でできた石器を使って、モアイを削り出した。

（3～5は教科書本文における形式段落番号を表します）

※ポリネシア…太平洋に広がる、ハワイ・ニュージーランド・イースター島を結んだ三角形の中に含まれる島々の総称。

意見と根拠

本文では、述べられた内容に対して根拠となる事実が示されているか論理の展開を読み取るようにする。

（例）**問い**　モアイを作ったのは誰か

答え　西方から島伝いにやって来たポリネシア人

（根拠）　墓の中の化石人骨の分析　栽培作物の分析

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「それは西方から島伝いにやって来たポリネシア人である」とあるが、これに対する根拠となる内容が示された一文を探し、最初の三字を答えなさい。

(2) ――線②「ポリネシア人が最初にこの島にやって来たのは、五世紀頃である」とあるが、この根拠と考えられるものを選びなさい。

ア イースター島の墓の中の化石人骨を調べたところ、それがポリネシア人のものであったこと。
イ イースター島の栽培作物を調べたところ、それがポリネシアの島々のものと同じであったこと。
ウ イースター島の初期の遺跡から出土した炭化物を調べたところ、それが五世紀頃のものであったこと。
エ イースター島のモアイが作られた年代を調べたところ、十一世紀頃にモアイの製造が始まっていたこと。

〔　〕

(3) 筆者は、十一世紀頃にイースター島の遺跡の数が急増していることから何がわかると述べているか。適当なものを選びなさい。

ア 十一世紀頃にモアイの製造が始まったこと。
イ 大半のモアイは島の東部の石切り場で作られたこと。
ウ イースター島でバナナやタロイモが栽培されていたこと。
エ イースター島の人口が十一世紀頃から急増したこと。

〔　〕

(4) 本文で説明されているイースター島の変化に合うように、次のA～Cの時代に当てはまるものをそれぞれ選びなさい。

A 五世紀頃 〔　〕
B 十一世紀頃 〔　〕
C 十六世紀 〔　〕

ア イースター島の人口が一万五千から二万人に達していた。
イ イースター島の人口が急激に増加を始めた。
ウ ポリネシア人が初めてイースター島にやって来た。

モアイは語る――地球の未来 (2)

安田 喜憲

7 それにしても、①ラノ・ララクの石切り場から、数十トンもあるモアイをどのようにして海岸の※アフまで運んだのだろうか。石ころだらけの火山島を十キロも二十キロも運ぶには、木の※ころが必要不可欠である。モアイを台座のアフの上に立てるときでも、支柱は必要だ。

8 しかし、現在のイースター島には、オーストラリアから持ってきて最近植栽したユーカリの木以外には、森は全くなく、広大な草原が広がっているだけである。モアイが作られた時代、モアイの運搬に必要な木材は存在したのだろうか。

9 この謎を解決したのが、私たちの研究だった。私はニュージーランドのマセイ大学J・フレンリー教授と共に、イースター島の火口湖に※ボーリングをして堆積物を採取し、堆積物の中に含まれている花粉の化石を分析してみた。すると、イースター島にポリネシア人が移住した五世紀頃の土の中から、ヤシの花粉が大量に発見されたのだ。②このことは、人間が移住する前のイースター島が、ヤシの森に覆われていたことを示している。

（7～9は教科書本文における形式段落番号を表します）

※アフ…モアイが立てられた台座。　ころ…重い物を動かすときに下に敷いて転がす棒。
ボーリング…地質調査や地下資源の採取のために、地中に深く細い穴を掘ること。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「ラノ・ララクの石切り場から……運んだのだろうか」とあるが、筆者は、モアイを運ぶためには何が必要だと考えたか。適当なものを選びなさい。

ア 石ころ　イ 木のころ　ウ 台座　エ 支柱

〔　　〕

(2) ――線②「このこと」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア 筆者が、イースター島の火口湖でボーリングによる調査を行ったこと。

イ 筆者が、イースター島の堆積物に含まれる花粉の化石を分析したこと。

ウ ポリネシア人がイースター島に移住したのは、五世紀頃だと考えられること。

エ ポリネシア人が移住した頃の土の中から、大量のヤシの花粉が発見されたこと。

〔　　〕

(3) 本文の内容に合うものを二つ選びなさい。

ア 五世紀頃のイースター島は、ヤシの森に覆われていた。

イ 五世紀頃のイースター島は、ユーカリの森に覆われていた。

ウ 現在のイースター島は、ヤシの木以外には森はない。

エ 現在のイースター島は、ユーカリの木以外には森はない。

〔　　・　　〕

(4) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 筆者は、イースター島は火山島で石ころだらけなので、モアイの運搬は不可能だと結論づけた。

イ 筆者は、モアイを運ぶためにイースター島に生えているユーカリの木が使われたと考えた。

ウ 花粉の化石の分析によって、モアイの運搬に必要な木材がかつて存在したことがわかった。

エ 花粉の化石の分析によって、イースター島に移住した人々はポリネシア人であると判明した。

〔　　〕

モアイは語る——地球の未来(3)

安田 喜憲

11 私たちの花粉分析の結果から、もう一つの事実も浮かび上がってきた。ヤシの花粉の量は、七世紀頃から、徐々に減少していき、代わってイネ科やタデ科などの草の花粉と炭片が増えてくる。このことは、ヤシの森が消滅していったことを物語っている。人口が増加する中で家屋の材料や日々の薪、それに農耕地を作るために伐採されたのだろう。さらに、モアイの製造が始まると運搬用のころや支柱としても使われるようになり、森がよりいっそう破壊されていったのだと考えられる。

12 ラノ・ララクの石切り場からは、未完成のモアイ像が約二百六十体も発見された。なかには作りかけの二百トン近い巨像もあった。運ぶ途中で放棄されたモアイも残されている。おそらく森が消滅した結果、海岸までモアイを運ぶことができなくなったのであろう。

13 では、モアイを作った文明は、いったいどうなったのだろうか。

14 かつて島が豊かなヤシの森に覆われていた時代には、土地も肥え、バナナやタロイモなどの食料も豊富だった。しかし、森が消滅するとともに、豊かな表層土壌が雨によって侵食され、流失してしまった。火山島はただでさえ岩だらけだ。その島において、表層土壌が流失してしまうと、もう主食のバナナやタロイモを栽培することは困難となる。おまけに木がなくなったため船を造ることもままならなくなり、たんぱく源の魚を捕ることもできなくなった。

（11〜14は教科書本文における形式段落番号を表します）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うように、次の文の（　　）に当てはまる言葉を本文中から十二字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

ヤシの花粉の量が七世紀頃から徐々に減少していることから、その頃、徐々に（　　）ことがわかる。

［　　　］〜［　　　］

(2) ——線部「ヤシの花粉の量は、……炭片が増えてくる」とあるが、ここから考えられることとして、適当なものを二つ選びなさい。

ア　ヤシの花粉が減り、イネ科などの草の花粉が増えていることから、モアイの運搬には草が使われていたのだと考えられる。

イ　ヤシの花粉が減り、イネ科などの草の花粉が増えていることから、農耕地を作るためにヤシが伐採されたのだと考えられる。

ウ　ヤシの花粉が減り、炭片が増えていることから、栽培にたずさわる人口が減少していったのだと考えられる。

エ　ヤシの花粉が減り、炭片が増えていることから、薪にするためにヤシが伐採されたのだと考えられる。

〔　　・　　〕

(3) 次の文章はイースター島に起こった変化をまとめたものである。（　　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

森が消滅したことで、（①）が雨で流され、（②）を栽培することが難しくなった。また、木がないために（③）を造ることができず、（④）を捕ることもできなくなった。

ア　たんぱく源の魚　**イ**　主食の作物　**ウ**　船　**エ**　表層土壌

①〔　　〕　②〔　　〕　③〔　　〕　④〔　　〕

モアイは語る――地球の未来(4)

安田 喜憲

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

区分	段落	内容
序論（導入と問題提起）	1・2	**導入**　モアイの説明 **問題提起**　①誰がモアイを作ったのか。②どうやってモアイを運んだのか。③なぜモアイは突然作られなくなったのか。④モアイを作った文明はどうなったのか。
本論（イースター島の歴史とモアイの秘密）	3〜6	**問い①**　誰がモアイを作ったのか。 **答え①**　西方から島伝いにやって来たポリネシア人。 （根拠）墓の中の化石人骨の分析。栽培作物の分析。 ・五世紀頃……ポリネシア人が初めてやって来る。 ・十一世紀頃…モアイの製造の開始。人口の急増。 ・十六世紀……人口が一万五千〜二万に達していた。
	7〜10	**問い②**　どうやってモアイを運んだのか。 モアイを運ぶには木のころが必要だが、現在のイースター島には森がない。 しかし、調査の結果、イースター島の五世紀頃の土の中からヤシの花粉が大量に発見され、かつて島がヤシの森に覆われていたことがわかった。 **答え②**　ヤシの木をころとして使い、モアイを運んだのだろう。
	11・12	**問い③**　なぜモアイは突然作られなくなったのか。 花粉分析の結果、七世紀頃からヤシの花粉の量が減少し、イネ科・タデ科の草の花粉と炭片が増加していることがわかった。これはヤシの森が消滅していったことを物語っている。人口の増加やモアイの製造で、ヤシが伐採されたのだろう。 **答え③**　森が消滅し、海岸までモアイを運ぶことができなくなったのだろう。
	13〜15	**問い④**　モアイを作った文明はどうなったのか。 森が消滅して豊かな表層土壌が雨で流失し、主食の栽培が困難になった。木がないために船が造れず、たんぱく源の魚を捕ることもできなくなった。 **答え④**　食料危機や部族間の抗争で十七世紀後半から十八世紀前半にイースター島の文明は崩壊した。 （根本的原因）森の消滅
結論（地球の未来）	16〜20	**イースター島の運命と私たち** 森林は文明を守る生命線である。現代の人口爆発ではかつてのイースター島以上の人口増加が起こっており、食料生産のためにこれ以上森林を切り開けば、食料不足が恒常化するおそれもある。 **主張**　有限の資源を、効率よく長期にわたって利用する方策を考えなければならない。

（1〜20は教科書本文における形式段落番号を表します）

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 五世紀頃、イースター島にポリネシア人がやって来て、同じ頃モアイの製造が始まった。

イ 十一世紀頃には、人口の増加によってイースター島のヤシの森は消滅していた。

ウ 十六世紀には、イースター島の人口は一万五千から二万に達していた。

エ 十七世紀後半から十八世紀前半にかけて、イースター島の人口は急増した。

〔　　〕

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア イースター島の墓の中の化石人骨の分析や栽培作物の分析から、モアイを作ったのはポリネシア人であることがわかった。

イ 五世紀頃の土の中からヤシの花粉が大量に見つかり、イースター島にポリネシア人が初めて移住した時期がわかった。

ウ 七世紀頃からヤシの花粉が減少していることにより、同じ頃にイースター島でモアイの製造が始まったとわかった。

〔　　〕

(3) 本文の内容に当てはまらないものを選びなさい。

ア イースター島は、食料危機が起こり部族間の抗争が頻発(ひんぱつ)する中で文明が崩壊してしまった。

イ イースター島の文明が崩壊してしまった根本的な原因は、森が消滅してしまったことである。

ウ 現在、世界の総人口は少子化によって減少しており、食料や資源が不足する危険性はない。

〔　　〕

聴きひたる　月夜の浜辺

中原　中也

月夜の浜辺

中原（なかはら）　中也（ちゅうや）

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際（なみうちぎは）（ワ）に、落ちてゐた（イ）。

それを拾つて（ヒロッ）、役立てようと
僕（ぼく）は思つて（オモッ）たわけでもないが
なぜだかそれを捨てるに忍（しの）びず
①僕はそれを、袂（たもと）に入れた。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちてゐた（イ）。

それを拾つて（ヒロッ）、役立てようと
僕は思つて（オモッ）たわけでもないが
②月に向つて（ムカッ）それは抛（はふ）（ホウ）れず
浪（なみ）に向つて（ムカッ）それは抛（ホウ）れず
僕はそれを、袂に入れた。

月夜の晩に、拾つて（ヒロッ）たボタンは
指先に沁（し）み、心に沁みた。

月夜の晩に、拾つた（ヒロッ）ボタンは
③どうしてそれが、捨てられようか？

確認テスト 詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) 第一連を反復している連を漢数字で答えなさい。

第［　］連

(2) 第二連の一部を反復しながら、内容を発展させている連を漢数字で答えなさい。

第［　］連

(3) ――線①「僕はそれを、袂に入れた」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 何かの役に立てようと思ったから。
イ なんとなく捨てることができなかったから。
ウ 海に向かって投げ、浪に流そうとしたから。

［　］

(4) ――線②「月に向つてそれは抛れず／浪に向つてそれは抛れず」に用いられている表現技法として適当なものを選びなさい。

ア 体言止め　イ 倒置（とうち）　ウ 対句（ついく）

［　］

(5) ――線③「どうしてそれが、捨てられようか？」が表す心情として適当なものを選びなさい。

ア 捨てる方法を知りたい。
イ 捨ててしまいたい。
ウ 捨てられてしまうだろう。
エ 捨てられるはずもない。

［　］

(6) 「月夜の浜辺」の説明として、適当なものを選びなさい。

ア 用いられている言葉は文語である。
イ 七音が繰（く）り返され、リズムを生んでいる。
ウ 浜辺の光景を写実的にうたった叙景（じょけい）詩である。

［　］

『平家物語』の基礎知識

『平家物語』は**鎌倉時代**に成立した**軍記物語**。『徒然草』によると、信濃前司行長が作ったものとされるが、はっきりしない。平家一門の栄華と滅亡とが、人の世をはかないものとする仏教の**無常観**を基調としてえがかれている。

漢語を交えた文体で独特の調子とリズムがあり、読みものとしてだけではなく、**琵琶法師**とよばれる人々による語りものとしても親しまれた。琵琶の伴奏に合わせた『平家物語』の語りを**平曲**という。

『平家物語』冒頭

※祇園精舎の鐘の声、※諸行無常の響きあり。
祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。

※沙羅双樹の花の色、※盛者必衰の理をあらはす。
沙羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。

おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。
おごりたかぶる者も長くは続かず、まるで春の夜の夢のようである。

たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。
勇猛な者もついには滅びてしまう、全く風の前の塵と同じである。

※祇園精舎…昔、インドの須達長者が釈迦のために建立した寺院で、釈迦が仏教の教えを説いた場所。
諸行無常…万物は常に移り変わり、不変なものはないということ。
沙羅双樹…インド原産の常緑高木で、釈迦が亡くなったとき、床の四辺に二本ずつ植えられていたこの木が、悲しみのために白色に変わり、枯れたという。
盛者必衰…勢い盛んな者も必ず滅びるということ。

古文の読み方

●歴史的仮名遣い
①語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「わ・い・う・え・お」
※語頭のハ行や、助詞「は」「へ」などはそのまま。
②「ゐ・ゑ・を」→「い・え・お」
※助詞「を」などはそのまま。
③「ぢ・づ」→「じ・ず」
④「くわ・ぐわ」→「か・が」
⑤助動詞や助詞の「む・なむ」→「ん・なん」
⑥母音（a・i・u・e・o）が連続するとき
・au（ア段＋う・ふ）→ ô
・iu（イ段＋う・ふ）→ yû
・eu（エ段＋う・ふ）→ yô

●係り結び…係りの助詞が用いられると、結びの部分が変化する。
・係りの助詞
「ぞ」「なむ」「こそ」…前の語の強調
「や」「か」…………疑問・反語
（例）ひいふつと　射切つたり。
ひいふつとぞ射切つたる。（「ひいふつと」が強調される）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文の（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『平家物語』は（①）に成立した（②）である。

ア 平安時代　イ 鎌倉時代　ウ 室町時代
エ 歌集　オ 軍記物語　カ 随筆（ずいひつ）

①〔　　〕②〔　　〕

(2) 『平家物語』の説明として適当なものを選びなさい。

ア 仏教の無常観を基調として、源氏（げんじ）一門の栄華と滅亡とがえがかれている。
イ 和語のみの文体で独特の調子があり、語りものとしても親しまれてきた。
ウ 琵琶法師らによる、琵琶に合わせた『平家物語』の語りのことを平曲という。

〔　　〕

(3) 『平家物語』の冒頭部分に合うように、（　）に入る言葉をそれぞれ選びなさい。

祇園精舎の鐘の声、（①）の響きあり。
沙羅双樹の花の色、（②）の理をあらはす。
おごれる人も久しからず、ただ（③）のごとし。
たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに（④）に同じ。

ア 風の前の塵　イ 盛者必衰
ウ 春の夜の夢　エ 諸行無常

①〔　　〕②〔　　〕③〔　　〕④〔　　〕

(4) 『平家物語』の冒頭部分の内容に当てはまらないものを選びなさい。

ア 祇園精舎の鐘の音には、万物は移り変わり、不変なものはないのだと伝えるような響きがある。
イ 沙羅双樹の花の色は、勢い盛んな者も必ず滅ぶのだという道理を示している。
ウ 春の夜の夢のように、おごりたかぶる者の栄華は久しく続いていく。
エ 風に吹（ふ）き飛ぶ塵と同じように、勇猛（ゆうもう）な者もついには滅んでしまう。

〔　　〕

「平家物語」の世界／「平家物語」の主な登場人物たち

『平家物語』の世界

●平氏政権の成立

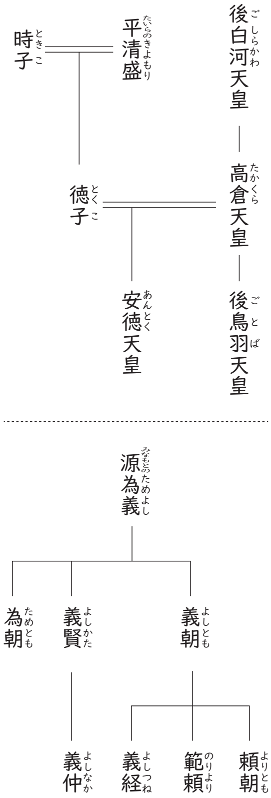
平安時代末期、保元の乱、平治の乱に勝利した平清盛が政治の実権を握り、平家一門は栄華を極めた。次第に清盛は後白河法皇と対立するようになり、各地で平家に反発する動きが起こった。

●源頼朝の挙兵

一一八〇年、平治の乱ののち伊豆に流されていた源頼朝や、信濃の源義仲（木曾義仲）らが、平家打倒の兵を挙げた。頼朝は石橋山の戦いで大敗したが、勢力を立て直して鎌倉に拠点を置くと、進軍してきた平家の軍を富士川の戦いで破った。一一八一年には、清盛が熱病で亡くなった。

●源義経の派遣

一一八三年、義仲の軍が京に迫り、平家は西国に逃れた。都では次第に義仲と後白河法皇との対立が深まり、頼朝は弟の範頼・義経を都に派遣した。義経は宇治川の戦いで義仲を破った。

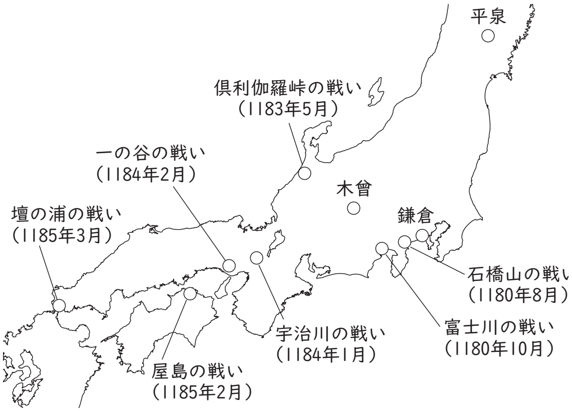


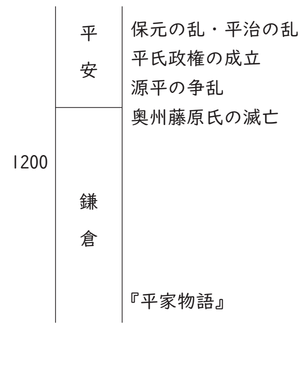
●一の谷の戦いと「敦盛の最期」

西国に逃れていた平家は勢力を盛り返し、福原近くの一の谷に陣を構えた。しかし、義経の奇襲によって平家は破れ、屋島に退いた。『平家物語』ではここで「敦盛の最期」の場面がえがかれる。

●屋島の戦いと「扇の的」

一一八五年、ひそかに海を渡った義経は、平家の背後から屋島を急襲した。平家は舟で海に逃れ、海上の平家と陸上の源氏が向かい合った。『平家物語』ではここから「那須与一」「弓流」の場面がえがかれる。屋島の戦いに敗れた平家は西に逃れ、壇の浦で滅亡する。





確認テスト

(1) 次の各文を、過去の出来事から順に並べなさい。

ア 『平家物語』が成立する。
イ 平清盛が政治の実権を握る。
ウ 源義経が壇の浦で平家を滅(ほろ)ぼす。
エ 源頼朝が伊豆で挙兵する。

〔　　→　　→　　→　　〕

(2) 『平家物語』の主な戦いを、過去のものから順に並べなさい。

ア 一の谷の戦い　**イ** 壇の浦の戦い
ウ 富士川の戦い　**エ** 屋島の戦い

〔　　→　　→　　→　　〕

(3) 『平家物語』の主な戦いが行われた場所は、現在の何県か。それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 一の谷〔　　〕　② 壇の浦〔　　〕
③ 富士川〔　　〕　④ 屋島〔　　〕

ア 静岡県　**イ** 兵庫県　**ウ** 香川県　**エ** 山口県

(4) 一の谷の戦い・屋島の戦いで、平家を急襲した人物として適当なものを選びなさい。

ア 源義朝　**イ** 源頼朝　**ウ** 源義仲　**エ** 源義経

〔　　〕

(5) 次の中から、内容が正しいものを選びなさい。

ア 伊豆で挙兵した源頼朝は、のちに平泉を拠点とした。
イ 木曾義仲は政治の実権を握り、鎌倉幕府を成立させた。
ウ 源頼朝は弟の義経らを西国に派遣し、平家を滅ぼした。
エ 一の谷の戦いで平家は滅亡し、源平の争乱は終結した。

〔　　〕

扇の的――「平家物語」から(1)

扇の的

一一八五年、義経は平家の拠点となっていた屋島を攻めた。平家は海に逃れ、海上の平家と陸上の源氏が向かい合うこととなった。日が暮れ、義経が引き上げようとすると、沖から小舟が一そうこぎ寄せた。舟の中から年若い※女房が姿を見せ、扇を竿の先に付けて舟端に立て、陸へ向かって手招きをする。扇を射よということらしい。

義経は、弓の名手と聞いた、※下野国の住人・那須与一に、扇の真ん中を射るよう命じる。与一は辞退しようとするが、義経の命令に背くことはできず、馬に乗って水ぎわに近づいた。味方のものどもは後ろ姿をはるかに見送って、「この若者は必ず射当てると思います。」と申し上げたので、義経も頼もしそうである。扇との間は※四十間ほどあった。

ころは二月十八日の※酉の刻ばかりのことなるに、
時は　酉の刻頃のことであるが、

をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。
折から　岸を打つ波も高かった。

舟は揺り上げ揺りすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。
舟は揺り上げられ揺り落とされ（上下に）漂うので、扇も竿の先に静止せずひらめいている。

沖には平家、舟を一面に並べて見物す。

陸には源氏、※くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも
馬のくつわを　どちらもどちらも

晴れならずといふことぞなき。与一、目をふさいで、
晴れがましくないということはない（晴れがましい様子である）。与一は目を閉じて、

「南無※八幡大菩薩、※我が国の神明、※日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。
我が故郷の神々の、　射させてください。

①これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二たび面を向かふべからず。
二度と顔を合わせるつもりはありません。

②いま一度※本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢外させたまふな。」
いま一度（私を）本国へ迎えようとお思いになるならば、　外させないでください。

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、
心の中で祈り念じて、

風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。
吹くのが弱まり、　射やすそうになっていた。

※女房…ここでは貴族や武家に仕える女性のこと。　下野国…現在の栃木県。
四十間…一間は約一・八メートル。　酉の刻…午後六時頃。
くつばみ…くつわ。馬の口にくわえさせ、手綱を付けるための金具。
八幡大菩薩…八幡神を仏教の菩薩とみたときの称号。八幡神は特に武家の崇敬を集めており、弓矢の神とされた。
我が国…ここでは与一の故郷である下野国のこと。ここから与一は下野国の神々を挙げている。
日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神…それぞれ、日光二荒山神社（日光市）、宇都宮二荒山神社（宇都宮市）、那須湯泉神社（那須町）の祭神を指す。
本国…ここでは与一の故郷である下野国のこと。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣い(づか)に直し、ひらがなで答えなさい。

A にんぐわつ〔　　〕

B あふぎ〔　　〕

(2) 本文中の対句(ついく)の表現となるように、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を書きぬきなさい。

□には□□、□を一面に並べて見物す。

□には□□、□□□□を並べて

これを見る。

(3) ――線①「これを射損ずる……べからず」から読み取れる与一の様子として、適当なものを選びなさい。

ア 自らや味方の名誉(めいよ)がかかる中、必死に祈り(いの)念じている。

イ 弓矢の腕(うで)に自信があり、射当てることを確信している。

ウ 矢を射るには不利な状況(じょうきょう)で、投げやりになっている。

〔　　〕

(4) ――線②「いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば」とあるが、この部分が表す内容となるように、(　)に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

(A)が、もう一度(B)を本国に迎えようとお思いになるならば

ア 源義経　イ 那須与一　ウ 我が国の神明

A〔　　〕　B〔　　〕

(5) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 源氏の方から平家に向かって舟を近づけた。

イ どちらを見ても、たいへん晴れがましい情景だった。

ウ 与一は屋島にある神社の神々に願をかけた。

〔　　〕

扇の的――「平家物語」から (2)

扇の的

与一は義経に命じられ、敵味方が見守る中、舟の竿先に付けられた扇の的を射ることとなった。

与一、※かぶらを取つてつがひ、※よつ引いてひやうど放つ。
かぶら矢を取って（弓に）つがえ、十分引き絞ってひょうと放つ。
小兵といふぢやう、※十二束三伏、弓は強し、
小兵ということで、（矢は）十二束三伏、（だが）弓は強い、
浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要際※一寸ばかりおいて、
（矢は）浦一帯に響くほど長いうなりを上げて、誤りなく扇の要の際から一寸ほど離れたところを、
ひいふつとぞ射切つたる。
ひいふっと　射切った。
かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。
かぶら矢は海に落ち、　扇は空へ舞い上がった。
しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、
（扇は）しばしの間は空中にひらめいていたが、
海へさつとぞ散つたりける。
さっと　散ったのだった。
夕日の輝いたるに、皆紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、
夕日が輝いている中に、真っ赤な扇で（金の）日輪が描かれているものが、白い波の上に漂い、
浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、舟端をたたいて感じたり、
浮いたり沈んだり揺られていたのを、　舟端をたたいて感嘆し、
陸には源氏、※えびらをたたいてどよめきけり。
えびらをたたいてはやし立てた。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、
感に堪えなかった（感動した）のかと見えて、
舟のうちより、①年五十ばかりなる男の、※黒革をどしの鎧着て、
舟の中から、　年が五十ほどの男で、
※白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。
持った者が、　扇の立ててあった所に立って　舞を舞った。
※伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、「御定ぞ、つかまつれ。」
与一の後ろへ（馬を）歩ませ近寄って、　御命令であるぞ、射よ。
と言ひければ、今度は②※中差取つてうちくはせ、
と言ったので、　中差を取って（弓に）つがえ、
よつ引いて※しや頸の骨をひやうふつと射て、舟底へ逆さまに射倒す。
十分引き絞って　男の頸の骨をひょうふっと射て、
平家の方には音もせず、
音もなく（静まり返り）、
源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。
「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、「情けなし。」と言ふ者もあり。
心ないことを。

※かぶら…かぶら矢。かぶらは矢の先に付けると射たときに音が出る道具で、開戦の合図などに用いられた。
よつ引いて…よく引いて、という意味で、弓を十分に引き絞って。
十二束三伏…束は一握り（指四本分）、伏は指一本分の幅。　一寸…約三センチメートル。
えびら…矢を入れる道具。　黒革をどし…濃い色の革ひもで鎧の板をつづり合わせたもの。
白柄…木地のままで何も塗っていない白木の柄。　伊勢三郎義盛…義経に仕える重臣。
中差…えびらに差した矢のうち、戦闘用の矢。　しや頸…相手の首をののしって言う語。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 例に従って、次の言葉に含まれる係りの助詞を□で囲み、変化している結びの部分に――線を引きなさい。

(例) さぬきの造(みやつこ)と[なむ]いひける

扇は空へぞ上がりける

(2) 本文に用いられている擬声語(ぎせいご)(擬音語)・擬態語のうち、次の音を表すものを選びなさい。

放たれた矢が風を切って飛び、勢いよく扇を射切った音。

ア ひやう　**イ** ひいふつ　**ウ** ひやうふつ　〔　〕

(3) ――線①「年五十ばかり……持つたる」とあるが、この人物は平家方と源氏方のいずれの人物か。適当なものを選びなさい。

ア 平家方　**イ** 源氏方　〔　〕

(4) ――線②「中差取つてうちくはせ」の主語に当たる人物を選びなさい。

ア 与一　**イ** 年五十ばかりなる男　**ウ** 伊勢三郎義盛　〔　〕

(5) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 与一が扇を射ると、かぶら矢はしばらく空にひらめいた。
イ 与一が扇を見事に射切ると、平家は静まり返った。
ウ 与一が男を射倒(いたお)すと、源氏は舟端をたたいてどよめいた。
エ 与一が男を射たことを、心ないことだと言う者もいる。　〔　〕

扇の的――「平家物語」から(3)

平家は源氏の行為を残念に思ったのか、水ぎわに上がり、「攻め寄せてみよ。」と声をあげた。義経が八十余騎で攻め入ると、平家は舟に退く。源氏は馬の腹が水につかるほど海に入り、攻め戦った。このときどうしたことか、義経の弓が引っ掛けられ、落とされてしまう。義経は、味方が「ただお捨てなされ。」と申し上げるのも聞かず、弓を取って笑って帰ってきた。老臣たちは、「残念なことです。たとえどんなに高価な弓であるとしても、どうしてお命に替えられましょうか。」と言う。これに義経が答える。

「①弓の惜しさに取らばこそ。
弓が惜しくて取るのであればそうだが（そうではない）。

義経が弓といはば、二人しても張り、もしは三人しても張り、
義経の弓といえば、二人がかりで張り、または三人がかりで張る、

②叔父の※為朝が弓のやうならば、わざとも落として取らすべし。
叔父の為朝の弓のようだというならば、わざとでも落として（敵に）取らせよう。

尩弱たる弓を敵の取り持つて、
弱々しい弓を敵が取って、

『これこそ源氏の大将※九郎義経が弓よ。』
なんとこれが源氏の大将・九郎義経の弓だよ。

とて、嘲哢せんずるが口惜しければ、命にかへて取るぞかし。」
と言って、嘲笑するだろうというのが残念だったから、命に替えても取ったのだよ。

と宣へば、③みな人これを感じける。
とおっしゃると、全ての人がこれを聞き感じ入った。

※為朝…源為朝。義経の叔父にあたる。勇猛な武将で強弓の使い手として知られたが、保元の乱に破れ、流罪となった。
九郎…義経は父・義朝の九男で、通称を九郎という。その官位から九郎判官ともよばれる。

源為義
- 義朝
  - 頼朝
  - 範頼
  - 義経
- 義賢
  - 義仲
- 為朝

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣い(づか)に直し、ひらがなで答えなさい。

てうろう 〔　　　〕

(2) ――線①「弓の惜しさに取らばこそ」とあるが、ここで義経が言おうとしている内容となるように、(　　)に入るものを選びなさい。

弓が惜しくて取るならば老臣たちの言うように非難もされようが、(　　)。

ア 弓が惜しくて取ったのではない
イ 弓はかけがえのない大切なものだ
ウ 弓を取り返したので非難されることではない

〔　　　〕

(3) ――線②「叔父の為朝が弓」はどのような弓として述べられているか、適当なものを選びなさい。

ア 強い弓　イ 弱い弓　ウ 高価な弓

〔　　　〕

(4) ――線③「みな人これを感じける」とあるが、なぜ感じ入っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 義経が、本当は弓をわざと落として敵に取らせようとしていたのだと知ったから。
イ 義経が弓を敵に奪(うば)われてしまい、嘲笑(ちょうしょう)されて残念に思っているのだと知ったから。
ウ 義経が源氏や自身の恥(はじ)とならないように命がけで弓を取りに行ったのだと知ったから。

〔　　　〕

(5) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 義経の弓は二人や三人で張る弓だった。
イ 義経の弓は弱々しい弓だった。
ウ 義経の弓は為朝の弓のようだった。
エ 義経の弓は敵に奪われてしまった。

〔　　　〕

仁和寺にある法師――「徒然草」から(1)

兼好法師

『徒然草(つれづれぐさ)』の基礎知識(きそちしき)

『徒然草』は**鎌倉時代(かまくらじだい)**末頃(ごろ)の**兼好法師(けんこうほうし)**による**随筆(ずいひつ)**。筆者は鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての歌人で、出家し、兼好法師とよばれる。『徒然草』には、古い時代への憧れ(あこが)や仏教の**無常観**を背景に、社会や人々に対する鋭い(するど)批評が筆者の見聞を通して記されている。『枕草子(まくらのそうし)』と並んで、代表的な随筆文学と評される。

『徒然草』冒頭(ぼうとう)

①つれづれなるままに、②日暮らし硯(すずり)に向かひ(イ)て、
硯に向かって、
心にうつりゆく③よしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、
心に浮かんでは消えてゆく　何というあてもなく書きつけていると、
あやしうこそものぐるほしけれ。　（序段）
妙に心騒ぎがすることである。

年	時代	作品
1200	鎌倉	『新古今和歌集』『方丈記』『平家物語』
1300		『徒然草』

係(かか)り結び

古文には係りの助詞とよばれる語があり、文中で係りの助詞が用いられると、文末などの結びの部分が変化する。これを**係り結び**といい、感動や疑問などといった気持ちを強調する働きがある。

・係りの助詞
「**ぞ**」「**なむ**」「**こそ**」…前の語の強調
「**や**」「**か**」…………疑問・反語

（例）「山までは見ず。」と　言ひけり。
「山までは見ず。」と**ぞ**(係り)言ひける(結び)。　（前の発言が強調される）
尊く　おはしけり。
尊く**こそ**(係り)おはしけれ(結び)。　（「尊く」が強調される）

・古文の文末表現
「〜けり（〜た、〜たそうだ）」・「〜たり（〜た、〜ている）」
「〜なり（〜だ、〜である）」・「〜ぬ（〜た、〜てしまった）」
「〜ず（〜ない）」

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文の（　　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『徒然草』は（**A**）の末頃に（**B**）によって書かれた（**C**）である。

ア 平安時代　**イ** 鎌倉時代　**ウ** 室町時代
エ 鴨長明　**オ** 兼好法師　**カ** 藤原定家
キ 歌集　**ク** 軍記物語　**ケ** 随筆

A［　　］ **B**［　　］ **C**［　　］

(2) ――線①「つれづれなるままに」とあるが、これはどのような様子か。適当なものを選びなさい。

ア 忙しく、落ち着かない様子。
イ 硯に向かって集中する様子。
ウ 何もすることがない様子。

［　　］

(3) ――線②「日暮らし」の意味を選びなさい。

ア ある日　**イ** 一日中　**ウ** 夕方

［　　］

(4) ――線③「よしなしごと」の意味を選びなさい。

ア 大切なこと
イ とりとめもないこと
ウ 良くないこと

［　　］

(5) 次の言葉を現代仮名遣いに直し、ひらがなで答えなさい。

あやしうこそものぐるほしけれ

［　　］

(6) 次の文に含まれる係りの助詞を書きぬきなさい。

聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。

［　　］

仁和寺にある法師 ――「徒然草」から (2)

兼好法師

徒然草（つれづれぐさ）

※仁和寺（にんなじ）にある法師、年寄るまで※石清水（いはしみづ）を拝まざりければ、
仁和寺にいる法師が、年をとるまで石清水八幡宮を参拝したことがなかったので、

心憂（う）く覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人※徒歩（かち）より詣（まう）でけり。
残念なことに思われて、ただ一人で徒歩で参詣した。

極楽寺（ごくらくじ）・高良（かうら）などを拝みて、①かばかりと心得て帰りにけり。
極楽寺・高良神社などを参拝して、帰ってしまった。

さて、かたへの人にあひて、
仲間に向かって、

「②年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。
長年思っていたことを、果たしました。

③聞きしにも過ぎて、尊（たふと）くこそおはしけれ。
聞いていたのにも勝って、尊くいらっしゃいました。

そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、
それにしても、参拝している人々がみな山へ登ったのは、何かあったのだろうか、

④ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意（ほい）なれと思ひて、
知りたかったけれど、本来の目的であると思って、

山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達（せんだち）はあらまほしきことなり。
その道の先導者はあってほしいものである。

（第五十二段）

※仁和寺…京都市右京区御室にある真言宗の寺。
石清水…石清水八幡宮。京都府八幡市男山の山上にあり、ふもとには付属の極楽寺・高良神社があった。
徒歩…当時、都から石清水への参詣は、桂川・淀川を使う舟便が一般的だった。

重要語句

……はべり	……ます
おはす	いらっしゃる
ゆかし	見たい、聞きたい、知りたい

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「かばかりと心得て」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 石清水八幡宮（いわしみずはちまんぐう）はこれだけのものだと思い込（こ）んで
イ 極楽寺・高良神社はこれだけのものだと思い込んで
ウ 徒歩ではこれ以上、山に登れないと思い込んで

〔　　〕

(2) ――線②「年ごろ思ひつること」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア 石清水八幡宮に参拝すること。
イ 極楽寺・高良神社に参拝すること。
ウ どこかの神社に徒歩で参拝すること。

〔　　〕

(3) ――線③「聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ」とあるが、法師は何が尊かったと述べているのか。適当なものを選びなさい。

ア 仁和寺　イ 石清水　ウ かたへの人

〔　　〕

(4) ――線④「ゆかしかりしかど」とあるが、何を知りたかったのか。適当なものを選びなさい。

ア 参拝したかった石清水八幡宮はどこにあるか。
イ 山の上にある石清水八幡宮はどんな様子か。
ウ 参拝している人々が山に登っていたのは何かあったのか。

〔　　〕

(5) 次の本文中の表現について、含（ふく）まれる係りの助詞をそれぞれ書きぬきなさい。

A 何事かありけん
B 神へ参るこそ本意なれ

A〔　　〕　B〔　　〕

(6) 本文中で筆者の考えが述べられている一文を探し、最初の三字を答えなさい。

漢詩の風景（1）

石川 忠久

漢詩の基礎知識

漢詩は中国の伝統的な詩で、李白・杜甫などによる唐代の詩を中心に日本でも古くから親しまれてきた。漢詩の代表的な形式には、絶句と律詩がある。

- 絶句（四句）
  - 五言絶句
  - 七言絶句
- 律詩（八句）
  - 五言律詩
  - 七言律詩

漢詩には、押韻や対句などの表現技法がある。

・**押韻**…決まった箇所に同じ響きの音をもつ字を置く（韻を踏む）。
・**対句**…形や意味が対になる二つの句を並べる。

●絶句

絶句は**四句**からなる漢詩で、一句の字数によって五言絶句と七言絶句に分けられる。絶句は**起句**・**承句**・**転句**・**結句**で構成される。

・**五言絶句**

第一句（起句）□□□□□
第二句（承句）□□□□■
第三句（転句）□□□□□
第四句（結句）□□□□■

・**七言絶句**

第一句（起句）□□□□□□■
第二句（承句）□□□□□□■
第三句（転句）□□□□□□□
第四句（結句）□□□□□□■

五言絶句は偶数句の末尾で、七言絶句は第一句と偶数句の末尾で押韻する。

●律詩

律詩は**八句**からなる漢詩で、一句の字数によって五言律詩と七言律詩に分けられる。律詩は二句ずつ首聯・頷聯・頸聯・尾聯の聯にまとめられる。

・**五言律詩**

首聯　第一句　□□□□□
　　　第二句　□□□□■
頷聯　第三句　□□□□□
　　　第四句　□□□□■
頸聯　第五句　□□□□□
　　　第六句　□□□□■
尾聯　第七句　□□□□□
　　　第八句　□□□□■

・**七言律詩**

首聯　第一句　□□□□□□■
　　　第二句　□□□□□□■
頷聯　第三句　□□□□□□□
　　　第四句　□□□□□□■
頸聯　第五句　□□□□□□□
　　　第六句　□□□□□□■
尾聯　第七句　□□□□□□□
　　　第八句　□□□□□□■

五言律詩は偶数句の末尾で、七言律詩は第一句と偶数句の末尾で押韻する。

また、頷聯（第三句・第四句）、頸聯（第五句・第六句）を対句にするという規則がある。

確認テスト

(1) 絶句と律詩はそれぞれ何句からなるか。漢数字で答えなさい。

絶句 □ 句　律詩 □ 句

(2) 次の漢詩の形式を答えなさい。

春眠不覚暁
処処聞啼鳥
夜来風雨声
花落知多少
（「春暁(しゅんぎょう)」孟浩然(もうこうねん)）

□ 言 □ □

(3) 絶句の第一句から第四句は、内容の上でそれぞれ何句というか。それぞれ解答欄(かいとうらん)に当てはまる漢字を答えなさい。

第一句 □ 句　第二句 □ 句
第三句 □ 句　第四句 □ 句

(4) 五言絶句で、原則として押韻する箇所の□をぬりつぶしなさい。

第一句 □□□□□
第二句 □□□□□
第三句 □□□□□
第四句 □□□□□

(5) 七言絶句で、原則として押韻する箇所の□をぬりつぶしなさい。

第一句 □□□□□□□
第二句 □□□□□□□
第三句 □□□□□□□
第四句 □□□□□□□

(6) 律詩で原則として対句になるのは第何句と第何句か。漢数字で答えなさい。

第 □ 句と第 □ 句
第 □ 句と第 □ 句

漢詩の風景 (2)

石川 忠久

漢文の訓読

漢文を日本語の規則に従って読むことを**訓読**という。漢字だけで書かれた原文を**白文**といい、これに**訓点**という訓読のための文字や記号を加えたものを**訓読文**という。訓点には、送り仮名・返り点・句読点がある。

〈白文〉春眠不覚暁 →〈訓読文〉春 眠 不レ 覚エレ 暁ヲ

●送り仮名…漢字の右下に、カタカナで送り仮名を書く。訓読では、「て・に・を・は」といった助詞や、助動詞なども補う。

(例)国 破レテ 山 河 在リ

●返り点……漢文を日本語の語順で読むため、漢字の左下に補う。

・**レ点**………下から上に一字返って読むことを表す。

(例) 2 1 → 不レ 覚エレ 暁ヲ

・**一・二点**…下から上に二字以上返って読むことを表す。

(例) 3 1 2 → 聞二ク 啼 鳥ヲ一

訓読文を漢字仮名交じり文に書き改めたものを**書き下し文**という。

〈訓読文〉春 眠 不レ 覚エレ 暁ヲ →〈書き下し文〉春眠暁を覚えず

訓読文を書き下し文に直すときは、次のような決まりがある。

・送り仮名はひらがなに改める。

(例)国 破レテ 山 河 在リ → 国破**れて**山河在**り**

・返り点が示す順に従って書き改める。

(例)**聞**二ク **啼** **鳥**ヲ一 → **啼鳥**を**聞**く

・漢字は原則そのままだが、「之(の)」「不(ず)」などの助詞・助動詞はひらがなに改める。

(例)**不**レ 覚エレ 暁ヲ → 暁を覚え**ず**

〈白文〉春眠不覚暁

〈訓読文〉春 眠 不レ 覚エレ 暁ヲ

〈書き下し文〉春眠暁を覚えず

確認テスト

(1) 返り点に従って、次の□に読む順に算用数字を書きなさい。

□レ　□　□　□レ　□

(2) 返り点に従って、次の□に読む順に算用数字を書きなさい。

□レ　□　□二　□　□一

(3) 次の数字の順に従って□を読むように、返り点を書き入れなさい。

2　1　5　4　3　6

(4) 次の数字の順に従って□を読むように、返り点を書き入れなさい。

1　5　2　3　4

(5) 次の訓読文を書き下し文に直し、解答欄（かいとうらん）に当てはまる言葉を書き入れなさい。ただし「不」は助動詞に当たる言葉である。

渾（すべテ）欲（ほつス）レ不（ざラント）レ勝（たヘ）レ簪（しんニ）

渾べて簪に［　　　　］

漢詩の風景(3)

石川 忠久

A 春暁（シュンギョウ）　孟浩然（モウコウネン）

春眠暁を覚えず
処処啼鳥を聞く
夜来風雨の声
花落つること知る多少

春眠不レ覚レ暁ヲ
処処聞ニク啼鳥ヲ
夜来風雨ノ声
花落ツルコト知ル多少

（中略）

このような、四句から成る漢詩を、絶句といいます。短い詩型ですから、あれもこれも歌い込むことはできません。そこで、詩人は、ここぞという一点を切り取って心の高まりや感動を表現します。その工夫の一つが、「起承転結」という構成法です。

第一句は、歌い起こしで、起句といいます。起句が平凡だと詩は生きません。「春暁」では、春の眠りの心地よさを、朝になったことに気づかないと表現するところに、詩人の発想があります。第二句は承句といい、起句を承けてさらに展開します。第三句は転句で、場面が転換します。「夜」「風雨」という語が暗い雰囲気をかもし出し、前半の明るい情景から一変します。これが転換の妙味、読者に、おやっと思わせます。最後は、全体を締めくくる結句です。読者の眼前には、庭一面に散り敷いた花びらが、ぱっと広がります。花びらは雨にぬれ、朝日を浴びていよいよ鮮やかです。転句が暗いだけによけい印象が強くなるのです。そして、それが余韻となって、春の朝の気分が漂います。見事な収束です。

孟浩然

孟浩然は唐代の詩人。「春暁」は孟浩然が暮らしていた鹿門山の春の朝を、起承転結の構成でうたっている。

・起句…歌い起こす
・承句…起句を承けて展開する
・転句…場面が転換する
・結句…全体をまとめ結ぶ

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 「春眠暁を覚えず」が表す意味を選びなさい。

ア 春の気候は暖かで、朝うっかり眠ってしまうほどだ。
イ 春の明け方は忙しく、眠っていたことも覚えていない。
ウ 春の眠りは心地よく、夜が明けたことにも気づかない。

〔　　〕

(2) 「処処啼鳥を聞く」が表す意味を選びなさい。

ア あちらこちらで鳥の鳴く声が聞こえる。
イ どこかで鳥が鳴いていると聞いた。
ウ いつか鳥が鳴いている声が聞こえた。

〔　　〕

(3) 「花落つること知る多少」が表す内容を選びなさい。

ア 花はどれほど散っただろうかと、庭の様子を想像している。
イ 花が多少散っているのを、庭の近くで眺めている。
ウ 花は散ってしまうものだと、庭の花から感じている。

〔　　〕

(4) **A**の漢詩で、ゆうべのことを回想しているのは第何句か。漢数字で答えなさい。

第〔　　〕句

漢詩の風景 (4)

石川 忠久

B 絶句　杜甫

江は碧にして鳥は逾よ白く
山は青くして①花は然えんと欲す
今春看す又過ぐ
②何れの日か是れ帰年ならん

江ハ碧ニシテ鳥ハ逾ヨ白ク
山ハ青クシテ花ハ欲スレ然エント
今春看ス又過グ
何レノ日カ是レ帰年ナラン

この詩は、杜甫が※成都にいたときの作です。うち続く戦乱を避けて、友人を頼りにこの地へ来たのです。まず、この地の美しい風景が前半の二句に描かれます。川は深みどりに澄み渡り、その水の色をバックに水鳥はいっそう白く見える。「碧」は深く澄んだみどりです。

（中略）

C 黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る　李白

③※故人西のかた※黄鶴楼を辞し
※煙花三月※揚州に下る
孤帆の遠影碧空に尽き
唯だ見る長江の天際に流るるを

故人西ノカタ辞シ二黄鶴楼一ヲ
煙花三月下ル二揚州一ニ
孤帆ノ遠影碧空ニ尽キ
唯ダ見ル長江ノ天際ニ流ルルヲ

黄鶴楼は武昌の町にあります。長江を見下ろすこの楼の上で、孟浩然を見送った詩です。二人とも浪人の身の上でした。就職の手づるを求めての旅でしょうか。孟浩然はここから揚州へ行くのです。

※成都…現在、四川省の省都・成都市。　故人…ここでは古くからの親友のこと。
黄鶴楼…武昌（現在の湖北省 武漢市の一部）にあった高楼で、長江に面していた。仙人が描いた黄色い鶴が壁から抜け出し、仙人を乗せて飛び去ったという伝説がある。
煙花…春がすみ。　揚州…現在、江蘇省 揚州市。古くは広陵といった。

杜甫と李白

杜甫と李白は唐代の二大詩人で、杜甫は「詩聖」、李白はその作風から「詩仙」と称される。

「絶句」は、杜甫が都の長安（現在、陝西省の省都・西安市）を離れ、成都にいたときのもので、成都の春の美しい風景と、故郷へ帰れないままに春を過ごす悲しみがうたわれている。

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」は、武昌から広陵（揚州）に向かう孟浩然を、李白が黄鶴楼で見送ったときのもの。孟浩然を乗せた舟が消えゆく姿と別れの悲しみがうたわれている。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) **B・C**の漢詩の形式をそれぞれ選びなさい。

ア 五言絶句　**イ** 七言絶句
ウ 五言律詩　**エ** 七言律詩

B〔　　〕 C〔　　〕

(2) **B**で韻(いん)を踏(ふ)んでいる句末の字すべてに○を付けなさい。

白　然　過　年

(3) **B**の前半の二句は対句(ついく)となっている。「江は碧にして」と対になっている箇所(かしょ)を、書き下し文から書きぬきなさい。

〔　　〕

(4) ——線①「花は然えんと欲す」の意味を選びなさい。

ア 花が今にも燃え出すかのように赤く咲(さ)いている。
イ 花がまるで燃えてしまったかのように散っている。
ウ 花がことごとく燃え尽(つ)きたかのようにしおれている。

〔　　〕

(5) ——線②「何れの日か是れ帰年ならん」でうたわれている心情を選びなさい。

ア いつまでも美しいこの土地にいたいと願う気持ち。
イ まもなく故郷に帰れることをよろこぶ気持ち。
ウ 今年も故郷に帰れずにいることを嘆(なげ)く気持ち。

〔　　〕

(6) ——線③「故人」はここでは誰(だれ)を指しているか。適当なものを選びなさい。

ア 孟浩然　**イ** 李白　**ウ** 杜甫

〔　　〕

(7) **C**の漢詩の後半の情景として適当なものを選びなさい。

ア 黄鶴楼にいる孟浩然の姿が青空のかなたに消え、水平線まで続く長江を孟浩然が眺(なが)めている。
イ 孟浩然を乗せた舟の姿が青空のかなたに消え、天の果てまで流れる長江を李白が眺めている。
ウ はるか遠くまで流れていく長江が青空のかなたに消え、長江を下りゆく人々を李白と孟浩然が眺めている。

〔　　〕

漢詩の風景(5)

石川 忠久

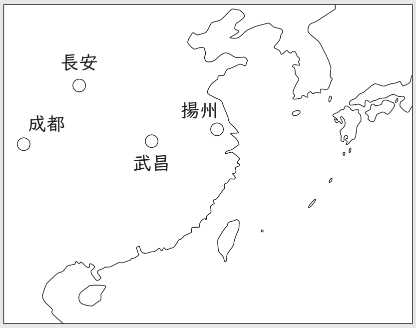
D 春望　杜甫（とほ）

国破れて山河在り
（戦乱で）国都（長安）は破壊されても、山や河はかわらずに在る。
城春にして草木（そうもく）（ソウ）深し
城壁で囲まれた都市（長安）も春となり、草木が深く生い茂っている。
時に感じては花にも涙（なみだ）を濺（そそ）ぎ
時勢に悲しみを感じては、花にも涙を流し、
別れを恨（うら）んでは鳥にも心を驚（おどろ）かす
（戦乱による家族との）離別を恨めしく思っては、鳥の声にも心を驚かす。
烽火（ほうくわ）（カ）三月（さんげつ）に連なり
戦乱ののろしは三か月間続き、
家書万金（ばんきん）に抵（あた）る
家族からの手紙は万金にも値する（ほど貴重である）。
白頭掻（か）けば更（さら）に短く
白髪頭をかけば抜け落ちて少なくなり、
渾（す）べて簪（しん）に勝（た）（エ）へざらんと欲（ほっ）（ホッ）す
全く冠を留めるかんざしもさせないほどだ。

国破レテ山河在リ
城春ニシテ草木深シ
感ジテハレ時ニ花ニモ濺ギレ涙ヲ
恨ンデハレ別レヲ鳥ニモ驚カスレ心ヲ
烽火連ナリ二三月ニ一
家書抵ル二万金ニ一
白頭掻ケバ更ニ短ク
渾ベテ欲スレ不ザランレ勝ヘレ簪ニ

長安

長安（ちょうあん）は唐（とう）の都であったが、七五五年からの安史（あんし）の乱で破壊（はかい）され、後に杜甫は長安を離（はな）れることとなった。



確認テスト 詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) **D**の漢詩の形式を選びなさい。

ア 五言絶句　**イ** 七言絶句
ウ 五言律詩　**エ** 七言律詩

［　　］

(2) **D**で韻を踏んでいる句末の字すべてに○を付けなさい。

在　深　涙　心　月　金　短　簪

(3) **D**で対句となっているものをすべて選びなさい。

ア 第一句と第二句　**イ** 第三句と第四句
ウ 第五句と第六句　**エ** 第七句と第八句

［　　］

(4) ——線部「山河在り」と対になっている箇所を書き下し文から書きぬきなさい。

［　　］

(5) 詩の内容に合うものを選びなさい。

ア 戦乱の中で、都市ばかりでなく山や河も荒れ果てている。
イ 戦乱が終わり、訪れた穏やかな春を楽しんでいる。
ウ 戦乱が続き、家族からの手紙は貴重なものになっている。

［　　］

君は「最後の晩餐」を知っているか(1)

布施 英利

3 「モナ・リザ」や「最後の晩餐」など、レオナルドの絵は、それまでの絵画とは違う、全く新しいものだった。彼は、人体の科学である「解剖学」や、空間の科学である「遠近法」、それに光の科学である「明暗法」などを研究し、新しい絵画を生み出したのだ。

4 「科学が生み出した新しい芸術」などというと、どこか難しいと思うかもしれない。しかし、イタリアに行って「最後の晩餐」の前に立ったら、どう思うだろうか。私は、この絵を見たとき、なぜか「かっこいい。」と思った。それが名画というものなのか。すばらしい絵の前に立つと、理屈ではなく、まず衝撃がやってくる。それから、じっくりと分析する。分析もまた、名画を味わう楽しみの一つである。

5 「最後の晩餐」は、イタリアの北の町、ミラノにある。サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院の食堂の壁画として、十五世紀末に描かれた。高さ四・二メートル、幅九・一メートルもある巨大な絵だ。

(中略)

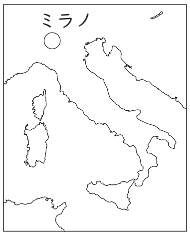
9 中央にいるのがキリストである。彼は、弟子の一人に裏切られ、やがて磔になる。ここに描かれている場面は、裏切りがある、という予言を耳にした弟子たちが驚き、ざわめいているところだ。明日、キリストは磔刑になる。だから、これが「最後の晩餐」なのだ。

10 弟子たちの動揺は、手のポーズにも表れている。たくさんの手が描かれているが、試しに、その一つ一つのポーズを君もまねてみよう。手のポーズは心の動きを表すが、ここにはいろいろな手があり、いろいろな心の動きがある。驚き、失意、怒り、諦め……。まるで手のポーズの見本帳である。それは、手に託された心の動きの見本帳でもある。

11 レオナルドは、どうしてこんなにもうまく、いろいろな手を描くことができたのだろうか。実は、彼は人体の解剖を通して骨格や筋肉の研究をし、人の体がどのような仕組みでできているかを知り尽くしていた。だから、手だけでなく顔の表情や容貌も、一人一人の心の内面までもえぐるように描くことができた。

(3~11は教科書本文における形式段落番号を表します)

「最後の晩餐」レオナルド・ダ・ヴィンチ



確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の科学に当たるものとして本文中に挙げられているものを、それぞれ三字で書きぬきなさい。

①人体の科学

②空間の科学

③光の科学

(2) 筆者は、「最後の晩餐」を見たときにまずどのように思ったか。適当なものを選びなさい。

ア 新しい　イ どこか難しい　ウ かっこいい

(3) 「最後の晩餐」に描かれているそれぞれの「手のポーズ」は何を表しているか。本文中から四字で書きぬきなさい。

(4) 「最後の晩餐」が、さまざまな手のポーズが描かれた絵であることを、筆者はどのように表現しているか。解答欄に当てはまる言葉を本文中から三字で書きぬきなさい。

まるで手のポーズの［　　　］である。

(5) 「最後の晩餐」の説明として適当なものを選びなさい。

ア 古典的な技法のみを用いて描かれた伝統的な様式の絵画で、弟子たちがざわめく場面が表現されている。

イ 修道院の食堂の壁画として十五世紀の末に描かれ、予言を耳にした弟子たちの様子が表現されている。

ウ 予言を聞いた弟子たちの落ち着きはらった様子が、さまざまな手のポーズにも表現されている。

君は「最後の晩餐」を知っているか(2)

布施 英利

（次の文章は、「最後の晩餐」に関する評論です。）

12 さらに注目してほしいのは、ここに描かれている室内の壁や天井だ。壁の※タピスリーや天井の格子模様を見てみよう。壁がだんだん狭くなって、タピスリーも奥にいくほど小さくなる。これが遠近法だ。レオナルドは、絵画の遠近法を探究し、それをこの絵で完成させた。この絵には、遠くのものは小さく見えるという、遠近法の原理が使われている。室内の空間を、遠くにいくにつれて小さく描くことで、部屋に奥行きが感じられるようになる。

13 遠近法には、さらに別の効果もある。壁のタピスリーや天井の格子など、奥に向かって狭まっていく線を延ばしていくと、その線は一つの点に集まる。これを遠近法の消失点というが、なんと、その点の位置が、キリストの額なのだ。これにより、絵を見る人の視線は自然とキリストに集まっていく。この絵の主人公は、キリスト。誰が見ても、そう思わせる効果がある。遠近法という絵画の技法が、そこに描かれた人物たちの物語を、ドラマチックに演出している。これは、描かれた絵が偶然そうなったということではない。レオナルドは、明らかに計算をしてこの絵を描いたのだ。その証拠に、キリストの右のこめかみには、くぎの穴の跡がある。このくぎから糸を張って、あちこちに延ばし、画面の構図を決めていったのだ。まるで設計図のような絵ともいえる。

14 また、レオナルドは、光の効果も緻密に計算していた。描かれた部屋の白い壁を見ると、右側には光が当たり、左側は影になっている。この壁画は食堂の壁に描かれているが、描かれた部屋の明暗は、食堂の窓から差し込む現実の光の方向と合致している。そのため、壁に描かれた部屋は、あたかも本物の食堂の延長にあるようにすら見える。

（12～14は教科書本文における形式段落番号を表します）

※タピスリー…壁掛けなどに用いられる織物。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の「最後の晩餐」で用いられている描き方はどのような効果を生むか、それぞれ選びなさい。

① 室内の空間を、遠くにいくにつれて小さく描いている。
② 遠近法の消失点の位置が、キリストの額になるように描いている。
③ 描かれた部屋の明暗が、壁画のある食堂に差し込む現実の光の方向と合致するように描いている。

ア 絵画の主人公がキリストであると感じさせる。
イ 絵画の中の部屋に、奥行きがあるように感じさせる。
ウ 描かれた部屋が、本物の食堂の延長にあるように感じさせる。

①〔　　〕 ②〔　　〕 ③〔　　〕

(2) 筆者は、レオナルドが遠近法の技法を用いた証拠として、どのような事実を挙げているか。解答欄に当てはまる言葉を本文中から六字で書きぬきなさい。

描かれたキリストの右のこめかみに□□□□□□があること。

(3) 「最後の晩餐」の説明として適当なものを選びなさい。

ア キリストを中央に大きく描き、それ以外を小さく描くことで、絵の主人公がキリストであると感じさせている。
イ キリストの額に遠近法の消失点が位置するように描かれることで、人物たちの物語がドラマチックに演出されている。
ウ 遠近法の消失点に向かって延びていく線が、壁画のある食堂に差し込む現実の光の方向と合致するように描かれている。

〔　　〕

君は「最後の晩餐」を知っているか(3)

布施 英利

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

区分	段落	内容
序論	1~4	**イタリアの天才画家** ボッティチェリ、ミケランジェロらがいるが、一番に挙がるのはレオナルド・ダ・ヴィンチ。 **レオナルドの絵は「科学が生み出した新しい芸術」** ＝ 解剖学・遠近法・明暗法 「最後の晩餐」はなぜか「かっこいい。」と感じる。 衝撃がやってきて、それからじっくり分析する。 分析も名画を味わう楽しみの一つである。
本論（分析）	5~9	**「最後の晩餐」の構図**
	10・11	**「最後の晩餐」と解剖学** レオナルドは解剖を通して人体の仕組みを知り尽くしていたので、心の内面までもえぐるように、手や、顔の表情、容貌を描くことができた。
	12・13	**「最後の晩餐」と遠近法** ①室内の空間を、遠くにいくにつれて小さく描く。 （効果）部屋に奥行きが感じられる。 ②遠近法の消失点がキリストの額になっている。 （効果）絵を見る人の視線が自然とキリストに集まり、誰が見てもこの絵の主人公はキリストだと思わせる。
	14	**「最後の晩餐」と明暗法** 描かれた部屋の明暗が、現実の光の方向と合致している。 （効果）描かれた部屋が、あたかも本物の食堂の延長にあるように見える。
	15・16	遠近法や明暗法によって、描かれた部屋が本物の部屋のように見える。 解剖学、遠近法、明暗法といった絵画の科学とその可能性を目のあたりにできることが、「最後の晩餐」を「かっこいい。」と思わせる一つの要因である。
結論	17~21	**修復された「最後の晩餐」** 修復された絵にはもう細かい描写はないが、実際に絵を眺めると文句なく魅力的である。 細部がないために、かえって絵の「全体」がよく見えるようになった。レオナルドが絵画の科学を使って表現しようとしたものがよく見えてくるから、いきなり「かっこいい。」と思える。 五百年前の名画は今も生きている。芸術は永遠なのだ。

（1~21は教科書本文における形式段落番号を表します）

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 名画を味わうためにはその絵を見てまずどう感じたかが重要であって、分析は絵画を味わうこととは関係のない行為である。

イ 絵画の科学とその可能性を目のあたりにできることは、「最後の晩餐」を「かっこいい。」と思わせる要因とはいえない。

ウ 修復された「最後の晩餐」は、細部が剝がれ落ちて細かい描写が失われてしまい、以前と比べて全体がわかりづらくなった。

エ 「最後の晩餐」の修復によって、レオナルドが絵画の科学を使って表現しようとしたものが明快に見えるようになった。

〔　　〕

(2) 本文の説明のしかたに合うものを選びなさい。

ア 筆者は、「最後の晩餐」と他の作品との比較を中心に、分析された事実を客観的に説明している。

イ 筆者は、「最後の晩餐」に感じるかっこよさを述べたうえで、その描き方を分析しながら論じている。

ウ 筆者は、「最後の晩餐」を例に挙げて、芸術作品を保護していくことの難しさを主張している。

〔　　〕

(3) 次のそれぞれの描き方に用いられている絵画の科学を選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① 描かれた部屋の明暗が、現実の光の方向と合致していることで、描かれた部屋が本物の食堂の延長にあるように感じられる。

② 室内の空間が遠くにいくにつれて小さく描かれていることで、描かれた部屋に奥行きが感じられる。

③ 人体の仕組みに関する研究にもとづいて、手や顔などが、その人物の心の内面までえぐるように描かれている。

④ 絵を見る人の視線が自然とキリストに集まり、この絵の主人公はキリストであると思わせるように描かれている。

ア 解剖学　イ 遠近法　ウ 明暗法

①〔　　〕　②〔　　〕　③〔　　〕　④〔　　〕

7 価値を語る

「最後の晩餐」の新しさ(1)

レオナルド・ダ・ヴィンチ作

藤原 えりみ

2 「最後の晩餐」は、古くからキリスト教の重要な主題として描かれてきた。では、それまでの絵画と比べて、レオナルドの何がそれほど新しかったのだろうか。

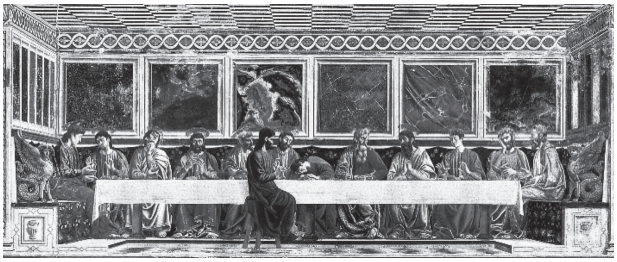
3 過去の作品（❶❷）を見て、まず気づくのは、十三人が食卓を囲む構図の難しさである。人物を重ねたり背を向かせたりと、画家たちは何世紀もの間、試行錯誤を繰り返してきた。やがて、裏切り者のユダのみを食卓の手前に配置する構図が考案され、カスターニョの作品（❸）に見られるように、空間には奥行きが生まれ、人物の感情表現も豊かになった。

4 だが、この作品と比べてもレオナルドの構図（❹）は画期的だ。奥行きは格段に増し、キリストの左右に三人ずつに分けて配置された使徒たちは、裏切り者を詮索したり、キリストを問い詰めたりと、画面にドラマチックな動きを与えている。動きの少ないカスターニョの作品とは対照的だ。激情を表す腕の動きやまなざしには、構図上独立し、静けさを保つキリストに視線を誘導する効果もある。

（2～4は教科書本文における形式段落番号を表します）

6世紀	❶作者不詳
7世紀	
8世紀	
9世紀	
10世紀	
11世紀	
12世紀	
13世紀	
14世紀	❷ジョット
15世紀	❸カスターニョ ❹レオナルド（ルネサンス）
16世紀	
17世紀	
18世紀	
19世紀	
20世紀	修復作業
21世紀	

❶「最後の晩餐」作者不詳　６世紀作



❸「最後の晩餐」アンドレア・デル・カスターニョ　1447年頃作

❷「最後の晩餐」ジョット・ディ・ボンドーネ　1304-05年作

❹「最後の晩餐」レオナルド・ダ・ヴィンチ　1495-98年作

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中から、問いを投げかけることでテーマを提示している一文を探し、その最初の五字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

(2) レオナルドの「最後の晩餐」の説明として適当なものを選びなさい。

ア 「最後の晩餐」を歴史上初めて主題とした絵画である。
イ 人物の配置は、何世紀もの間の伝統に沿ったものである。
ウ 過去の作品に比べ構図が画期的で、画面に動きがある。

〔　　〕

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア レオナルドの「最後の晩餐」の新しさを、他の作品と比較しながら説明している。
イ 筆者が「最後の晩餐」に感じた印象を、比喩の表現を用いながら論じている。
ウ 読者に呼びかける表現が多用され、「最後の晩餐」の魅力をわかりやすく述べている。

〔　　〕

レオナルド・ダ・ヴィンチ作「最後の晩餐」の新しさ (2)

藤原 えりみ

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

区分	段落	内容
序論	1・2	レオナルド・ダ・ヴィンチ作「最後の晩餐」は、※ルネサンスを代表する美術作品の一つとされる。「最後の晩餐」は古くから描かれてきたが、レオナルドの作品は何が新しかったのか。
本論	3・4	**過去の作品との構図の比較** ❶六世紀、作者不詳 人物を重ねる。 ❷十四世紀、ジョット 人物に背を向かせる。 ❸十五世紀中頃、カスターニョ ユダのみを手前に配置する。奥行きが生まれ、人物の感情表現も豊かだが、動きは少ない。 ❹十五世紀末、レオナルド 構図が画期的で、奥行きが格段に増している。使徒の様子が、画面に動きを与えている。使徒の腕の動きやまなざしには、キリストに視線を誘導する効果もある。
	5	**過去の作品との人物の描き方の比較** レオナルドの「最後の晩餐」は光輪を描いていない。聖書の中の出来事を現実の情景として描こうとしたのだろう。
	6	**修復で明らかになった緻密な描写** 修復によって、レオナルドの「最後の晩餐」の緻密な描写が明らかになった。
結論	7	レオナルドの「最後の晩餐」は、その新しさで人々を驚かせ、魅了した。

（1～7は教科書本文における形式段落番号を表します）

※ルネサンス…十四世紀頃にイタリアを中心として起こった、古典文化を理想とした文化の革新運動。

文章の比較

文章を観点ごとに比較すると、各文章の特徴がはっきりする。

	君は「最後の晩餐」を知っているか	「最後の晩餐」の新しさ
作品への評価	かっこいい	新しい
着眼点	解剖学、遠近法、明暗法といった絵画の科学	構図、表現（光輪）、緻密な描写
文章の種類	評論（物事を評価し、自分の見方を論じる）	解説（物事をわかりやすく説明する）
説明のしかた	作品への評価を述べ、その魅力を絵画の科学の観点から分析している。	作品の新しさを、他の作品との比較から説明している。
表現の特徴	比喩を用いた表現や、読者に問いかけたり、語りかけたりする表現が使われている。	事実を客観的に述べている。

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) レオナルドの「最後の晩餐」に当てはまるものを選びなさい。

ア 構図が画期的で、奥行きも過去の作品に比べて増している。

イ キリストの腕の動きやまなざしが使徒の視線を誘導している。

ウ 人物の頭部の光輪が、極めて緻密に描写されている。

［　　］

(2) 「『最後の晩餐』の新しさ」の内容に合うものを二つ選びなさい。

ア 「最後の晩餐」に感じるかっこよさを、絵画の科学を説明しながら分析的に論じている。

イ レオナルドの「最後の晩餐」の新しさを、過去の「最後の晩餐」との比較から説明している。

ウ 修復作業によって明らかになったレオナルドの「最後の晩餐」の緻密な描写を解説している。

エ 細部が失われたことによってかえって見えるようになった「最後の晩餐」の魅力を述べている。

［　　・　　］

文法への扉2

走る。走らない。走ろうよ。（用言の活用）(1)

活用

　文中で、言葉の組み合わせに応じて単語の形が変化することを、**活用**という。自立語では**用言**（動詞・形容詞・形容動詞）が活用する。

・**動詞**………動作・作用・存在を表す。言い切りが「**ウ段**」で終わる。
・**形容詞**……状態・性質を表す。言い切りが「**い**」で終わる。
・**形容動詞**…状態・性質を表す。言い切りが「**だ**・**です**」で終わる。

　単語が活用するときに、形が変わらない部分を**語幹**、形が変わる部分を**活用語尾**（ごび）という。

（例）［話］す＋た　→　［話］し　た
　　　［明る］い＋なる　→　［明る］く　なる
　　　［静か］だ＋なる　→　［静か］に　なる

動詞の活用形

　活用で変化した単語の形を活用形という。動詞の活用形は６種類に分けられる。

①**未然形**…まだ動作・状態が実現していないことを表す形。
　助動詞「ない（ぬ）」「う（よう）」「れる（られる）」「せる（させる）」などが続く。
②**連用形**…他の用言や、助動詞「ます」「た（だ）」、助詞「て（で）」などが続く形。
③**終止形**…言い切る形。
④**連体形**…体言や、助詞「ので」「のに」などが続く形。
⑤**仮定形**…もし～すれば、と仮定する形。助詞「ば」が続く。
⑥**命令形**…命令して言い切る形。

基本形	活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
	語幹／続き方	―ない ―う（よう）	―ます ―た（だ） ―て（で）	―。 言い切る。	―とき ―こと ―ので	―ば	―。 命令して言い切る。
話す	はな	さ そ	し	す	す	せ	せ

確認テスト

(1) 動詞「書く」を、解答欄に合わせて形を変えなさい。また、「書く」の語幹をひらがなで答えなさい。

［　］ます　語幹［　］

(2) 形容詞「暑い」を、解答欄に合わせて形を変えなさい。また、「暑い」の語幹をひらがなで答えなさい。

［　］なる　語幹［　］

(3) 形容動詞「おだやかだ」を、解答欄に合わせて形を変えなさい。また、「おだやかだ」の語幹をひらがなで答えなさい。

［　］なる　語幹［　］

(4) 動詞「行く」を、①～④の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、ひらがなで答えなさい。

①［　］ない　②［　］う

③［　］ます　④［　］ば

(5) 次の①～⑥の――線部の動詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**～**カ**から選びなさい。

① 校庭で走る。［　］　② 走る人を見た。［　］

③ いざ走れ。［　］　④ 走れば間に合う。［　］

⑤ 私が走ります。［　］　⑥ まだ走らない。［　］

ア 未然形　**イ** 連用形　**ウ** 終止形

エ 連体形　**オ** 仮定形　**カ** 命令形

動詞の活用の種類

動詞の活用の仕方は5種類に分けられる。

①**五段活用**……活用語尾(ごび)が五段(ア・イ・ウ・エ・オ)にわたって変化する。
②**上一段活用**…活用語尾がイ段を中心に変化する。
③**下一段活用**…活用語尾がエ段を中心に変化する。
④**カ行変格活用**…「来る」のみの特殊(とくしゅ)な活用。
⑤**サ行変格活用**…「する」や「〜する」の形の複合語の特殊な活用。

活用の種類	基本形	語幹＼続き方＼活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
			ーない ーう(よう)	ーます ーた(だ) ーて(で)	ー。言い切る。	ーとき ーこと ーので	ーば	ー。命令して言い切る。
五段	話す	はな	そ さ	し	す	す	せ	せ
上一段	起きる	お	き	き	きる	きる	きれ	きろ
下一段	食べる	た	べ	べ	べる	べる	べれ	べろ
カ変	来る	○	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ変	する	○	さ せ し	し	する	する	すれ	しろ

※カ変・サ変や、上一段の「着る」、下一段の「寝(ね)る」などの動詞は、語幹と活用語尾を区別できない。

音便

発音しやすいように音が変化することを**音便(おんびん)**という。五段活用の動詞は、連用形で音便が現れることがある。

・**イ音便**
(例) 書く＋た → 書きた → 書いた

・**撥(はつ)音便**
(例) 読む＋た → 読みた → 読んだ

・**促(そく)音便**
(例) 走る＋た → 走りた → 走った

基本形	語幹＼続き方＼活用形	連用形 (ーます ーた(だ) ーて(で))
書く	か	き い
読む	よ	み ん
走る	はし	り っ

動詞の活用の種類の見分け方

五段・上一段・下一段は、助動詞「ない」を付けて見分けるとよい。
(例) 話す　＋ない → 話さ(a)ない　五段活用は「ア段」に変化
起きる＋ない → 起き(i)ない　上一段活用は「イ段」に変化
食べる＋ない → 食べ(e)ない　下一段活用は「エ段」に変化

確認テスト

(1) 動詞「見る」を、①～④の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、ひらがなで答えなさい。

① [　　　] ない　② [　　　] よう

③ [　　　] ます　④ [　　　] ば

(2) 動詞「来る」を、①～③の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、ひらがなで答えなさい。

① [　　　] ない　② [　　　] ます

③ [　　　] ば

(3) 動詞「する（サ行変格活用）」を、①～③の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、ひらがなで答えなさい。

① [　　　] ない　② [　　　] ます

③ [　　　] ば

(4) 次の①～⑤の動詞の活用の種類を、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。

① 開ける [　　]　② 閉じる [　　]

③ 来る [　　]　④ 勉強する [　　]

⑤ 泳ぐ [　　]

ア 五段活用　**イ** 上一段活用　**ウ** 下一段活用

エ カ行変格活用　**オ** サ行変格活用

(5) 次の①～③の動詞の連用形でおこる音便を、それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 遊ぶ [　　]　② 歩く [　　]　③ 言う [　　]

ア イ音便　**イ** 撥音便　**ウ** 促音便

形容詞の活用

形容詞の活用形には未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形があり、命令形はない。

基本形	語幹 ＼ 続き方	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		―う	―た ―ない ―なる	―。 言い切る。	―とき ―こと ―ので	―ば	―。 命令して 言い切る。
明るい	あかる	かろ	かっ く （う）	い	い	けれ	○

動詞と形容詞で、続き方が異なることがあるので注意する。

（例）「〜ない」が続くとき

・動詞
話さ（未然形） ない（助動詞）　（一文節）
「ない」は助動詞で、「話さ」は未然形。

・形容詞
明るく（連用形）／ない（補助形容詞）　（二文節）
「ない」は補助形容詞（用言）で、「明るく」は用言に連なるので連用形。

・**ウ音便**
形容詞は連用形で音便（おんびん）が現れることがある。
（例）明るく　ございます　→　明るう｜ございます
　　　楽しく　ございます　→　楽しゅう｜ございます

形容動詞の活用

形容動詞の活用形には未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形があり、命令形はない。「〜です」の形容動詞には仮定形もない。

形容詞と形容動詞には語幹が共通するものもある。活用語尾（ごび）がどちらの活用表にあるかで見分けるとよい。

（例）暖かい（形容詞）　日。　暖かな（形容動詞）　日。

基本形	語幹 ＼ 続き方	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		―う	―た ―ない ―なる	―。 言い切る。	―とき ―こと ―ので	―ば	―。 命令して 言い切る。
静かだ	しずか	だろ	だっ で に	だ	な	なら	○
静かです	しずか	でしょ	でし	です	（です）	○	○

(1) 形容詞「新しい」を、①～④の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、活用語尾を答えなさい。

① 新し〔　　〕う　② 新し〔　　〕た

③ 新し〔　　〕なる　④ 新し〔　　〕ば

(2) 次の①～⑥の――線部の形容詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① 今日は暑かった。〔　　〕　② とても暑い。〔　　〕

③ 暑い夏になる。〔　　〕　④ 暑ければ休もう。〔　　〕

⑤ 外は暑かろう。〔　　〕　⑥ 今年は暑くなる。〔　　〕

ア 未然形　**イ** 連用形　**ウ** 終止形

エ 連体形　**オ** 仮定形

(3) 形容動詞「爽（さわ）やかだ」を、①～④の続く言葉に合わせてそれぞれ形を変え、活用語尾を答えなさい。

① 爽やか〔　　〕う　② 爽やか〔　　〕た

③ 爽やか〔　　〕なる　④ 爽やか〔　　〕風

(4) 次の①～⑥の――線部の形容動詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① もう元気だろう。〔　　〕　② 元気ならばよいが。〔　　〕

③ 彼（かれ）は元気だ。〔　　〕　④ とても元気だった。〔　　〕

⑤ 元気な人だね。〔　　〕　⑥ みんな元気になる。〔　　〕

ア 未然形　**イ** 連用形　**ウ** 終止形

エ 連体形　**オ** 仮定形

可能動詞

「……できる」という意味を含(ふく)む動詞を**可能動詞**という。可能動詞には次のようなものがある。

・五段活用の動詞が変化してできた、「……することができる」という意味を表す下一段活用の動詞

(例) 話す → 話せる
聞く → 聞ける
書く → 書ける
読む → 読める

・動詞「できる」(上一段活用)

可能動詞はそれだけで一つの単語なので注意する。また、可能動詞には命令形はない。

> **「……できる」の表現**
>
> 上一段・下一段・カ変の動詞には可能動詞がなく、可能の意味を表すときは助動詞「られる」を使う。
>
> (例) 見る→見 られる(助動詞)　出る→出 られる(助動詞)　来る→来 られる(助動詞)
>
> 五段活用の動詞で可能の意味を表すときは可能動詞にすることが多いが、助動詞「れる」を使うこともある。
>
> (例) 行く→ 行ける(可能動詞)　行く→ 行か れる(助動詞)

形容動詞の見分け方

●「……だ」

・形容動詞の終止形

活用があるので、連体形「……な」の形にできる。

(例) ここは 静かだ。 → 「静かな」 ○

副詞「とても」で修飾(しゅうしょく)できる。

(例) ここは 平和だ。 → ここは とても(○) 平和だ。

・名詞+断定の助動詞「だ」

「……な」の形にできない。

(例) 彼(かれ)は 中学生だ。 → 「中学生な」 ×

副詞「とても」で修飾できない。

(例) 私の 願いは 世界の 平和だ。
→ 私の 願いは 世界の とても(×) 平和だ。

●「……な」

・形容動詞の連体形

活用があるので、終止形「……だ」の形にできる。

(例) 静かな 湖。 → 「静かだ」 ○

・連体詞

活用がないので、「……だ」の形にはできない。

(例) 大きな 湖。 → 「大きだ」 ×

確認テスト

(1) 例に従って、次の①〜④の動詞が五段活用の動詞なら可能動詞を答えなさい。また、五段活用以外の動詞なら助動詞「られる」を付けた形を答えなさい。

（例）話す→〔話せる〕　見る→〔見られる〕

① 言う　〔　　〕

② 来る　〔　　〕

③ 走る　〔　　〕

④ 起きる　〔　　〕

(2) 次の中から、——線部が可能動詞であるものを二つ選びなさい。

ア 何も話せない。　**イ** 何も話さない

ウ これで書きます。　**エ** これで書けます。

〔　　・　　〕

(3) 次の中から、——線部が形容動詞であるものを二つ選びなさい。

ア あれは私の学校だ。　**イ** あの人はいつも親切だ。

ウ そう考えるのが自然だ。　**エ** この町の魅力（みりょく）は郊外の自然だ。

〔　　・　　〕

(4) 次の①〜④の——線部が、形容詞なら**ア**、形容動詞なら**イ**、その他なら**ウ**で、それぞれ答えなさい。

① 小さい模様。〔　　〕　② 小さな模様。〔　　〕

③ 細かい模様。〔　　〕　④ 細かな模様。〔　　〕

走れメロス (1)

太宰 治

メロスは激怒した。必ず、かの※邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の※牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。今日①未明、メロスは村を出発し、野を越え山越え、※十里離れたこの※シラクスの町にやって来た。メロスには父も、母もない。女房もない。十六の、内気な妹と二人暮らしだ。この妹は、村のある律儀な一牧人を、近々花婿として迎えることになっていた。結婚式も間近なのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣装やら祝宴のごちそうやらを買いに、はるばる町にやって来たのだ。まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには②竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今はこのシラクスの町で、※石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく会わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。③歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、町の暗いのはあたりまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりではなく、町全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になってきた。道で会った若い衆を捕まえて、何かあったのか、二年前にこの町に来たときは、夜でも皆が歌を歌って、町はにぎやかであったはずだが、と質問した。若い衆は、首を振って答えなかった。しばらく歩いて老爺に会い、今度はもっと語勢を強くして質問した。老爺は答えなかった。メロスは両手で老爺の体を揺すぶって質問を重ねた。老爺は、④辺りをはばかる低声で、僅か答えた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心をもってはおりませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、初めは王様の妹婿様を。それから、ご自身のお世継ぎを。それから、妹様を。それから、妹様のお子様を。それから、皇后様を。それから、賢臣のアレキス様を。」

「驚いた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を信ずることができぬ、というのです。このごろは、臣下の心をもお疑いになり、少しく派手な暮らしをしている者には、人質一人ずつ差し出すことを命じております。ご命令を拒めば、十字架にかけられて殺されます。今日は、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。「あきれた王だ。生かしておけぬ。」

※邪知暴虐…悪知恵を働かせ、残酷な仕打ちで人々を苦しめること。
牧人…ここでは羊飼いのこと。
十里…一里は約三・九キロメートル。
シラクス…地中海のシチリア島（現イタリア領）南東海岸にある港湾都市。古代ギリシア・ローマ時代から続く古い都市。
石工…石材を切り出したり、加工・細工したりする職人。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「未明」の意味を選びなさい。

ア 夜がまだ明けきらない頃。
イ 夜が明けてから昼までの間。
ウ 夕方から日が沈むまでの間。
エ 日が沈んで深夜になる頃。

〔　　〕

(2) ――線②「竹馬の友」の意味を選びなさい。

ア 馬が合う人　**イ** 競い合う親友　**ウ** 幼なじみ

〔　　〕

(3) ――線③「歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 既に日が落ちて夜になり、町が暗かったから。
イ 二年前と違い、町全体がやけに寂しいから。
ウ 質問しても、町の人々が何も答えないから。
エ 町に二年ぶりに来たので、不安になったから。

〔　　〕

(4) ――線④「辺りをはばかる低声」とはどのような声か。適当なものを選びなさい。

ア 周囲に響き渡るような低音の声。
イ 周囲に聞こえないように気づかった声。
ウ 周囲に遠慮せず、語気を強めた声。

〔　　〕

(5) メロスの説明として適当なものを選びなさい。

ア シラクスの町で生まれ育った牧人である。
イ 政治はわからないが、邪悪に対しては敏感である。
ウ 妹の結婚式が行われるシラクスの町にやって来た。

〔　　〕

走れメロス(2)

太宰 治

メロスは単純な男であった。買い物を背負ったままで、のそのそ王城に入っていった。たちまち彼は、※巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの※懐中からは短剣が出てきたので、騒ぎが大きくなってしまった。メロスは王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであったか。言え！」暴君ディオニスは静かに、けれども威厳をもって問い詰めた。その王の顔は蒼白で、眉間のしわは刻み込まれたように深かった。

「町を暴君の手から救うのだ。」とメロスは、悪びれずに答えた。

「おまえがか？」王は、※憫笑した。「しかたのないやつじゃ。おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」

「言うな！」とメロスは、①いきり立って反駁した。「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑っておられる。」

「疑うのが正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私欲の塊さ。信じては、ならぬ。」暴君は落ち着いてつぶやき、ほっとため息をついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「何のための平和だ。自分の地位を守るためか。」今度はメロスが②嘲笑した。「罪のない人を殺して、何が平和だ。」

「黙れ。」王は、さっと顔を上げて報いた。「口では、どんな清らかなことでも言える。わしには、人のはらわたの奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、今にはりつけになってから、泣いてわびたって聞かぬぞ。」

③「ああ、王は利口だ。うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟でいるのに。命乞いなど決してしない。ただ、――」と言いかけて、メロスは足元に視線を落とし、瞬時ためらい、「ただ、私に情けをかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えてください。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰ってきます。」

「ばかな。」と暴君は、しゃがれた声で低く笑った。「とんでもないうそを言うわい。④逃がした小鳥が帰ってくると言うのか。」

「そうです。帰ってくるのです。」メロスは必死で言い張った。

※巡邏の警吏…巡邏は警備のために見回ること。警吏は警官。
懐中…ふところの中。　憫笑…哀れんで笑うこと。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「いきり立って反駁した」が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア 唐突(とうとつ)に、別の話を切りだして反抗(はんこう)した。
イ 落ち着かない様子で、不安げに反対した。
ウ 激しく怒(いか)って興奮し、いきまいて反論した。

〔　　〕

(2) ――線②「嘲笑」の意味を選びなさい。

ア あざけり笑う。　**イ** 思わず笑う。　**ウ** 苦々しく笑う。

〔　　〕

(3) ――線③「ああ、王は利口だ」とあるが、このときのメロスの様子として適当なものを選びなさい。

ア 人の心を見抜(ぬ)くことができるという王に感心しつつ、言い返すべき内容を考えている。
イ 自分の考えを言い当てられ、驚(おどろ)きながらも三日間の日限を認めさせようとしている。
ウ 自分の覚悟も知らないのに、心を見透かしたかのように話す王を皮肉っている。

〔　　〕

(4) ――線④「逃がした小鳥が帰ってくると言うのか」とはどういうことを言おうとしているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア 逃がした小鳥が帰ってこないように、メロスも帰ってくるはずがないということ。
イ 逃がした小鳥がいつかは帰ってくるように、メロスも帰ってくるだろうということ。
ウ 逃がした小鳥が帰ってくるとは限らないように、メロスも帰ってくるかわからないではないかということ。

〔　　〕

(5) 人の心を疑うことに対して、メロスと王はそれぞれどのように考えているか。解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を本文中から書きぬきなさい。

メロスは、人の心を疑うことは□□□□□□□□だと考えており、
一方、王は、人の心を疑うのは□□□□□□だと考えている。

走れメロス (3)

太宰 治

「私は約束を守ります。私を三日間だけ許してください。妹が私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この町にセリヌンティウスという石工がいます。私の①無二の友人だ。あれを人質としてここに置いていこう。私が逃げてしまって、三日目の日暮れまで、ここに帰ってこなかったら、あの友人を絞め殺してください。頼む、そうしてください。」

それを聞いて王は、残虐な気持ちで、そっと②ほくそ笑んだ。生意気なことを言うわい。どうせ帰ってこないに決まっている。このうそつきにだまされたふりして、放してやるのもおもしろい。そうして身代わりの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代わりの男を※磔刑に処してやるのだ。③世の中の、正直者とかいう※やつばらにうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを聞いた。その身代わりを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰ってこい。遅れたら、その身代わりを、きっと殺すぞ。ちょっと遅れて来るがいい。おまえの罪は、永遠に許してやろうぞ。」

「なに、何をおっしゃる。」

「はは。命が大事だったら、遅れて来い。④おまえの心は、わかっているぞ。」

メロスは悔しく、じだんだ踏んだ。ものも言いたくなくなった。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの面前で、よき友とよき友は、二年ぶりで相会うた。メロスは、友に一切の事情を語った。セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱き締めた。友と友の間は、それでよかった。セリヌンティウスは縄打たれた。メロスはすぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の道を急ぎに急いで、村へ到着したのは、明くる日の午前、日は既に高く昇って、村人たちは野に出て仕事を始めていた。メロスの十六の妹も、今日は兄の代わりに羊群の番をしていた。よろめいて歩いてくる兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。

※磔刑…はりつけの刑。　やつばら…やつら。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「無二の友人」の意味を選びなさい。

ア　かつての親友。
イ　かけがえのない親友。
ウ　古くからの親友。

〔　　〕

(2) ――線②「ほくそ笑んだ」とあるが、「ほくそ笑む」の意味を選びなさい。

ア　小ばかにしたような態度で笑う。
イ　笑顔を浮かべ、穏やかににっこりと笑う。
ウ　物事が思い通りになったと一人ひそかに笑う。

〔　　〕

(3) ――線③「世の中の、……見せつけてやりたいものさ」とあるが、王は何を見せつけたいと考えているのか。適当なものを選びなさい。

ア　約束は守らなければならないものだということ。
イ　自分はだまされたふりをしていたのだということ。
ウ　人はやはり信じられないものなのだということ。

〔　　〕

(4) ――線④「おまえの心は、わかっているぞ」とあるが、王はメロスがどのように考えていると思っているのか。適当なものを選びなさい。

ア　三日目の日暮れまでに王城に帰ってこようと考えている。
イ　友人を身代わりにして、自分は助かろうと考えている。
ウ　王が願いを聞き入れることなどないだろうと考えている。

〔　　〕

(5) セリヌンティウスのメロスに対する信頼が、セリヌンティウスの行動を通して描かれている一文を探し、最初と最後の五字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□□□～□□□□□

(6) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　メロスの話を聞く条件として、王はメロスに友人を人質とするよう提案した。
イ　王は、三日間だけ待ってほしいというメロスの願いを聞き入れた。
ウ　メロスは、王に本心を見透かされたことが悔しく、じだんだを踏んだ。

〔　　〕

走れメロス (4)

太宰 治

（妹の結婚式を終え、メロスはシラクスの町に向かって走り出しました。しかし川の氾濫や山賊に遭い、疲れ切って動けなくなってしまいます。）

私は精いっぱいに努めてきたのだ。動けなくなるまで走ってきたのだ。私は不信の徒ではない。ああ、できることなら私の胸を断ち割って、真紅の心臓をお目にかけたい。愛と※信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事なときに、①精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きっと笑われる。私の一家も笑われる。私は友を欺いた。中途で倒れるのは、初めから何もしないのと同じことだ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定まった運命なのかもしれない。セリヌンティウスよ、許してくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を欺かなかった。私たちは、本当によい友と友であったのだ。一度だって、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことはなかった。今だって、②君は私を無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。③友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走ったのだ。君を欺くつもりは、みじんもなかった。信じてくれ！私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りてきたのだ。私だからできたのだよ。④ああ、このうえ、私に望みたもうな。放っておいてくれ。どうでもいいのだ。私は負けたのだ。だらしがない。笑ってくれ。王は私に、ちょっと遅れて来い、と耳打ちした。遅れたら、身代わりを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみると、私は王の言うままになっている。私は遅れていくだろう。⑤王は、独り合点して私を笑い、そうしてこともなく私を放免するだろう。そうなったら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切り者だ。地上で最も不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。いや、それも私の、独りよがりか？ ああ、もういっそ、悪徳者として生き延びてやろうか。村には私の家がある。羊もいる。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すようなことはしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の※定法ではなかったか。ああ、何もかもばかばかしい。私は醜い裏切り者だ。どうとも勝手にするがよい。※やんぬるかな。——※四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

※信実…正直で偽りのないこと、誠実な心。　定法…きまった法則。
やんぬるかな…やみぬるかな。今となってはどうしようもない、もうおしまいだ。
四肢…両腕と両脚。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「精も根も尽きた」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 疲れ果て、精力も気力も失った。
イ 全力を尽くし、精いっぱい努力した。
ウ いろいろ試(ため)したがやりようがなかった。

〔　　〕

(2) ――線②「君は私を無心に待っているだろう」とあるが、メロスはセリヌンティウスがどのように待っていると考えているのか。適当なものを選びなさい。

ア メロスが苦労していることも知らず、のんきに待っている。
イ メロスが本当に帰ってくるか心配で、不安げに待っている。
ウ メロスが帰ってきてほしいと、祈(いの)りながら待っている。
エ メロスが帰ってくることを信じ、ただただ待っている。

〔　　〕

(3) ――線③「友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな」とあるが、この考えを否定している一文を探し、最初の三字を答えなさい。

(4) ――線④「ああ、このうえ、私に望みたもうな」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア これほど努力したのだから、これ以上は望まないでほしいということ。
イ もう間に合わないかもしれない状況(じょうきょう)なので、何か希望がほしいということ。
ウ 自分だからこそ困難を乗り越(こ)えられたので、王に望みを聞いてほしいということ。

〔　　〕

(5) ――線⑤「王は、独り合点して私を笑い」とあるが、メロスは、王がどのように考えてメロスを笑うと考えているのか。適当なものを選びなさい。

ア 困難に疲れ切って、メロスは遅れてきた。
イ 自分が助かりたくて、メロスは遅れてきた。
ウ 精いっぱい努めたけれども、メロスは遅れてきた。

〔　　〕

走れメロス（5）

太宰 治

（まどろんだメロスの耳に水の流れる音が聞こえました。見ると、岩の裂け目から清水が湧き出ています。）

その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手ですくって、一口飲んだ。ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。①肉体の疲労回復とともに、僅かながら希望が生まれた。義務遂行の希望である。我が身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を木々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は信じられている。私の命なぞは問題ではない。死んでおわびなどと、気のいいことは言っておられぬ。私は信頼に報いなければならぬ。今はただ②その一事だ。走れ！　メロス。

（中略　メロスは再びシラクスの町に向けて走り出しました。メロスは口から血を噴き出しながらも走ります。）

「ああ、メロス様。」うめくような声が、風とともに聞こえた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。あなたのお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、だめでございます。むだでございます。走るのはやめてください。もう、あの方をお助けになることはできません。」

「いや、まだ日は沈まぬ。」

「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。お恨み申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」

「いや、まだ日は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。走るより他はない。

「やめてください。走るのはやめてください。今はご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じておりました。③刑場に引き出されても、平気でいました。王様がさんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念をもち続けている様子でございました。」

「④それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついてこい！　フィロストラトス。」

メロスの変化

メロスは疲労の回復とともに「正義」「信実」「愛」に立ち返り、次第に、義務の遂行よりも大切なことのために走ることとなる。

・泉の水を飲む場面
　義務遂行の希望。名誉を守る希望。信頼に報いなければならぬ。

・フィロストラトスとの対話
　信じられているから走る。間に合う、間に合わぬは問題でない。なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走る。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「肉体の疲労回復とともに、僅かながら希望が生まれた」とあるが、このときのメロスの心情を、情景を通して描写している一文を探し、最初の三字を答えなさい。

□□□

(2) ——線②「その一事」とは何を指しているか。本文中から一文で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□ ～ □□□

(3) ——線③「刑場に引き出されても、平気でいました」とあるが、なぜセリヌンティウスは平気でいたのか。最も適当なものを選びなさい。

ア　メロスのことをただただ信じていたから。
イ　メロスが間に合うことを必死で願っていたから。
ウ　メロスを疑う王に反発し、強気な態度をとっていたから。

〔　　〕

(4) ——線④「それだから、走るのだ」とあるが、この場面でメロスはなぜ走っているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア　まだ日が沈まず、間に合うかもしれないから。
イ　セリヌンティウスに対する負い目があるから。
ウ　自分が誰かに信じられているから。

〔　　〕

走れメロス (6)

太宰 治

（日が地平線に沈もうかとするとき、メロスは刑場に突入しました。）

「私だ、※刑吏！　殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精いっぱいに叫びながら、ついにはりつけ台に上り、つり上げられてゆく友の両足にかじりついた。群衆はどよめいた。あっぱれ。許せ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは目に涙を浮かべて言った。「私を殴れ。力いっぱいに頰を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君がもし私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえないのだ。殴れ。」

　セリヌンティウスは、全てを察した様子でうなずき、刑場いっぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頰を殴った。殴ってから優しくほほ笑み、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頰を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生まれて初めて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」

　メロスは腕にうなりをつけてセリヌンティウスの頰を殴った。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからうれし泣きにおいおい声を放って泣いた。

　群衆の中からも、※歔欷の声が聞こえた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人のさまをまじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

　どっと群衆の間に、歓声が起こった。

「万歳、王様万歳。」

　一人の少女が、※緋のマントをメロスにささげた。メロスは、まごついた。よき友は、気をきかせて教えてやった。

「メロス、君は、真っ裸じゃないか。早くそのマントを着るがいい。このかわいい娘さんは、メロスの裸体を皆に見られるのが、たまらなく悔しいのだ。」

　勇者は、ひどく赤面した。

※刑吏…刑を執行する役人。　歔欷…すすり泣き。　緋…濃く明るい赤。

王の変化

王・ディオニスはメロスとセリヌンティウスとの間の信実を見て、人を信じる心を取り戻す。

・王城「顔は蒼白」「人の心は、あてにならない。」
　「信じては、ならぬ。」

・結末「顔を赤らめて」
　「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。」

作品を通じて「赤」が象徴的に用いられていることにも注目する。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線部「メロス、私を殴れ」とあるが、セリヌンティウスはなぜこのように言っているのか。適当なものを選びなさい。

ア　殴られることで、メロスを許したことを示したかったから。
イ　生まれて初めて、メロスのことを疑ってしまったから。
ウ　メロスが信頼(しんらい)のできる人物だと気づかされたから。

〔　　〕

(2)　本文ではメロスとセリヌンティウスの姿を見た王が、人の心に対する考えを改めている。王が悟(さと)った内容が読み取れる一文を、王の会話文の中から探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含(ふく)む。

□□□～□□□

(3)　本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　メロスに頬を殴れと言われたセリヌンティウスは、事情がわからないながらも友の言う通り頬を殴った。
イ　群衆の背後からメロスとセリヌンティウスを見ていた王は、二人に負けた怒(いか)りで顔が赤くなった。
ウ　メロスとセリヌンティウスに対する王の言葉に、群衆の間からどっと歓声があがった。

〔　　〕

走れメロス（7）

太宰 治

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

日	場所	内容
冒頭の場面の日	シラクスの町	メロスは妹の結婚式の品を買いに村からやって来たが、町全体がやけに寂しいことに気づく。老爺から話を聞いたメロスは激怒する。
冒頭の場面の日	王城	**メロスと王の対話** メロス…人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳。 王………人の心は、あてにならない。 **メロスと王の約束** メロスは妹に結婚式を挙げさせて三日目の日暮れまでに帰ってくると約束し、セリヌンティウスを人質にする。
一日目・二日目	故郷の村	メロスは一睡もせず村に戻り、式の準備をする。花婿に式を明日にするよう頼む。 二日目の真昼に結婚式が行われる。外は豪雨になる。妹と花婿に言葉を残し、メロスは眠る。
三日目	刑場に向かう途中	三日目の薄明の頃、メロスは出発する。故郷への未練で立ち止まりそうになる。川の氾濫や山賊に出くわし、疲れ切って動けなくなる。ふてくされた根性が心の隅に巣くう。 （悪い夢）ああ、もう、どうでもいい。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。

日	場所	内容
三日目	刑場に向かう途中	水を一口飲んだメロスは、再び走り出す。 **フィロストラトスとの会話** 信じられているから走る。間に合う、間に合わぬは問題ではない。なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走る。
三日目	刑場	**セリヌンティウスとの再会** 夕日の残光が消える直前、メロスは刑場に突入する。メロスとセリヌンティウスは互いの頬を殴り、抱擁し合う。 **王の改心** 王は顔を赤らめて、信実とは、決して空虚な妄想ではなかったと改心する。

人物像と場面ごとの変化

物語や小説を読むときは、登場人物の行動や会話に注目して人物像を捉える。登場人物の心情や考え方は何かのきっかけで変化することがある。時や場所に着目して場面を分け、場面ごとの人物の変化を整理しながら読み進めるとよい。

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の各文を、本文の流れに沿って並べかえなさい。

ア フィロストラトスからもう走るのはやめるよう言われたメロスは、自分は信じられているから走るのだと答えた。

イ 水を一口飲んで疲労回復したメロスは、義務を遂行し名誉を守るため、そして信頼に報いるために再び走り出した。

ウ 訳のわからぬ大きな力に引きずられて走ったメロスは、夕日がまさに沈もうとするとき、刑場に突入した。

エ 濁流を泳ぎ切り、山賊を打ち倒したメロスは、疲れ切って動けなくなり、正義や信実、愛をくだらないものと考えた。

〔　　→　　→　　→　　〕

(2) 次の各文を、本文の流れに沿って並べかえなさい。

ア メロスの願いを聞き入れた王は、メロスにちょっと遅れて来いと耳打ちし、遅れたら罪を許してやろうと言った。

イ メロスから人の心を疑うことは最も恥ずべき悪徳だと非難された王は、人の心はあてにならないと答えた。

ウ メロスとセリヌンティウスの様子を見つめていた王は、顔を赤らめ、二人が自分の心に勝ったのだと告げた。

〔　　→　　→　　〕

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア メロスは王の話を聞いて激怒し、シラクスの町にやって来た。

イ メロスは王城で、王に三日間の日限を与えてほしいと頼んだ。

ウ メロスは故郷の村で、川の氾濫や山賊に出くわした。

エ メロスは刑場で、フィロストラトスに話しかけられた。

〔　　〕

文法への扉3　一字違いで大違い（付属語）(1)

助詞

付属語のうち、活用がないものを**助詞**という。助詞は自立語の後に付いて、語句と語句の関係を示したり、意味を付け加えたりする。

①**格助詞**…主に体言に付いて、語句と語句との関係を示す。
「が・を・に・と・へ・で・から・より・の・や」の10種類。
（例）主語を作る………鳥が飛ぶ。（主体）
　連用修飾語を作る…本を読む。（対象）・先生に話す。（相手）
　　学校から帰る。（起点）
　連体修飾語を作る…私の本。（所有）
　並立の関係を作る…山や川。（列挙）

②**副助詞**…さまざまな語句に付いて、意味を添える。
「は・も・こそ・まで・でも・さえ・すら・だけ・のみ・しか・くらい（ぐらい）・ばかり・ほど・など・とか・なり・やら・か・ずつ」など。
（例）ネコは哺乳類です。（題目）　私も行きます。（同類）

③**接続助詞**…主に用言や助動詞に付いて、前後をつなぐ。
「て（で）・と・ば・から・ので・が・けれど・のに・ても（でも）・ながら・つつ・なり・し・たり」など。
（例）転んで、けがをした。（原因）　走っている。（補助の関係）

④**終助詞**…文や文節の終わりに付いて、話し手や書き手の気持ち、態度を表す。
「か・の・な・よ・ぞ・ぜ・さ・な（なあ）・ね（ねえ）」など。
（例）これは何ですか。（疑問）　走るな。（禁止）

※格助詞「が」と副助詞「は」の違い
・「が」の伝えたい内容は前。「は」の伝えたい内容は後。
彼が山田さんです。　彼は山田さんです。
・「は」は文全体の題目「……について言えば」を表す。
妹が帰ると遊びに行った。（遊びに行ったのはだれかわからない。）
妹は帰ると遊びに行った。（帰ったのも遊びに行ったのも妹。）
・「は」は、他のものと対比的に述べることがある。
リンゴが食べたい。
リンゴは食べたい。（リンゴ以外は食べたくない。）

助詞の用法

助詞にはさまざまな用法があり、同じ語でも種類が異なることがある。
（例）「から」
・格助詞　友達から聞く。
・接続助詞　暑いから休む。（原因・理由）＝暑い。だから休む。
また、同じ語、同じ種類の助詞でも、意味が異なることも多い。
（例）「の」
・連体修飾語を表す　私の本。
・主語を表す。　雪の降る日。＝雪が降る日。
　※「が」に言い換えられる。
・体言の代用。　これは私のだ。＝これは私のものだ。
　※「～のもの・こと」に言い換えられる。

確認テスト

(1) 次の——線部が、格助詞なら**ア**、副助詞なら**イ**で答えなさい。

① 花は咲(さ)く。　② 花が咲く。
③ 水を飲む。　④ 水だけ飲む。
⑤ 駅へ行く。　⑥ 駅へも行く。

(2) 次の——線部の接続助詞の働きをそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 走れば間に合うよ。
② 走ったので間に合った。
③ 走りつつ景色を眺(なが)めた。
④ 走ったのに間に合わなかった。

ア 原因・理由　**イ** 仮定の条件　**ウ** 逆接　**エ** 同時

(3) 次の——線部の終助詞の働きをそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① いつ終わるの。　② 一緒(いっしょ)に帰ろうよ。
③ もうわかったね。　④ 何も言うな。

ア 疑問（質問）　**イ** 禁止　**ウ** 勧誘(かんゆう)　**エ** 念押(ねんお)し

(4) 次の——線部が、格助詞なら**ア**、接続助詞なら**イ**で答えなさい。

① あれが、私の家です。
② 押したが、開かない。
③ 冬になると、北風が吹(ふ)く。
④ 雨と風が激しい。

(5) 次の——線部の助詞の働きをそれぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 友達と話した。　② 「いいえ。」と答える。
③ スズメとカラス。

ア 列挙　**イ** 相手　**ウ** 引用

(6) 次の——線部の助詞の働きをそれぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 本を読むのは楽しい。
② 木の苗(なえ)を植える。
③ いちょうの散る並木道。

ア 連体修飾語を表す。　**イ** 主語を表す。
ウ 「～もの・こと」という意味を表す。

助動詞

付属語のうち、活用があるものを**助動詞**という。助動詞は用言、体言や他の助動詞などに付いて、さまざまな意味を付け加える。

●れる・られる

・**受け身**…他からの動作を受ける。（名前を呼ばれる。）
「〜に…される」という意味を表す。

・**可能**……そうすることができる。（早く起きられる。）
「〜することができる」と言い換え（か）られる。

・**尊敬**……動作主への敬意を表す。（先生が話される。）
接続する動詞が、尊敬の対象となる人物の動作である。

・**自発**……自然とその状態になる。（故郷のことが思い出される。）
「自然と」を補える。前に心情を表す語があることが多い。

直前の動詞が五段・サ変の未然形なら「れる」。　書か れる。
上一段・下一段・カ変の未然形なら「られる」。　見 られる。

●せる・させる

・**使役（しえき）**…他に何かをさせる。　（本を読ませる。）

直前の動詞が五段・サ変の未然形なら「せる」。　書か せる。
上一段・下一段・カ変の未然形なら「させる」。　見 させる。

※「見せる」「着せる」などは一語の動詞で、助動詞「せる」ではないので注意。

●ない・ぬ（ん）

・**打ち消し（否定）**…動作や物事を打ち消す。
（走らない。）（わかりません。）

※「ない」の識別

・**打ち消しの助動詞**…「ぬ（ん）」に言い換えられる。
（例）見 ない（助動詞） → 見ぬ（見ん）○
「いない」「しない」の「ない」も助動詞である。
直前の単語が動詞であることでも見分けられる。

・**形容詞**…「ぬ（ん）」に言い換えられない。
（例）水が ない（形容詞） → 水がぬ×
暑く ない（補助形容詞） → 暑くぬ×
「〜て（で）ない」や「形容詞（形容動詞）＋ない」の形なら補助形容詞。

・**形容詞の一部**
（例）危ない → 「危ない」で一つの形容詞。
ほかに「少ない・きたない」など。

確認テスト

(1) 次の――線部の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① あの方も出席される。

② 春の陽気が感じられる。

③ 弟が母にしかられる。

④ 私は何でも食べられる。

ア 受け身　**イ** 可能　**ウ** 尊敬　**エ** 自発

(2) 次の――線部に、助動詞「れる・られる」を付けた形をそれぞれ答えなさい。

① 今日は来る。

② 本を渡す。

(3) 次の――線部に、助動詞「せる・させる」を付けた形をそれぞれ答えなさい。

① お使いに行く。

② 礼服を着る。

(4) 次の中から、――線部が助動詞であるものを三つ選びなさい。

ア 書くものがない。

イ 何も知らない。

ウ そんなことはできない。

エ 部屋がきたない。

オ 外はまだ明るくない。

カ どこにもいない。

文法への扉3

一字違いで大違い（付属語）⑶

助動詞

●う・よう

・**意志**…何かをしようとする。（私から話そう。）
「（私が）〜しよう」と言い換えられる。

・**推量**（すいりょう）…想像・予想し、推し量る。（外は暑かろう。）
「〜だろう」と言い換えられる。

・**勧誘**（かんゆう）…何かをしようと誘う。（一緒に帰ろう。）
「（一緒に）〜しよう」と言い換えられる。

直前の動詞が五段活用の未然形なら「う」。　書こう。
それ以外の活用の動詞の未然形なら「よう」。　見よう。

●まい

・**打ち消しの意志**…何かをしないようにする。（もう話すまい。）
「〜ないようにしよう」と言い換えられる。

・**打ち消しの推量**…そうならないだろうと推し量る。
「〜ないだろう」と言い換えられる。　（ドアは開くまい。）

●たい・たがる

・**希望**…話し手や書き手が何かを望む。　（遊びたい。）
話し手や書き手以外が何かを望む。（遊びたがる。）

●ます

・**丁寧**（ていねい）…相手に対する丁寧な気持ちを表す。（始めます。）

●た（だ）

・**過去**…現在より以前である。（昨日、友達と話した。）

・**完了**（かんりょう）…物事が終了した。（今、着いたよ。）
「もう〜（してしまった）」「ちょうど〜（したところだ）」を補える。

・**存続**…ある状態が続いている。（眼鏡をかけた人。）
「〜ている」と言い換えられる。

・**想起（確認）**…思い出す、確かめる。（これだったよね。）

確認テスト

(1) 次の——線部の意味を、それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① またここに来ることもできよう。〔　〕

② 休みなら公園に行こうよ。〔　〕

③ そろそろ始めようかな。〔　〕

ア 意志　**イ** 推量　**ウ** 勧誘

(2) 次の——線部の意味は**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ選びなさい。

① もう弱音をはくまい。〔　〕

② 今日は雪にはなるまい。〔　〕

ア 打ち消しの意志　**イ** 打ち消しの推量

(3) 次の——線部の意味は**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ選びなさい。

① 本を読みました。〔　〕

② 本を読みたかった。〔　〕

ア 希望　**イ** 丁寧

(4) 次の——線部の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 昔、駅前に公園があった。〔　〕

② 壁(かべ)にかけられた絵を眺(なが)める。〔　〕

③ そういえばそうでしたね。〔　〕

④ もう準備ができましたよ。〔　〕

ア 過去　**イ** 完了　**ウ** 存続　**エ** 想起（確認）

一字違いで大違い（付属語）(4)

助動詞

●らしい

・推定(すいてい)…根拠(こんきょ)をもとに推し(お)量る。（外は雪らしい。）

※「らしい」の識別

・推定の助動詞…「どうやら〜」を補える。

（例）彼(かれ)は 先生 の 子ども らしい。

・形容詞の一部（接尾語(せつびご)）…「いかにも〜」を補える。

（例）彼 は 子どもらしい 性格 だ。

※「子どもらしい」という形容詞の一部。

●そうだ・そうです

・様態・推定…様子や状態から推し量る。（雪が降りそうだ。）

※動詞の連用形や形容詞・形容動詞の語幹に接続する。

・伝聞………人から伝え聞く。（雪が降るそうだ。）

※用言の終止形に接続する。

●ようだ・ようです

・推定…根拠をもとに推し量る。（雪が降るようだ。）

・たとえ（比喩(ひゆ)）…物事をたとえる。（まるで山のようだ。）

・例示…具体的な例を示す。（日本のような島国。）

●だ・です

・断定…確かなこととして言い切る。（彼は中学生だ。）

※「〜だ」の識別

・名詞（助詞「の」）＋断定の助動詞「だ」

「……な」の形にできない。

（例）彼は 中学生だ。 →「中学生な」×

副詞「とても」で修飾(しゅうしょく)できない。

（例）私の願いは 平和だ。

→ 私の願いは ×とても 平和だ。

・形容動詞の終止形

連体形「……な」の形にできる。

（例）ここは 静かだ。 →「静かな」○

副詞「とても」で修飾できる。

（例）ここは 平和だ。 → ここは ○とても 平和だ。

・動詞＋過去（完了(かんりょう)・存続）の助動詞「だ」

（例）本を読んだ。

確認テスト

(1) 次の――線部はアとイのどちらか。それぞれ選びなさい。

① 彼らしい発言だ。　〔　　〕

② 彼が来たらしい。　〔　　〕

ア 推定の助動詞　イ 形容詞の一部

(2) 次の――線部の意味はアとイのどちらか。それぞれ選びなさい。

① 式が始まりそうだ。　〔　　〕

② 式が始まるそうだ。　〔　　〕

ア 様態・推定　イ 伝聞

(3) 次の――線部の意味を、それぞれア～ウから選びなさい。

① 梅雨(つゆ)の時期には、滝(たき)のような雨が降る。　〔　　〕

② レモンのようにすっぱいものが苦手だ。　〔　　〕

③ 今日はずいぶん疲(つか)れているようだ。　〔　　〕

ア 推定　イ たとえ(比喩)　ウ 例示

(4) 次の――線部は何か。それぞれア～ウから選びなさい。

① ここは安全だ。　〔　　〕

② 明日は休みだ。　〔　　〕

③ 海で泳いだ。　〔　　〕

ア 断定の助動詞　イ 過去の助動詞　ウ 形容動詞の一部

助動詞活用表

意味	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	主な接続
受け身 可能 尊敬 自発	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れろ れよ	未然形（五段・サ変動詞）
受け身 可能 尊敬 自発	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られろ られよ	未然形（上一段・下一段・カ変動詞、一部の助動詞）
使役（しえき）	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せろ せよ	未然形（五段・サ変動詞）
使役（しえき）	させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させろ させよ	未然形（上一段・下一段・カ変動詞）
打ち消し （否定）	ない	なかろ	なかっ なく	ない	ない	なけれ	○	未然形（動詞、一部の助動詞）
打ち消し （否定）	ぬ （ん）	○	ず	ぬ （ん）	ぬ （ん）	ね	○	未然形（動詞、一部の助動詞）
意志 推量 勧誘（かんゆう）	う	○	○	う	（う）	○	○	未然形（五段動詞、形容詞、形容動詞、一部の助動詞）
意志 推量 勧誘（かんゆう）	よう	○	○	よう	（よう）	○	○	未然形（五段以外の動詞、一部の助動詞）
打ち消しの意志 打ち消しの推量	まい	○	○	まい	（まい）	○	○	終止形（動詞） ※五段以外の動詞の場合は未然形に付くこともある。
希望	たい	たかろ	たかっ たく とう	たい	たい	たけれ	○	連用形（動詞、一部の助動詞）
希望	たがる	たがら たがろ	たがり たがっ	たがる	たがる	たがれ	（たがれ）	連用形（動詞、一部の助動詞）

意味	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	主な接続
丁寧（ていねい）	ます	ませ ましょ	まし	ます	ます	ますれ	（ませ） （まし）	連用形（動詞、一部の助動詞）
過去 完了（かんりょう） 存続 想起（確認（かくにん））	た （だ）	たろ （だろ）	○	た （だ）	た （だ）	たら （だら）	○	連用形（動詞、形容詞、形容動詞、一部の助動詞）
推定	らしい	○	らしかっ らしく らしゅう	らしい	らしい	（らしけれ）	○	終止形（動詞、形容詞）、形容動詞の語幹、体言　など
様態 推定	そうだ	そうだろ	そうだっ そうで そうに	そうだ	そうな	そうなら	○	連用形（動詞、一部の助動詞）、形容詞・形容動詞の語幹
	そうです	そうでしょ	そうでし	そうです	（そうです）	○	○	
伝聞	そうだ	○	そうで	そうだ	○	○	○	終止形（動詞、形容詞、形容動詞、一部の助動詞）
	そうです	○	そうでし	そうです	（そうです）	○	○	
推定 たとえ（比喩（ひゆ）） 例示	ようだ	ようだろ	ようだっ ようで ように	ようだ	ような	ようなら	○	連体形（動詞、形容詞、形容動詞、一部の助動詞）、体言＋助詞「の」、「この」などの連体詞
	ようです	ようでしょ	ようでし	ようです	（ようです）	○	○	
断定	だ	だろ	だっ で	だ	（な）	なら	○	体言、助詞「の」　など ※「だろ（でしょ）」＋「う」、「なら」＋「ば」などの場合は動詞・形容詞の終止形にも付く。
	です	でしょ	でし	です	（です）	○	○	

言葉3 話し言葉と書き言葉

話し言葉

音声によって伝えられる言葉を**話し言葉**という。話し言葉は目の前の相手に対して使われることが多く、その場の状況を共有していることを前提にした伝え方ができる。

・その場にあるものや様子を指示する語句が使える。

「それ、持って帰ってね。」

・状況に応じて言葉を省略できる。

（バスを待っていて）「あ、（バスが）来たよ。」

また、話し方によって内容を強調したり、念押しや確認をしたりすることができる。

・大事な部分を話し方によって強調できる。

言葉を繰り返す。

（集合時間を念押しして）「九時よ。九時。」

大事な部分を大きな声で発音する。重要な部分をゆっくり話す。

「ここに九時に来てください。」

・念押しや確認の言葉を使って相手の反応や理解を確かめられる。

「……ですね。」

このほか、くだけた表現や、方言が用いられることがあるのも話し言葉の特徴である。話し言葉では、同音異義語などの区別がつきづらいので、読み方を変えることもある。

（例）「シリツ（市立・私立）」→「イチリツ」・「ワタクシリツ」

書き言葉

文字によって伝えられる言葉を**書き言葉**という。その場限りで消えてしまう話し言葉と違い、書き言葉は記録として情報を残すことができる。

・内容を書き直したり、読み返したりすることができる。

書き言葉は、誰が、どのような状況で読むかわからないので、正確に情報が伝わるように書く必要がある。

・情報は具体的に書く。

×次の日曜日 → 6月27日㈰

・表記や文末を整える。

漢字・ひらがな・カタカナを使い分ける。

常体（だ・である）、敬体（です・ます）のどちらかに統一する。

語句の中には、話し言葉ではよく使われても、書き言葉ではあまり用いられないものもあるので注意する。

（例）なので（話し言葉）→ そのため・このため

でも（話し言葉）→ だが・しかし

確認テスト

(1) 次の中から、話し言葉の特徴として適当でないものを選びなさい。
ア その場にあるものを指し示す語句を使うことができる。
イ 内容を、必要に応じて何度も読み返すことができる。
ウ 言葉を発する状況によっては、内容を省略できる。
エ 音声を調整して、重要な情報を強調することができる。
〔　　〕

(2) 次の中から、書き言葉の特徴として適当でないものを選びなさい。
ア 同じ発音の言葉も、漢字で書くことで区別することができる。
イ その場にいない人にも、文字で情報を伝えることができる。
ウ 誰が読んでも誤解が生じないように、共通語を使うことが多い。
エ その場で相手が内容を理解しているか確認することができる。
〔　　〕

(3) 次の話し言葉の内容について、気を付けて話すべきこととして適当でないものを選びなさい。
（調理実習の前日、持ち物を連絡(れんらく)していて）
「それではみなさん、明日は調理実習なのでエプロンと三角巾(きん)を忘れずに持ってきてください。」
ア 持ち物であるエプロンと三角巾は、大きな声やゆっくりした声で話すなど、強調する。
イ 相手がいつ内容を確認するかわからないので、明日と言わずに具体的な日付を伝えなければならない。
ウ 聞き手が内容を理解できているか確認するために、問いかけたり、念を押す言葉を使ったりするとよい。
〔　　〕

送り仮名の付け方

送り仮名の付け方には、次のような原則がある。

●活用のある語…活用語尾を送るのが原則。
●活用のない語…名詞は送り仮名を付けないのが原則。
　副詞・連体詞・接続詞は最後の音節を送るのが原則。

※動詞「学ぶ」の語幹と活用語尾

活用形	語幹	活用語尾	主な続き方
未然形	学	ば ぼ	ーない ーう ーよう
連用形	学	び ん	ーます ーた ーて
終止形	学	ぶ	ー。
連体形	学	ぶ	ーので ーとき
仮定形	学	べ	ーば
命令形	学	べ	ー。

活用のある語の送り仮名

・動詞
原則　活用語尾を送る。
(例外)　映らない・映ります・映る。
　教わる・味わう・逆らう・始まる　など

・形容詞
原則　活用語尾を送る。
　快かろう・快かった・快くない・快い。
(例外)　語幹が「し」で終わる形容詞は、「し」から送る。
　美しい・楽しい・悲しい
(例外)　その他の主な例外
　大きい・明るい・冷たい・危ない

・形容動詞
原則　活用語尾を送る。
　立派だろう・立派だった・立派でない・立派になる・立派だ。
(例外)　「か」「やか」「らか」を含む形容動詞は、その部分から送る。
　静かだ・穏やかだ・朗らかだ

関連する語の送り仮名

同じ漢字を含む意味が関連する語は、原則として漢字の読みが共通するように送り仮名を付ける。
(例)　動く・動かす
　※「動かす」は、「うごかーす」と語幹・活用語尾に分けられるが、「動す」とはならない。

確認テスト

(1) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

人形をあやつる。

〔　　　　〕

(2) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

ご要望をうけたまわる。

〔　　　　〕

(3) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

とてもかしこい人。

〔　　　　〕

(4) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

いちじるしい進歩。

〔　　　　〕

(5) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

なごやかな雰囲気（ふんいき）。

〔　　　　〕

(6) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

あきらかな間違（まちが）い。

〔　　　　〕

活用のない語の送り仮名

・**名詞**

原則 送り仮名を付けない。

月・山・彼（かれ）・何

（例外）他の読みと間違（まちが）えるおそれがあるものなどは最後の音節を送る。

後（うし）ろ・自（みずか）ら・情（なさ）け・勢（いきお）い・辺（あた）り

※活用のある語が変化して名詞になったもの（転成名詞）は、元の語の送り仮名の付け方にそろえる。

(動)動く → (名)動き　(形)重い → (名)重み　(形)正しい → (名)正しさ

・**副詞**

原則 最後の音節を送る。

必（かなら）ず・少（すこ）し・再（ふたた）び・全（まった）く・専（もっぱ）ら

（例外）主な例外

直（ただ）ちに

・**連体詞・接続詞**

原則 最後の音節を送る。

我（わ）が・故（ゆえ）に・及（およ）び

※連体詞・接続詞はひらがなで書くことも多い。

確認テスト

(1) 次の――線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

うしろから声をかけられる。

〔　　　〕

(2) 次の――線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

しあわせが訪(おとず)れる。

〔　　　〕

(3) 次の――線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

たよりが届く。

〔　　　〕

(4) 次の――線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

世界でもっとも高い山。

〔　　　〕

(5) 次の――線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

あくる日の朝。

〔　　　〕

(6) 次の――線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

ねばりづよさが私の良さだ。

〔　　　〕

鍵（かぎ）

茨木（いばらぎ） のり子

一つの鍵が　手に入ると
たちまち①扉（とびら）はひらかれる
硬（かた）く閉（と）ざされた内部の隅々（すみずみ）まで
明暗くっきりと見渡（みわた）せて

人の性格も
謎（なぞ）めいた行動も
物と物との関係も
複雑にからまりあった事件も
なぜ　なにゆえ　かく在ったか
どうなろうとしていたか
どうなろうとしているか
あっけないほど　すとん　②と胸に落ちる

ちっぽけだが
それなくしてはひらかない黄金（おうごん）の鍵
人がそれを見つけ出し
きれいに解明してみせてくれたとき
ああ　と呻（うめ）く
③私も行ったのだその鍵のありかの近くまで
もっと落ちついて　ゆっくり佇（たたず）んでいたら
探し出せたにちがいない

鍵にすれば
出会いを求めて
身をよじっていたのかも知れないのに

木の枝に無造作にぶらさがり
土の奥深（おくふか）くで燐光（りんこう）を発し
虫くいの文献（ぶんけん）　聞き流した語尾（ごび）に内包され
海の底で腐蝕（ふしょく）せず
渡り鳥の指標になってきらめき
束になって空中を　ちゃりりんと飛んでいたり

生きいそぎ　死にいそぐひとびとの群れ
見る人が見たら
この世はまだ
あまたの鍵のひびきあい
ふかぶかとした息づきで
燦然（さんぜん）と輝（かがや）いてみえるだろう

確認テスト 詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) 「鍵」の詩の種類として適当なものを二つ選びなさい。

ア 文語詩　イ 口語詩
ウ 定型詩　エ 自由詩　オ 散文詩

〔　・　〕

(2) ――線①「扉はひらかれる」とあるが、これはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア 謎や秘密が解き明かされること。
イ 束縛から解き放たれること。
ウ 見知らぬ人と打ち解けること。

〔　〕

(3) ――線②「胸に落ちる」の意味を選びなさい。

ア 感動する　イ 想像する
ウ 納得する　エ 反省する

〔　〕

(4) ――線③「私も行ったのだその鍵のありかの近くまで」に用いられている表現技法として適当なものを選びなさい。

ア 直喩　イ 体言止め　ウ 倒置　エ 対句

〔　〕

(5) 詩の内容に合うものを選びなさい。

ア 鍵を探し出すには、その問いに急いで取り組む必要がある。
イ 人目につかないところに鍵はあり、決して手に入らない。
ウ この世の中は、謎や秘密とそれを解明する鍵で満ちている。

〔　〕

アイスプラネット

精密	【意味】細部まで巧妙（こうみょう）に作られていること。 【例文】職人が精密な時計を作り上げる。
いかにも	【意味】まさしく。みるからに。 【例文】いかにも毒がありそうなキノコだ。
蛇行（だこう）	【意味】蛇（へび）のように曲がりくねって進むこと。 【例文】石狩川（いしかりがわ）は蛇行している。
はるかに	【意味】程度の差がはなはだしいさま。 【例文】予想をはるかに上回る成果だ。
めったに……ない	【意味】ほとんど……ない。まれにしか……ない。 【例文】この虫はめったに捕（と）れない。
口実	【意味】言い逃（のが）れや言いがかりの材料、理由。 【例文】病気を口実に会議を欠席する。
極端（きょくたん）	【意味】普通（ふつう）から外れ、大きく偏（かたよ）っているさま。 【例文】極端な意見を述べる。

クマゼミ増加の原因を探る

さらす	【意味】日光や風雨の当たるままにしておく。 【例文】外気にさらされ、頬（ほお）が赤くなる。
推定	【意味】ある事実をもとに、こうだろうと推（お）し量ること、判断すること。 【例文】原因を推定する。
左右する	【意味】影響（えいきょう）し、思うままに動かす。影響を与（あた）える。 【例文】農作物の収穫（しゅうかく）量は天候に左右される。
必須（ひっす）	【意味】必ず用いるべきこと。なくてはならないこと。 【例文】本選出場のためには勝利が必須だ。
……に対し	【意味】……に比べ。 【例文】兄が落ち着いた性格なのに対し、弟は活発だ。
うのみにする	【意味】（鳥の鵜（う）が魚をかまずにのみこむように）人の言うことなどを十分検討せずにそのまま受け入れる。 【例文】人の意見をうのみにせず、自分で考える。

短歌に親しむ

託す	【意味】気持ちや考えを他のものを通じて表現する。 【例文】歌に思いを託す。
みずみずしい	【意味】新鮮で生き生きしているさま。 【例文】採れたての野菜はみずみずしい。
臨場感	【意味】実際にその場にいるかのような感じ。 【例文】実際に会場にいるかのような臨場感がある。
賛歌	【意味】賛美する歌。あるものをほめたたえる歌。 【例文】青春への賛歌を歌う。
我が物顔	【意味】まるで自分のものだというような顔つきや態度。 【例文】他人の家なのに我が物顔でふるまう。

言葉の力

いやおうなしに	【意味】有無を言わせずに。 【例文】いやおうなしに外に連れ出された。
秘める	【意味】人に知られないよう内に隠しもつ。 【例文】恋心を胸に秘める。
えもいわれぬ	【意味】何とも言い表せない。 【例文】えもいわれぬ味が口の中に広がった。

手応え	【意味】働きかけたことに対する確かな反応、感じ。 【例文】この仕事には手応えがない。
たわいもない	【意味】とりとめもない、取るに足らない。 【例文】たわいもない話をしながら時間をつぶした。
もしくは	【意味】あるいは、または。 【例文】今日、もしくは明日に届くと思います。
機能	【意味】あるものに備わっている働き、役割。 【例文】緑地には周囲の気温上昇（じょうしょう）を抑（おさ）える機能もある。
ぞっとする	【意味】恐（おそ）ろしさなどのために体がふるえ上がるような感じがする。 【例文】もし失敗していたらと思うとぞっとする。
眉（まゆ）をひそめる	【意味】不快さや心配などのために眉のあたりにしわを寄せる。 【関連語】眉を開く…心配事がなくなってほっとする。晴れ晴れとした顔になる。 眉ひとつ動かさない…全く表情を変えない。動揺（どうよう）しない。 眉根を寄せる…不快感などから顔をしかめる。
取り繕（つくろ）う	【意味】具合の悪いことをごまかすためにうわべをよそおう。 【例文】話を変えてその場を取り繕った。
地におちる	【意味】名声や評判などが一度におとろえ、すたれる。 【例文】うそがばれて彼（かれ）の名声は地におちた。
思いをはせる	【意味】遠く離（はな）れたもののことを思う。 【例文】昔の時代に思いをはせる。

面（おも）もち	【意味】内面の気持ちが表れた顔つき。 【例文】神妙（しんみょう）な面もちで挨拶（あいさつ）する。
動揺（どうよう）する	【意味】平静さを失う。心がゆれ動き、不安定になる。 【類義語】狼狽（ろうばい）する・うろたえる
……ものの	【意味】……ではあるが、しかし。とはいえ。 【例文】走ったものの、間に合わなかった。
立ち尽（つ）くす	【意味】じっと立ったままでいる。 【例文】突然（とつぜん）の出来事に立ち尽くしてしまった。
ひたすら	【意味】ただそのことだけに集中するさま。 【例文】何も考えずひたすら歩き続けた。
肩（かた）を落とす	【意味】力が抜（ぬ）けて肩が落ちるほど落胆（らくたん）する。 【関連語】肩を持つ…一方の味方になる。援助（えんじょ）する。 肩で風を切る…肩をそびやかし、得意そうに歩く。 肩の荷が下りる…責任や義務から解放されて気が楽になる。
振（ふ）り絞（しぼ）る	【意味】声や力などを絞り出すように出し尽くす。 【例文】声を振り絞って応援した。
万が一	【意味】万の中に一つあることのように、ほとんどないことだがごくまれにあること。ひょっとして、もしや。 【例文】万が一優勝したらこれをあげよう。
無邪気（むじゃき）	【意味】邪心、悪意がないこと。 【類義語】天真爛漫（てんしんらんまん）

字のない葉書

三日にあげず	【意味】間をおかず、毎日のように。 【例文】実家から三日にあげず連絡がくる。
おろそか	【意味】いいかげんに済ませるさま。 【類義語】なおざり
こそばゆい	【意味】照れくさい。くすぐったい。 【例文】先生からほめられ、こそばゆい。
命からがら	【意味】かろうじて命だけは失わずに。 【例文】命からがら逃げてきた。
おびただしい	【意味】数や量が非常に多いさま。 【例文】年末の商店街はおびただしい人が行き交っている。
はしゃぐ	【意味】うれしさで、調子に乗って騒ぐ。 【例文】プレゼントをもらってはしゃぐ。

モアイは語る――地球の未来

絶海	【意味】陸から遠く離れた海。 【例文】イースター島は絶海の孤島だ。
消滅	【意味】消えてなくなること。 【類義語】消失
ままならない	【意味】思い通りにならない。思うままにならない。 【例文】世の中というものは、何かとままならないものだ。
直面	【意味】直接に物事に対すること。 【例文】危機に直面したが、なんとか乗り越えた。
根本（的）	【意味】物事を成り立たせるおおもと。 【例文】そのやり方は根本的に間違っている。
繁栄	【意味】栄えて発展すること。 【例文】子孫の繁栄を願う。
有限	【意味】限りがあること。 【対義語】無限

やはり	【意味】一般（いっぱん）的な考えや予想と同じであるさま。思った通りに。いろいろ考えてみても結局は。 【例文】日本を代表する山といえば、やはり富士（ふじ）山だろう。
失意	【意味】望みがかなわず、がっかりすること。 【対義語】得意
原理	【意味】物事・現象を成り立たせる根本的な法則。 【例文】てこの原理を応用する。
偶然（ぐうぜん）	【意味】因果関係がなく、予期しない出来事が起こるさま。 【対義語】必然
目（ま）のあたり	【意味】目の前。眼前。 【例文】事件を目のあたりにする。
あくまで	【意味】物事をある範囲（はんい）に限定するさま。 【例文】公式大会ではないので、これはあくまで参考記録だ。
駆使（くし）	【意味】自由自在に使いこなすこと。 【例文】最新の技術を駆使する。
感嘆（かんたん）	【意味】感心してほめたたえること。 【例文】作品の出来ばえに感嘆の声があがる。
目を奪（うば）われる	【意味】あまりの美しさ、すばらしさに見とれる。 【関連語】目を凝（こ）らす…じっと見つめる。 目を留める…気になり、注意して見る。 目を引く…人の目を引きつける。

竹馬(ちくば)の友	【意味】（竹馬に乗ってともに遊んだような）幼い頃(ころ)からの友人。幼なじみ。 【例文】彼(かれ)は私の竹馬の友だ。
ひっそり	【意味】物音や人の気配がなく、静かなさま。 【例文】商店街は、昼間だというのにひっそりしている。
はばかる	【意味】差し障(さわ)りがあるのでつつしむ。気がねする。 【例文】友は辺りをはばかって、声をひそめた。
問い詰(つ)める	【意味】どこまでも問いただす。 【関連語】追い詰める…逃(に)げ場がないところまで追い込(こ)む。 思い詰める…そのことだけをひたすら考え、悩(なや)む。 通い詰める…同じ所に休みなく通う。
いきり立つ	【意味】激しく怒(おこ)って興奮する。 【例文】参加者は私の意見にいきり立って反論した。
正当	【意味】正しく、道理にかなっていること。 【対義語】不当
私欲	【意味】自分の利益ばかりをむさぼろうとする心。 【関連語】私利私欲…自分だけの利益や、それを得ることばかりを考えること。
うぬぼれる	【意味】自分が実際以上に優(すぐ)れていると思い込んで得意になる。 【例文】一度勝ったからといって、うぬぼれてはいけない。
無二	【意味】二つとないこと。かけがえのないこと。 【例文】彼女(かのじょ)は無二の親友だ。

ほくそ笑(え)む	【意味】物事が思い通りになり、一人ひそかに笑う。 【関連語】ほほ笑む…声を立てずににっこり笑う。 あざ笑う…ばかにして笑う。あざけって笑う。 せせら笑う…小ばかにして笑う。
じだんだ（を踏(ふ)む）	【意味】悔(くや)しさや怒(いか)りで地を激しく何度も踏みつけること。 【例文】だまされたと知り、じだんだを踏んで悔しがった。
陽気	【意味】朗(ほが)らかで明るいこと。にぎやかなこと。 【対義語】陰気(いんき)
満面	【意味】顔一面。顔じゅう。 【関連語】喜色満面…喜びが顔一面に表れていること。 得意満面…得意そうな様子が顔一面に表れていること。
たたえる	【意味】ある表情を浮(う)かべる。感情を表情にあふれんばかりに表す。 【例文】先生はいつも優(やさ)しいほほ笑みをたたえている。
未練	【意味】あきらめきれないこと。心残りであること。 【例文】もう故郷に未練はない。
夢見心地(ごこち)	【意味】夢を見ているような、うっとりとした気持ち。 【関連語】夢心地…夢のようなうっとりした気持ち。 夢うつつ…夢か現実かはっきりしない、意識がぼんやりしている様子。 夢物語…夢のように現実味のない話。

語句	説明
悠々(ゆうゆう)	【意味】ゆったりと落ち着いているさま。 【関連語】悠々閑々(かんかん)…のんきに、ゆっくりとしているさま。 悠々自適…世間のわずらわしさから離れ、心静かに生活すること。
はたと	【意味】状況(じょうきょう)や動作が急に変化するさま。 【例文】風がはたとやんだ。
立ちすくむ	【意味】恐怖(きょうふ)や驚(おどろ)きで、立ったまま身がすくむ。動けなくなる。 【例文】恐ろしさのあまり、その場に立ちすくんだ。
ひるむ	【意味】おじけづいて気力がくじける。尻込(しりご)みする。 【例文】強敵相手に、ひるむことなく戦った。
まさしく	【意味】確かに。まさに。間違(まちが)いなく。 【例文】あの人はまさしく音楽の天才だ。
思うつぼ	【意味】予期したところ。意図した通りになること。 【例文】ここで諦(あきら)めたら相手の思うつぼだ。
精も根も尽(つ)きる	【意味】精力も根気も使い果たし、気力を失う。疲(つか)れ果てる。 【例文】困難な仕事の連続で、精も根も尽きた。
無心	【意味】邪念(じゃねん)や雑念がないこと。 【例文】子供たちが無心にボールを追っている。
独り合点(がてん)	【意味】自分だけの考えでわかったつもりになること。 【関連語】独り占(じ)め…自分ひとりだけのものにすること。独(どく)占(せん)。 独り相撲(ずもう)…相手にかまわず、自分ひとりだけで意気込むこと。 独り舞台(ぶたい)…大勢の中であるひとりだけが目立って活躍(かつやく)すること。

語句	説明
まさか	【意味】そうなりそうもないさま。いくら何でも。 【例文】まさか明日も雨ということはないだろう。
仰天(ぎょうてん)	【意味】ひどく驚くこと。 【関連語】あっけにとられる…意外なことに出会い、驚きあきれる。 腰(こし)を抜(ぬ)かす…驚きや恐怖で立ち上がれなくなる。 肝(きも)を潰(つぶ)す…ひどく驚く。
小耳に挟(はさ)**む**	【意味】聞くとはなしに聞く。ふと耳にする。 【関連語】小首をかしげる…首を少し傾(かたむ)け、考える。疑問に思う。 小腹が減る…少し腹が減る。
どよめく	【意味】大勢の人の声でざわめく。 【例文】新記録達成のアナウンスに場内がどよめいた。
まじまじ	【意味】視線をそらさず、一心に見つめるさま。 【関連語】きょろきょろ…落ち着かない様子で周囲をあちこち見回すさま。 じろじろ…無遠慮(ぶえんりょ)にしつこく見るさま。 じっと…視線を動かさず集中して見るさま。
空虚(くうきょ)	【意味】実質的な内容や価値がないこと。 【例文】なんの根拠(こんきょ)もなく、空虚な説にすぎない。
赤面	【意味】恥(は)ずかしさで顔を赤くすること。 【例文】言い間違えて、赤面する。

鍵

解明	【意味】解き明かすこと。不明な点をはっきりさせること。 【例文】謎（なぞ）を解明する。
内包	【意味】内部に含（ふく）みもつこと。 【例文】現代社会はさまざまな問題を内包している。
あまた	【意味】数や量が多いさま。多数。 【例文】あまたの星が輝（かがや）いている。

写真　アフロ

参考文献　小学館『新編 日本古典文学全集』

©RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。